
リリカル銀魂～魔法少女と銀髪の侍と白銀の刀～

ナナフシ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リリカル銀魂／魔法少女と銀髪の侍と白銀の刀／

【NZコード】

N2725Z

【作者名】

ナナフシ

【あらすじ】

赤夜叉さんの許可をもらつて書きました。

赤夜叉さんの『『銀魂×魔法少女リリカルなのは』／魔法少女と銀髪の侍』と黒龍さんの『リリカル銀魂ライダー／異世界鎮魂歌』を参考に書いています。

天人によって侍は衰退の一途をたどっていた。

そんな中、己の侍魂を決して曲げね男が一人居た。その男の名は坂田銀時。この物語の主人公である。

銀時には相棒がいる。だが、人ではない。

銀龍と言う刀がある。

普段は姿を見せず、銀時が任意したとき、銀時がピンチの時に姿を現す。

銀龍はただの刀ではなく、喋る刀であった。

銀時は源外に呼ばれて工場に向かい、装置の実験体となつた。そして、飛ばされたのは『リリカルなのは』の世界だつた！

銀時は魔法少女と出会い、事件に巻き込まれていく。

新ハと神楽が無印編では出てきません。すみません……被らない様にしたらこうなりました。後、新ハはロリコンアニメオタクにするつもりなので

僕が書いているもう一つの銀魂の一次小説『銀魂～冷血の鬼姫の日常～』のオリキャラ達が出てきます

第一訓・始まりは突然に（前書き）

ナナフシ「どうも…ナナフシです！」

銀時「こいつが書くなんてな」

ナナフシ「悪いか！後、黒龍さんに一言……銀龍の件ありがとうございます！」

銀時「考えてくれたもんな」

ナナフシ「もう俺マジで感謝感謝です！」

銀時「その内銀八先生をやるつもりだからよろしく…」

ナナフシ「それでは『リリカル銀魂』魔法少女と銀髪の侍と白銀の刀』始まります！」

第一訓：始まりは突然に

「ここは江戸の歌舞伎町。ここに万事屋銀ちゃんと言つ何でも屋がある。

中では銀髪で天然パーマの男、坂田銀時。この物語の主人公である。他には……て、あれ？居ないんですけど。

「ああ、新ハはお通のライブ、神楽は定春の散歩だ」
え？マジで？

「マジだ」

銀時は地の文と会話をしていた。

プルル、プルル。

すると、電話が鳴つた。

銀時が電話を見てダルそうに取る。

「ハアイ、万事屋でえす」

銀時が怠そうに言つた。

『銀の字か？』

「んだ。じーさんじやねえか

電話の相手は江戸随一の機械師、平賀源外からであった。

『依頼なんじやが』

「何だよ」

銀時は訪ねた。

『新しい発明品を開発したから来てくれ』

「絶対口クな発明品じやねえだろ。それに実験体にされるのがオチだ。断る

『そんな事言つて良いのか？』

「あ？」

『来ないなら今までのツケ今日までに耳揃えて払え』

銀時はそれを聞いて行かざるを得なかつた。

「行くか……」

『主よ……ちゃんと払わなければならぬではないか』

「銀龍の言う通りです」

銀時は誰もないのに、手に突然刀が現れてそれと話していた。

銀龍は白かつた。柄から鞘まで白かつた。鍔は白銀だつた。

刀身は見せてないが、刀身も白銀である。

銀龍はまた姿を消した。

銀龍は普段は見えないのだ。銀時の任意、ピンチの時に姿を現す。そのまま銀時は工場へ向かつた。

*

「おーい、じーさん」

銀時が工場の中に声を掛けた。

「来たか銀の字」

工場の中から老人が一人出てきた。
平賀源外である。

「ん？ 銀の字。あいつ等はどうした？」

源外は新八と神楽が居ない事を聞いた。

「二人共野暮用」

銀時はそう言った。

「まあ、良い。中に入れ」

源外に言われて銀時は工場の中に入った。

「おおー！」

中に入った銀時は驚きの声を上げた。
工場の中には大きな装置があつた。

「おい、じーさん、何だよこいつア？」

「こいつはな瞬間移動装置だ」

「瞬間移動装置？」

銀時は首を傾げた。

「原理はターミナルと同じだが、コイツは生身の人間を移動出来るる様に作つてあるのよ」

「スゲエなア おい」

銀時は装置をマジマジ見ていた。

「で、やっぱ実験体になれと？」

「ううだ。銀の字には装置の中に入つてもうつて瞬間移動してもう」

「ハア、しょうがねえ」

銀時は頭を搔きながら言った。

銀時は装置の中に入ろうとした時に足を止めた。

「じーさん。装置の中に変なボタンとかねーだろうな？」

「ねーよ。んなもん。さつさと中に入れ

「わーつたよ」

銀時は装置の中に入った。

装置の扉が重い音を立てて閉じた。

「それじゃ装置を作動させるぞ」

源外は装置のスイッチを押した。

「ちなみに銀の字。どこに移動するかは俺にもわからん。気を付けろ」

「ジジイイイイイー！ そう言つ事は先に言ええええー！」

銀時が怒鳴った直後だった。

ビービービービー。

突然警報が鳴り響いた。

「おい！ ジジイ！ 何だよこれ！？」

銀時は装置の外に居る源外に怒鳴った。

「ん？ すまん…… 銀の字…… 機械が暴走した」

「ジジイイイイイイ！また欠陥品作りやがつてえええええ！」

『主！落ち着いてください！』

銀時が源外に向かつて怒鳴つて、銀龍が慰めている時だつた。

バチッと音と共に装置の中から強い光が発した。だんだん光がおさまる。

源外が装置の扉を開けると銀時の姿はなかつた。

「…厄介な事にならなきや良いんだが」

源外は一人になつた工場で呴いた。

*

「ん？」

銀時は目を覚ました。

上半身を起こして、周りを見回した。

どこかのコンクリートで出来た道で、周りはコンクリートで出来た壁がある。そして空は暗く、月が出ていた。

「どー、ーー？」

銀時はそう呴いた。

第一訓・始まりは突然に（後書き）

ナナフシ「上手く書けるか不安」

銀時「前向きに考える」

ナナフシ「そうだな！」

ナナフシが元気を取り戻した途端だつた。

新ハ・神楽「ナナフシイイイイイイ！」

ナナフシ「はい？つてゴフアアアアアアア！」

ナナフシは新ハと神楽に蹴飛ばされた。

ナナフシ「何！？」

新ハ「何で僕達が出てないんだアアアアアア！」

神楽「そうアル！駄眼鏡はともかく何で私が出てないアルかアアアアアアア！」

アアアア！」

新ハ「神楽ちゃん！？」

ナナフシ「いや、これは考えがあつて」

新ハ・神楽「死ねええええええええ！」

ナナフシ「ぎやあああああああ！」

銀時「……これからよろしく頼むぜ」

第一訓：主人公は厄介事に巻き込まれるのがお決まり（前書き）

ナナフシ「次回から銀八先生コーナーを始めたいと思います！」

銀時「いきなりだな！」

ナナフシ「いや、今回リリカルなのはキャラ出るからだ」

銀時「それでつて……」

ナナフシ「今回は銀龍が使われる！」

銀時「ネタバレ！」

ミラクル「ナナフシはそう言つ人だし…… てか、何故ミラクル（エイト）！」

ナナフシ「ミラクル と神楽は前書きと後書きに出してるんだよ。無印編出番ないから」

銀時「だつてよ。神楽、ミラクル」

ミラクル「いや、銀さんまで！」

神楽「ミラクル の理由が知りたかったら、『銀魂』冷血の鬼姫の日常～』の質問コーナー、もしくは霜月サヤの『妖と夜叉』を見る理由がわかるね」

ミラクル「僕は新ハジやあああああ！」

銀時・ナナフシ「『リリカル銀魂』魔法少女と銀髪の侍と白銀の刀』始まるぜ！」

ミラクル「無視するなアアアアアアアア！」

第一訓：主人公は厄介事に巻き込まれるのが決まり

「だアアアアアアア！チクシヨー！あのクソジジイのせいで何か良
くわからねえ場所に飛ばされちまつたじやねえか！あのクソジジイ
！！帰つたら絶対瞬間移動させてやるからなア！」

『主よ。落ち着いてくれ』

銀龍が銀時を慰める。

『今怒鳴っていても仕方がないと言つて銀時を慰めた
『それ二主よ。周りを見る限り工吉にはない事は確

銀龍の言葉を聞いて銀時は……。

「ああ！ちくしょう！イライラする！あの綺麗な星空までイライラ

銀時は顔を上に向けて怒鳴る。

銀時がそう怒鳴つてゐる時だつた。

二二

爆発音「りしきものが聞こえた。」

主！行こてみましょう！』

つ
た。

*

銀時が聞いた轟音の発信源は動物病院であつた。そしてそこには栗色の髪をリボンでツインテリ...

そしてそこには栗色の髪をリボンでツインテールに結んだ美少女。

「…高町なのはがフュレットを抱えていた。

そして驚く彼女の眼前には病院の壁に埋まつて、黒い何かがもがいていた。

「…」

なのはは慌ててフュレットを抱えて逃げ出した。

なのはは学校帰りに酷い怪我をしたフュレットを拾い、動物病院で手当をしてもらつた。

そして夜、頭の中に謎の声が聞こえて、気になつたなのはは動物病院に来た。

そして今の状態になつてゐるのだ。

私、高町なのははフュレットさんを抱えてあの、変な怪物から逃げています。

あの怪物にも驚いたけど、フュレットさんが喋つた事にも正直驚いています。

それに周りにも景色もおかしいし、正直頭の中はぐちゃぐちゃなの。

「あの、お礼は必ずします！だから僕にあなたの力を…！」

「お礼とかそんな事言つてゐる場合ぢゃないでしょ」

フュレットさんがさつき私に力があるつて言つたけど、正直私にそんな力があるかは分からない。

全然今の状況は把握できないけど、あの怪物をどうにかする力があるなら

。

「ぐおおおおおおおおおおおお…！」

私が逃げながらわざわざ考えていて、怪物が雄たけびを上げて私に飛び掛ってきた。

「つーー！」

私はもうダメだと思い思わず目を瞑ってしまった。
でも、いつまで経ってもくるはずの痛みがこない事を不思議に思つた私はゆっくりと目を開けた。

「おーおー、トラブル遭遇とはついてねえな」

黒い服の上に白い和服を半分抜いた状態で着て、銀髪に木刀を持った男の人気が立っていました。

なのはがピンチになつたその時に銀時がなのはの前に立ち、木刀で怪物を抑えたのだ。

銀時はそのまま怪物をぶつ飛ばした。

「おーおー、トラブル遭遇とはついてねえな」

銀時はまたメンドーな事に首を突つ込んでしまつたと思い、メンドくさそうに頭を搔く。

そして、後ろに居るなのはに顔を向ける。

「つで、大丈夫かお前？」

「えーは、はい！ ありがとつづります！」

なのはは俺を言って頭を下げる。

「あの、ありがとうござります」

フェレットも頭を下げた。

「イタチが喋つた！」

銀時はフェレットが喋つた事に驚いていた。

「あの、フェレットなんんですけど」

「イタチもフェレットも変わらねえだろ」

「いや、変わりますよー！」

銀時とフェレットが言い合いでいるところ……。

「グオオオオオオオ！」

銀時にぶつ飛ばされた怪物は怒っている様だった。

「改めて見ると気持ち悪いなコイツ」

銀時は怪物を見ていつもの様なダラけた口調で答えた。
まあ、この人、エイリアンとか、人に寄生する刀とかと戦っています

しね。

銀時は横田で怪物を見ながらなのはに話し掛けた。

「えつと、お前等名前は？」

「え？ た……高町なのはです」

「僕はユーノ・スクライアです」

なのはとユーノは戸惑いながらも自己紹介した。

「じゃあ、なのはとユーノ、お前等はそこに居るよ

銀時は軽く手を振るうと怪物の元へ向かう。

「えつ！ ちょっと待ってください！ 危ないですよ！」

ユーノは必死に叫んで銀時を止めようとした。

ユーノは銀時が木刀で怪物を吹き飛ばしたのを見ていた。

だが、アレは『ジユエルシード』と言つ『ロストロギア』思念体。魔法も使えない銀時がどうにか出来る相手ではない。

銀時にも自分を抱きかかえているなのは同様『リンカーノア』があり、しかもなのはより高い魔力量を有しているのがわかる。だが、なのは同様魔法の力に目覚めていない事をわかっている。

銀時は魔法なしの肉弾戦戦わなければならぬ。

それは無謀と言いようがない。

だが、ユーノは後々驚かされる。

ズババババババ！

銀時はユーノの予想を遙かに上回っていた。

銀時が思念体に近づいた時襲つてきたが、銀時は凄まじいスピードで木刀を振り、思念体をバラバラにした。

「す……す……！」

「なんて強さだ」

なのはとユーノは銀時の強さに驚いていた。

バラバラになつた怪物の破片は飛び散り、壁や電柱を破壊する。

なのはは銀時の剣の強さに見惚れていた。自分の家族も剣の腕はかなりの物だが、銀時の剣技はそれ以上の物を感じた。

「はい、終了オ」

銀時は思念体を倒したと思い、腰に木刀を挿し、なのはとユーノの所に戻る。

だが、思念体の欠片はじょじょに集まっていき、さつきの丸いブヨブヨの怪物に戻つた。

「グオオオオオオ！」

怪物は雄叫びを上げて銀時に襲いかかる。

「危ない！」

なのはが叫び声を上げ、銀時は後ろを振り向く。油断していた事もあり、銀時は木刀の刀身で防ごうとした。

『我が主よ……油断してはダメではないか』

銀龍がそう言つて姿を現して、銀時に銀色のオーラを纏う。よく見るとこれは魔力である。

その纏つたオーラは白銀の鎧シルバー・オブ・アーマーと言つ。

オーラそのものがバリアジャケットの強度を持ち、A Aランクの攻撃を喰らつても平氣になる。

更にはそれを纏つている時の銀時は身体能力が上がる。

何とかそれで怪物からの攻撃を防いだ。

そのまま白銀の鎧シルバー・オブ・アーマーは消えた。

ユーノは白銀の鎧に驚いていた。

（い、今のは魔力で出来ていた！何であの人が魔力を使えるんだ！？）

ユーノはそれだけではなく、銀龍にも驚いた。

（そ、それに刀が喋つてる！）

ユーノはデバイスかと思ったが、デバイスではない事は確かである。

そしてなのはは……。

「か……刀が喋つてゐる…」

銀龍に驚いていた。

それと同時に白銀の鎧の綺麗さに見惚れていた。

「あ？ こいつか？ 不思議だよな……喋つてんだから……」

銀時も始めての時は驚いていたらしい。

でも今では慣れている。

銀時は怪物に目を戻した。

「ぐあああああ…」

まだ動いている。

鞘から銀龍を抜いた。

そして銀時は銀龍を振り上げた。

「オラア！」

そして振り下ろした。

すると銀色の斬撃が放たれた。

それも魔力で出来ていた。

これを魔力操作マジックコントロールと言う。

銀時の戦闘スタイルに合わせた魔法攻撃が出来る様になる。

つまり、自分の考えた魔力攻撃が可能になる。

（魔力の斬撃まで……一体何者なんだこの人！？）

ユーノは驚きの連発であった。

そして斬撃が怪物に直撃して真つ一つに斬れた。

だが、やはり元に戻ってしまう。

「ちつ、こいつ不死身か……」

『厄介ですね』

銀龍も色んな攻撃方法があるが全て無駄だと踏んだ。

「どうすれば良いの！？」

「いけない！ あれを何とか『封印』しなければいけないんだ！」

「その封印つてどうすれば良いの？」

なのはとユーノが封印の事について話しているのに気付き、銀時は

銀龍でバラバラに斬つたり、魔力攻撃を行つたりして時間を稼いだ。

「さつき言つた事は覚えてる?」

「魔法の事?」

「そう、それを使うにはさつき渡した宝石が必要なんだ」

「これの事?」

なのははさつきユーノから貰つた赤い綺麗な宝石を見せた。

「それで、それを手に、口を開じ……心を澄ませて……僕の言った通りに繰り返して……」

なのはは口を開じてユーノが言つた言葉を繰り返す。

「『我……使命を受けし者なり』」

「『我……使命を受けし者なり』」

「『『えと、契約の元、その力を解き放て』』

「『『風は天に……星は空に……』』

「『『風は天に……星は空に……』』

「『『そして、不屈の心は……』』

「『『そして、不屈の心は……』』

「『『そして、不屈の心は……』』

『『『この胸に……』』

なのはとユーノの声が重なる。

『『『』の手に魔法を……レイジングハート・セーブ・アーツ・アップ!』』
するとなのはの体が光に包まれていく。

<Stand by ready, set up!>

「うわっ！眩し！」

あまりの光に銀時が目を細める。

光が收まると白いバリアジャケットを着ており、手にレイジングハートを持つて浮かんでいるなのはが居た。銀時はその姿を見て唖然した。

「僕らの魔法は発導体に組み込んだプログラムと呼ばれる方式です。そしてその方式を発動させるために必要なのは術者の精神エネルギーです！！そしてあれは……忌まわしい力の元に生み出されてしまつた思念体。あれを停止させられるにはその杖で封印して元の姿に戻さないと行けないんです！！」

なのははレイジングハート見て聞く。

「よくわかんないけど……どうすれば良いの？」

「攻撃や防御みたいな基本魔法は心に願うだけで発動しますが、より大きな力とする魔法には呪文が必要なんです！」

「呪文？」

「心を澄まして……心中にあなたの呪文が浮かぶはずです」
そう言わてなのはは目を閉る。そしてなのはは目を開ける、その目は真剣そのものだつた。

「リリカル、マジカル」

「封印すべきは忌わしき器、ジュエルシードー」

杖を掲げながら呪文を紡ぐなのは、それを見ながらコーカーは叫ぶ。

「ジュエルシード、封印！」

<Sealing Mode . Set up>

なのはの魔力糸が敵を縛り上げ、怪物の額に『????』の文字が浮かび上がる。

<Stand by ready>

「リリカル、マジカル……ジュエルシード、シリアル????、封印

！」

その時銀時が、

「なに、あのセリフ！？ 恥ずくない！」

『主よ……あの子も恥ずかしいのだぞ』

場の空氣を壊すようなセリフを言つた。銀龍はなのはも恥ずかしがつていると言つた。なのは恥ずかしがつているのは本当だ。レイジングハートの声に答え、なのはは何故かくるくる横回転しながら呪文を紡ぐ。

く s e a l i n g v g a

そして、なのはの魔力糸が怪物を貫き、宝石の状態に封印する。

「それがジュエルシードです。レイジングハートで触れて」
なのははフェレットの指示に従い、レイジングハートの先を近付けるとジュエルシードが宙に浮かび杖のコア（赤い宝石）に取り込んだ。それと同時に周りの景色が異空間のような不思議な景色から元の普通の景色に戻った。

そしてゆっくりと地面に降りる。

「ふう……」

なのははバリアジャケットを解き、安心して息を吐く。
そしてバタリとコーノが氣を失つて地面に倒れた。

「フェレットさん大丈夫！？」

なのはは氣絶したコーノを抱きかかえて心配そうな顔をする。
さつきのコーノだつて自己紹介したつて言つた……。

「な、なあ」

「ふえつ！？ な、なんですか？」

突然銀時に声を掛けられたなのはは驚いた顔で聞く。

「いや、ここにいると不味くね？」

「えつ？」

なのはは銀時に言われ、周りの景色を見る。道路や電柱は壊れたり没落したりなどかなり酷い状況だつた。
更に、

ピー ポー パー ポー ピー ポー パー ポー !

パトカーのサイレンの音が向こう側から響いてきた。

『主よ。』のままだとどうからどうみても我等がやつた様にしか見えぬぞ』

銀龍の言つた言葉を聞いて銀時は……。

「に、逃げろオオオオオオ !」

「い、ごめんなさい――――！」

銀時となのははその場からすぐ離れる為に全力疾走した。

『我は戻るか』

銀龍は呑氣に言つて姿を消した。

第一訓：主人公は厄介事に巻き込まれるのがお決まり（後書き）

ナナフシ「銀龍も活躍ううううう！」

銀時「そうだな」

銀龍『私は出番が少なくとも多くとも構わん』

ナナフシ「だろうな」

ミラクル（エイト）「いい加減名前を戻せえええええ！」

なのは「新八さん、落ち着いてください」

銀時「なのは、違うぞ。そいつはミラクルだ」

なのは「わ、わかりました」

ミラクル「何吹きこんでんだアアアアアア！」

神楽「それではまたアル！次回から教えて銀八先生コーナー始めるアル！質問があれば送ってきてほしいネ！」

第三訓・謎の組織「なま」用心（前書き）

ナナフシ「ハアイ、今日はオリキヤラ出ます」
銀時「出るのか……」

ナナフシ「はい！」

ミラクル「いつまでこの名前なんだアアアアアアア！」

ナナフシ「いや、広めたいな～って思つて」

ミラクル「何でだアアアアアアア！」

ナナフシ「いや、だつてさ。その名前の生みの親である『霜月サヤ』

がさア。広めてくれても構いませんって」

ミラクル「元に戻せええええええ！」

なのは「『リリカル銀魂』魔法少女と銀髪の侍と白銀の刀』始まり

ます

第二訓・謎の組織には「用心

銀時となのは、ユーノが走り去る所を見ていた人物が居た。

「ククク、面白い力じゃねえか」

それを見ていたのは、天然パーマの男で、背中には薙刀を背負っている。

「それにしても銀の兄貴もここに迷い込んだとはな」

男はそう呟いた。

「銀の兄貴と銀龍のコンビは相変わらずだなア……ククク」

男は楽しみに満ちた笑顔だつた。

男がそうやつていると……。

「雷雅ここ居たの」

後ろからロングヘアの女がやつて來た。

男の名前は雷雅と言つらじい。

「おう、忍か」

雷雅は女の事を忍と呼んだ。

「探したのよ。アンタは私達『雷撃』のリーダーなんだからね」

忍は雷雅に向かつてそう言つた。

「わかつてゐよ。今さつと面白いもんを見ていたんでな」

「面白いもの？」

雷雅の言葉に忍は首を傾げて聞いた。

「銀の兄貴が來ている」

「『白夜叉』が！」

忍は雷雅の言つた言葉に驚いていた。

「どうやら俺等と同じ様に迷い込んだのかもしけねえな」

雷雅は不気味な笑みを浮かべながら言つた。

「で、どうするの？」

「ちょっとくら挨拶してくるわ。攘夷戦争で『迅雷』と恐れられたこの俺……疾風雷雅がな」

雷雅はそう言つと姿を消した。

実は凄く速いスピードで移動したのだ。

「まつたく……先に戻つてよ」

忍も姿を消したのであった。

*

銀時達三人はあの後公園に居た。

『とりあえず自己紹介から始めるか』

「そうだな』

銀龍が言つた事に頷いた三人。

銀龍も自己紹介と言つ事で姿を現した。

『俺の名前は坂田銀時。頼まれれば何でもやる万事屋つてのをやつてんだ。後、銀ちゃんでも銀さんでもテメエ等の好きな様に呼んでくれ』

『私は主の相棒である。銀龍だ』

『私は高町なのはです』

『僕はユーノ・スクライアです』

それぞれ自己紹介を終わらせた後、銀時達はユーノから魔法の事を聞いた。

ユーノからそれを聞き終わった後、銀時も自分の事情を話した。

ユーノは銀時の話を聞いて『次元漂流者』だと言つた。

『『次元漂流者』?』

銀時はもちろん、なのはもわからなかつた。

『簡単に言えば迷子ですよ。未開の世界から何かの拍子で別の世界に飛ばされた人の事です』

銀時はそれを聞いて、

『マジでか?』

確かに辺りを見回す限り江戸ではない。
それに天人さえもいなかつた。

銀時はそれを信じるしかなかつた。

「で、僕からも聞きたいんですが

「何だ？」

ユーノは銀時に聞いた。

「その銀龍は一体なんなんですか？」

「あ、それは私も気になります」

ユーノとなのはは銀龍が気になる様だ。

「コイツか？……」

銀時は黙り込んだ。

そして……。

「何だろうな

ズテーン！

銀時が言つた言葉に一人はズッコケた。

「何で持ち主であるあなたが知らないんですか！？」

「いや、俺もよく知らないんだよねエ。たまたま見つけて使つてゐる
？的な

「いや、何ですかその理由！？」

銀時が言う事にユーノはツッコンでいた。

『主が我を見つけたのは幼少の頃だ。これ以上は言えん』

銀龍はそれだけを言った。

「まあ、わかりました。後一つだけ良いですか？」

『なんだ？』

「あなたはデバイスでもないのに何故魔法を使えるんですか？」

ユーノの言葉を聞いた銀時は……。

「え！？あれ魔法だつたの！？」

「今まで知らなかつたんですか！？」

銀時は攘夷戦争でも使つていたが魔法だとは思つていなかつたらし
い。

たぶん銀時は「不思議な能力が使える刀」とでも思っていたのだろう。

ユーノは銀時が魔法に気付いていなかつた事に驚いた。

「いや、て言うか。俺の世界で魔法は架空の產物だからまさか自分が普通に魔法を使つていたとは思いもよらなかつた銀時だつた。

そして視線を銀龍に戻す。

『我が…………確かにデバイスとやらではない…………我は目覚めた時には主に拾われていたのだ』

どうやら銀龍も何故銀時の魔力を解放する事が出来るのかわからないらしい。

『我は何処で作られ、何処で何をしたか、何故この能力を持つており、使い方、名前しか覚えていないのかは謎なのだ』つまりは記憶には能力と使い方、名前しか覚えていなかつたらしい。

『だが、主は我が何者であるうと拾つてくれたのだ』

銀龍はそれ以来銀時と一緒に居る様だ。

「ま、コイツも自分自身がよくわからねえんだよ」

銀時がそう言つとユーノは「そうですか」と言つて引いた。

「でも、凄いですね」

なのはは目を輝かせながら銀龍を見ていた。

すると……、

「楽しそうじやねえか……俺も混ぜてくれよ」
いきなり男の声が聞こえた。

その声がした方向を見ると……雷雅が居た。

「雷雅！」

「よオ、銀の兄貴」

雷雅はニヤリと笑つた。

ゾワッ。

なのはとユーノは恐怖を感じた。

雷雅の目は戦いたいと言つ目だつた。

「テメエ……何でこの世界にいやがるー！」

銀時は敵意を隠さず口にした。

なのはとヨーノは敵意剥き出しの銀時にも驚いた。

「何……俺も銀の元貴と似た理由でこの世界に来たんだよ。」雷雀は限らずそう言つた。

「テメエも！」

「ああ、俺達の組織のバカ機械師のせいだこの世界に飛ばされたんだよ」

「中華書局影印」

雷雅は「ククク」と笑いながら言った。

ま、今回に挑戦してみたが、今度は明日に挑戦が成功

雷雅は笑つて去つていつた。

銀さん……おの人誰ですか？」

「…………… その話は置ことりません」

銀時はこれ以上聞かれない様に言つた

「ん？ ああそうだな」

銀時はなのはの言つた言葉に頷いた。

「家は今、せんが、」

銀時はなのはの言葉に驚いた。

「助けて貰つたお礼もしたいですし。それに銀さんと銀龍さんとも
もつとお話がしたいので／＼／＼

なのはは頬を赤らめながら言った。

「マジで良いのか？お前の家族が何て言うかわからないぞ」
銀時がなのはを助けた時、銀時が格好良く見えたのであろう。

『そりだぞ。主は大丈夫だが、見ず知らずの男を家に入れるのはどうかと思つぞ』

銀時と銀龍はそう答えた。

「大丈夫です。私を助けてくれた人つて説明すれば、お母さん達は銀さんを泊めるのを許してくれると思います」

「そうか？ならお言葉に甘えて」

銀時はそう言った後、「あ、後」と言った。

「その『ジユエルミート』集め俺も手伝うぜ」

「銀さん『ジユエルシード』だよ」

銀時の間違いをなのはが訂正した。

「居候させて貰う代わりに手伝つてやるよ。俺は万事屋だからな」

銀時がそう言つた。

「でも……」

ユーノは渋つていた。

「十歳を満たない女の子がそれを集めるのは危ないだろ。だから俺も手伝つてやるんだよ」

『我もその意見には賛成だな』

銀龍は銀時の意見に賛成した。

「わ、わかりました」

ユーノは銀時と銀龍との言い合いで勝てないと思ったのだ。

銀時はこうしてなのはの家に居候する事になった。

『おまけ』

銀八「教えて」

生徒「銀八先生！」

銀八「ハアイ、それでは銀八先生コーナーを始めます。アシスタントは」

なのは「高町なのはです」

銀八「はい、その内魔王になる高町なのはがアシスタントだ」

なのは「なりません！」

銀八「早速質問行くけど、一つしか来てないんだよね」

なのは「そなんですか？」

銀八「ああ、と言つて始めるぞ。ペンネーム『月光閃火』さんからの質問

『ども…月光閃火』といふ。

しかし…タグにもあつたが、また新ハをそう扱うか…（黒）。（そ
う言いながら、黒いオーラを放ちつつ右掌から紫焰を立ち上らせる
(汗)

輝刃「…閃火…とりあえず落ち着…」（汗）。あ…さつそくだが
質問…行くぞ？まずは俺からだ。」

1. 銀龍に質問…銀龍つて話にもあつた通り『喋る刀』だが、やは
り人間の姿にもなれるのか？

あ～…確かに、そういうタイプの武器つて大概何かしらの人化設定はありそうだもんな…。次は俺からだ。

2・ナナフシさんに質問…といつか忠告ね?タグにもあつた通り、『新ハは口リコソ』なんてあつたけど…あんまり酷い扱いはしないでよ?（黒笑み&紫焰メラメラ）（汗）

輝刃「…とりあえず、加減はしとけよ（汗）?俺も種族上言えた義理では無いが…（汗）。」「…」

月光閃火の言葉に黙り込んでいた。

銀ハ「まずは一つ田だが」

銀龍『我か?我は人の姿になる事は無理なのだ』

銀ハ「だそうです。一つ田の質問の答えをナナフシ』

ナナフシ「き……氣を付けないと……」
ナナフシはガクガクとなつていた。

銀ハ「と言つ訳で『月光閃火』さん。あまり脅したらダメだぞ」

なのは「質問は以上です」

銀ハ「それではまた次回」

第二訓・謎の組織「は」用心（後書き）

銀時「雷雅が出てきたか」

ナナフシ「はい」

銀時「無印編で出てきたか」

ナナフシ「はい」

銀時「まさか出るとはな」

ナナフシ「はい」

銀時「気をつく」アンタ等はいつまでそのやりとりをやつてんだア
アアアアア！」あ、ミラクル　か

ミラクル　「だから、何でこのまま！？」

神楽「ミラクル　うるさいネ」

なのは「ミラクル　さん落ち着いてください」

ミラクル　「なのはちゃんまで！？」

銀時「しそうがないだろ。結構ナナフシ気に入つてんだから」

ミラクル　「元に戻せええええええええええ！」

ナナフシ「それではまた！」

ミラクル　「無視するなアアアアアアアア！」

第四訓・化け犬には気を付けよう（前書き）

ナナフシ「ミラクル が広まると良いなあ 」
ミラクル 「いい加減にしろオオオオオオオオ！」

ミラクル が木刀で襲いかかってきた。

ナナフシ「ううん、これくらいなら大丈夫だよね！ 口ケラン！」
ドカアン！

ミラクル は黒こげになつた。

銀時「『月光閃火』に殺されてもしらねえぞ」

ナナフシ「……やりすぎたか？」

銀龍『『リリカル銀魂』魔法少女と銀髪の侍と白銀の刀』始まる
ぞ』

第四訓：化け犬には気を付けよ

なのはは朝目覚めてユーノに挨拶をしてから、リビングに向かった。いつもより、騒がしい声が聞こえる。

何故なら……。

「おはようございます。銀さん」

「おう、おはよう」

銀時が居候仕始めたからだ。

銀龍は姿を消しているので気付かれていない。銀時が居候した事により騒がしくなったのだ。朝ご飯では……。

「てつめ、離しやがれ！これは俺のワインナーだ！俺はコイツを生まれる前から田をつけてたんだぞ！…」

「ふざけるな！お前こそ離せ！」

「銀さん！お兄ちゃん喧嘩しないで！」

銀時と恭也はワインナーを箸で引っ張り合いつつ喧嘩する二人を宥めようとするなのは。こんな風に騒がしくなったのだ。

*

なのはは学校でユーノと念話をしていた。

ユーノは魔力が回復したらこのまま自分一人でジュエルシード探しすると言つたが、なのはも手伝つと言つた。

ユーノは渋つたのだが、なのはは魔法が自分のやりたい事かもしれないと言いながら、ユーノを説得する。

その上で銀時ものらしくらりとユーノを説得し、最終的にはユーノ

は折れた。

そしてこれからはなのはと銀時がジュエルシード探しを手伝うことになった。

*

なのはは放課後に町の神社に来ていた。ユーノも一緒にいる。

ジュエルシードの反応があつたからだ。

そしてそこにはジュエルシードを取り込み、子犬から巨大な犬に変わった怪物がいた。

たまたま飼い主と散歩をしていた犬が落ちていたジュエルシードを取り込んでしまったのだ。

体は鎧なような黒く堅そうな皮膚で覆われ、目は四つになり、鋭そうな牙をむき出していた。

「気をつけてなのは！ 現住生物を取り込んでいる…」

「どうなるの？」

「実態がある分、強い」

ユーノ目を細くしながら化け物になつた犬を見ている。

これからは化け犬と呼ぼう。

「なのは！ レイジングハートの起動を！」

「起動つてどうやるんだっけ！？」

「えつ……！？」

なのはの言葉を聞いてユーノは呆けた声を出してしまう。

なのはが起動の仕方を忘れてしまつたとは思つていなかつたからだ。

ユーノはなのはの肩に乗つて言う。

「ほら、 “我使命受けし者” からの起動パスワードだよ！」

「あんな長いの覚えてないよ…」

なのはとユーノがもついていると、化け犬が唸り声を上げてな

はに向かつて駆け出す。

「じゃあもつかい言うから僕の言ひ言葉を繰り返して！」

「わ、分かつたの！」

ユーノとなののはレイジングハートの起動に注意がいつていたので気が付かなかつたが、化け犬は二人のすぐ前まで来ていた。ユーノは化け犬が近づいて来ている事に気づき声を上げる。

「危ない！！」

「えつ！？」

ユーノはなのには声を掛けてなのが反応する時には既に間に合わず、化け犬はなのには襲い掛かる直前だつた。

なののはダメだと思い目を瞑つた時……

ドカア！

「グワアツ！」

と何かがぶつかる音がした。

なののははゆつくりと目を開けると、化け犬は自分の目の前から離れた所で呻きながら倒れ、自分の目の前には木刀を構えた銀時の背中があつた。

「銀さん……」

なののははつい銀時の名前を呴いてしまつた。

銀時はなののはの言葉を聞いて振り返る。

「おいおい、随分メンドーな事になつてんじゃねえか」

銀時は愚痴を零しながら化け犬を横目で見る。

化け犬は銀時の攻撃が思つた以上に重いらしく、まだ立ち上がりなげずふらついていた。

「あの、どうして此処に？」

ユーノは慌てていたので銀時を呼ばずに来たのだ。

だから銀時がここに居る事を疑問に思った。

「ジャンプ探してたらまたまお前達が神社に行くのが見えたんで

な

「ジャンプ？」

『まあ、主の言つた事は忘れてくれ』

ユーノが聞き慣れない言葉に首を傾げていると銀龍がそう言った。
銀時がジャンプを探していて、なかなか見つからず、探していった途中でなのはとユーノが神社に入つていくのが見えたので銀時は後を追つて今の場面に遭遇している。

銀時がそう説明し終わると……。

「グルルルルル！」

化け犬が怒りの形相で銀時をにらみつけていた。

どうやら銀時に木刀でぶつ飛ばされたのが頭に来た様だ。

「おいおい。それにしても何だよアレ？ あの変なブヨブヨの化け物といい、コイツと良い、ジュエルシードってのはモンスター製造機ですかコノヤロー！」

銀時がダルそうに化け犬を見ながら愚痴を零した。

「気をつけてください！ 昨日と思念体と違つて現住生物を取り込んでいるから強くなつていてるはずです！」

ユーノがさつきなのはに言つた忠告を銀時に言つたが、銀時は「はい」と軽い返事をした後、木刀を肩に掛けながら化け犬に近づく。それを見たユーノは慌てて銀時に声を掛ける。

「ちよつ！だから危ないですってば！」

ユーノも昨晩の戦いで銀時が思念体を圧倒していたのは知つていたが、今回の相手は現住生物を取り込み昨晩の思念体よりも強い。

銀時が銀龍のおかげで魔法を使えるのは知つてているが、銀龍を出さずに向かつている。

魔法なしで銀時が肉弾戦で戦えるとは思わなかつたからだ。だが、ユーノの考えはすぐに覆された。

近づいて来た銀時を化け犬がこごそとばかりに爪で引き裂こうとするが、銀時はそれを簡単に木刀でいなしていく。

上からこようが、下からこようが、斜めからこようが全ての攻撃を

完璧に防御していた。

（す、凄い……！！）

ユーノは目を見開いて驚いていた。

肉弾戦だけではどうやつたって限界があると思つていたが、自分の考えがまったく意味をなさない事を銀時の戦いを見て思い知つた。確かに今の戦いの様子は銀時が押されているように見えるが、それはまったくの逆。

銀時が最小限の動きで化け犬の攻撃を防いでいたのだ。そして攻撃した手が木刀で弾かれた事でスキができた。すかさず銀時が反撃の態勢に入った。

「おいたいも大概にイ　！」

銀時は木刀を振り上げ飛び上がる。

「しゃがれエエエエエエー！！！」

ズドン！！

重い一撃が化け犬の脳天にクリーンヒットした。

ドサッ！

化け犬は声も上げずに白目を剥いてゆっくり倒れた。

「はい終了」

銀時は腰に木刀を挿す。

「や、やつたアアアア！！」

なのはは銀時の勝利を見て喜び飛び上がった。

銀時が勝つた事をつい自分のように喜ぶところは子供らしさと言え

るだらう。

『ユーノよ。主を甘く見てはいけないぞ』

「は、はい」

（僕は……彼の事を悔っていたのかもしれないな……）

ユーノはユーノで、思い返していた。

魔法の才能があるなのはこれから手伝つてもらおうと思つていつたが、やはり銀時には極力手伝つてもらわないよひじみつと思つていた。

それはユーノが純粋に銀時の事を気遣つていたからだ。いくら腕に覚えがあつても魔法がなれば何もできない。さつきまでそう思つていた。

だが……銀時の戦いを見てその考えを改めた。

そして帰つたら改めて銀時にジユエルシード集めを手伝つてもらおうと思つた。

「おーい。倒したは良いんだけど、この後どうすんの？」

銀時は一人に歩いて近寄りながら聞く。

なのはとユーノも“あつ”と思い出し、ユーノがなのはに言つ。

「なのは。やつきも言つたとおり、僕に続いて起動パスワードを言つて

「うん」「うん」

なのははユーノ言葉に頷き、レイジングハートを握り締める。

（銀さんがあれだけ頑張つたんだから、私も……！）

銀さんの役に立ちたい。

そんなんのはの思いに反応したのか、レイジングハートが強く光を発した。

↙Standby lady · setup ↘

「えつ……？ レイジング、ハート？」

「これは……！」

レイジングハートから女性の声が聞こえ、なのはとユーノは驚いて

いた。

そして光が収まるときの姿になつたレイジングハート持つたなのはの姿があった。

「これって……」

なのははレイジングハートを見て呆然としてしまつた。

「まさか起動パスワードなしで起動させたなんて……」

「なんだ？ 何かおかしい事でもあんのか？」

ユーノは今更ながらなのはの才能に驚いていた。

やはりなのはは自分よりも遙かに魔法の才能があると実感した。

銀時は一人の様子から何か問題があるのかと思い首を傾げる。

『主よ。聞くからにはパスワードがいるらしいのだ』

「なるほど。それなしで発動したからか」

銀時は銀龍の言つた事を聞いて理解した。

「なのは。次に防護服を」

「うん。レイジングハート、お願ひ」

〈Barrier jacket〉

そしてまた桃色の光になのはが包まれる。

そして光が収まると、白いバリアジャケットを身に着けたなのはがいた。

（あ、あの服のデザインつてさつきの服だつたんだな）

銀時はなのはのバリアジャケットがなのはの聖祥小学校の制服に似ていると気づく。

結構どうでも良い事に気づいた銀時なのであった。

そしてその後、昨晩の思念体同様、桃色の紐で気絶している化け犬を縛り封印する。

なのはがジュエルシードを封印する横で、銀時とユーノは話をしていた。

「何で銀さんは銀龍を使わないんですか？ 自分にもリンクカードアガあるのはわかるでしょ」

「え？ そうなの？」

銀時はユーノの言葉に驚いていた。

「でなければ使えていませんよ」

「そうなのか……俺はてっきり銀龍が持っているのかと思ってた」
ズテン！

ユーノは銀時の言葉にすっ転んでしまった。

『主の魔力を使って我は初めて魔法を使えるのだ』

「そうだったのか」

銀時は納得がいった様だ。

「で、話を元に戻しますけど」

「銀龍を使わない理由か？今はこいつだけでこっちが足りてんだよ」

銀時は木刀を握った。

「ま、たまに使うかもな」

銀時はそう言った。

「そうですか」

ユーノはそれを聞いて引いた。

銀龍の存在がドンドン気になりだしたユーノだった。

何故、デバイスでもないのに持ち主の魔力を解き放てるのか……。

それが謎だった。

なのはが封印を終えたので、帰った。

『おまけ』

銀八「教えて」

生徒「銀八先生！」

銀八「ハアイ、質問コーナー始めるぞ。今回のアシスタントは

銀龍
銀龍だ

銀八「刀がかよ！」

銀龍『気にするな。字くらいは読めるぞ』

銀バーそこか?なら質問行こうか?

『銀龍』まずは『ペンネーム』『黒龍』さんからだ。

『黒龍』では、早速質問にこもれしう

1. ミラクル に質問。ロリコンに墮ちる予定だそうですね？ リカルドの世界には一生行かない方が良いんじゃないですか？

2. なのはに質問。こつちの小説のミラクル を見てどう思いますか？

3・ナナフシさんに質問。ナナフシさんはリリカルなのはのキャラであるクロノや、組織である管理局が嫌いですか？

新八「あいいいいいいいい！！！ いい加減僕をミラクル めろ！！」『 だそ うだ。 一つ目だがミラクル よ』

ミラクル 「誰がミラクル じゃああああああ！後、黒龍！それは僕を出番なしにしろって言う意味かアアアアアア！」
ミラクル は思いつきり叫んだ。

銀八「哀れだなぱつつかん。一つ目の質問の答えをなのは」

なのは「最低だと思います」

銀八「こつちのなのはに嫌われてやんの。三つ田」

ナナフシ「僕はあんまりクロノは嫌いじゃありませんよ。時空管理局は……大きな組織には裏があるからあんまり好かないな……寧ろ、他の人の作品を見るとクソと思つから」

銀八「すんごい言いようだな……と言つて訳で『黒龍』さん廊下に立つてなれ」

銀龍『最後の質問だ。ペンネーム『支配者』さんからの質問だ
『質問です

この物語での無印編では銀時の味方キャラやフォイトの味方をしてくれる銀魂キャラはいないんですか?』 だそつだぞ』

銀八「これネタバレにならないか?まあ、今の所はありません。雷雅達が支配者さんの所で言うジユド達みたいな感じですね……つまりは裏で糸を引いているような……銀時は見ていけばわかると思いますと訳で『支配者』さん。廊下に立つてなさい」

銀龍『それではまた』

第四訓：化け犬には気を付けよう（後書き）

ナナフシ「もう……黒龍さんの所パクつた様にしか見えない」

銀時「おいおい」

ナナフシ「とりあえず、次回はね……大丈夫かな……」

銀龍『それではまた次回』

第五訓・間違いは誰にでもある（前書き）

ナナフシ「連続投稿！」

銀時「おいおい」

ナナフシ「良いじゃん別に…………それに早くフェイド出かなこと……」

……

銀時「思えばまだだつたな」

ナナフシ「いや…………向こうに銀魂キャラ居ないからさ…………」

銀時「おいおい」

ナナフシ「砲撃が来る前に出さないと…………」

なのは「『リリカル銀魂』魔法少女と銀髪の侍と白銀の刀』始まります」

第五訓・間違いは誰にでもある

銀時ははなのはの父親である土郎が監督を務める翠屋JFCのサッカーの試合を成り行きで見ていた。まあ銀時はつまらなそうにしていたが。

アリサとすずかとはその時に挨拶をした。

銀時はその時思った。

アリサと神楽の声が同じだと気付いたのだ。

銀時が居る理由はなのはに誘われたからである。

銀時はメンドくさがっていたがなのはに「銀さんも一緒に行かないの?」（上田遣い + 涙田）で頼まれて泣々ついてきたのだ。それで今に至ると言つてある。

*

そしてその夜、なのはと銀時、コーノはビルの屋上に立っていた。ちょうど暴走したジュエルシードを封印したところである。なのはとコーノ後ろには銀時が立っている。

なのはは、今とても後悔していた。

なぜならジュエルシードの気配に気づいていたのにそれ勘違いだと思つてしまつたからである。

今町はジュエルシードの暴走ので発生した被害で酷い有り様になつて

いる。

「ごめんヨーノくん私……ジユルシードの気配に気づいていたのに、それを勘違いだと思つてた」

「なのは
今にも泣きそ二た二た

「たのには…」

「よお～、なのは

「銀さん」

なのはほ、泣きそうな顔で俯いていた。

「別に弟君が氣に病む必要はねえ。だからそいつで自分を責め

るんじゃねえよ

金鑑さへ一矢の机に書和のナリ
なのはは、まだ腑へて辛をうにしていた。

場の空気がさらに重くなつた感じがした。

第三章

鉢には消息を一きながら頭を搔いた

たのは、こんな事はない。たゞ自分のせいだと考へが頭の中を巡っていた。

長い沈黙が続いた。

突然、銀時が豹変して怒声を上げた。

「ツ
！
！
！
—

なのはは、両手で頭を押さえて痛みに悶えた。

「ちゅッ！？銀さん、何やつてるんですかーー！」

ユーノは、なのはないも悪くないのに銀時が怒ったことに声を荒げた
「フュレットもどきは黙つてろ！！」

銀時の凄みある言葉にユーノは押し黙つた。

「なのは、俺が怒つてんのは別にお前が失敗したからじゃねえ」
銀時は首を横に振る。

「ふえッ！？」

なのはは涙目になつて頭を抑えながら銀時の顔を見る。

「そりやつてお前がいつまでも後ろばつか向いてるからだ」
「ツ！」

なのはは何かを気づいたような顔をする。

銀時の言つ通り今の自分は自分を責めているだけで前を向こうといつても向いていられない。

銀時は坦々と語り続ける。

「確かに過去にあつた事は消せやしねえ。だからと言つて、過去の過ちを振り返るなども言わねえー」

『主よ……』

銀時は空を見ながら何かを思い返す様に言つ。

その顔がどこか寂しさを漂わせていた。

銀龍は銀時が何を思い出しているのかはわかつていていた。

再び銀時はなのはに顔を向ける。

「だからそりやつもんを全部背負つて前に進むんだ。なのは、おまえはどうしたい？」

なのはは、銀時の問いを受けて顔を俯かせる。
そして再び顔を上げる。

「私、ただ誰かに傷ついてほしくなくて、ユーノ君のお手伝いでジユエルシード集めをしようつて決めました。けど、今は違います！
こんな失敗を起こさないためにも、皆を守るためにも、自分の意思でジユエルシード集めを続けます！」

なのはの顔には強い意思が籠つていた。

「そりや！」

なのはの答えに満足だつたのか銀時は微笑を浮かべながらなのはの頭を撫でる。

「けどな、なのは。お前はまだガキなんだからよ、もっと周りを頼れ。甘えていいんだよ。お前にはユーノだけじゃねえ、他にもお前を心配してくれる奴が、支えてくれる奴がいるんじゃねえか？」
銀時はなのはを頭をゆっくりと撫でながら何かを諭すように言つた。

「ま、お前がまた立ち止まつた時には、いつでも俺がお前の背中を押してやるよ」

そう言つて銀時はなのはの頭から手を離した。

「銀さん……」

なのはは銀時に顔を向けた。

『我にも頼つて良いぞ』

銀龍は姿を現してそう言つた。

「もう一人で悩むんじゃねえぞ。良いな？」

「はい！」

なのはは嬉しそうに頷く。

「銀さん、銀龍さん、本当にありがとう」
なのははその時、目を奪われそうなほど良い笑顔でお礼を言つた。
ユーノはなのはの笑顔を見て少し顔を赤くしていだ。
まあフェレットだから誰にもそんな変化なんて分らないけど。
なのはは顔を赤くしながら銀時を見ていた。
銀時はなのはへのフラグを強化したのだった。

*

そして時間は夜になる。

とあるビルの屋上にはそこに二人の人間と一匹の獣がいた。

一人は黒いマントなびかせ黒い斧のような杖を持つた金髪の少女。

「ロストロギア……形状は青い宝石、一般名称はジュエルシード」
少女はそう呟いた。

「早く手に入れない」と……母さんのためにも」

「ワオオオオオオオン……！」

そしてその声に答えるかのように金髪の少女の近くに控えていたオカミが夜の街に遠吠えを響かせた。

そして数瞬、その場にいたはずの一人と一匹の姿が消える。

少女『フェイト・テスロッサ』は自分の大切な人のために目的の物を集めれる。

第五訓・間違いは誰にでもある（後書き）

ナナフシ「やつと……フェイト来た……」

銀時「殺されなくてよかつたな」

ナナフシ「たぶん、フェイト視点も出でくるかも」

銀時「かもかよ！」

ナナフシ「後……見直したらコーナーのみになつてた……これ解除した方が良いかな？」

銀時「好きにすれば？」

ナナフシ「だよね……解除しとくので感想待つてます」

銀龍『それでは次回は主となのはがフェイトと遭遇するぞー』

第六訓：迅雷つてどれだけ速いの？（前書き）

ナナフシ「アハハハハハハハハ！！！」

銀時「どうした！ナナフシ！？」

ミラクル「テスト……赤点取つて追試になつたそうですよ」

銀時「それですかよ！てか、何が落ちたんだよ…」

ナナフシ「食品学」

銀時「そんなやつあつたか？」

ナナフシ「俺が通つてるのは調理師専門学校だよ」

銀時「マジかよ！？」

ナナフシ「本當だよ」

銀時「でも、お前高校生つて！」

ナナフシ「三年制の調理師専門学校……つまり、卒業と同時に調理師免許と高校卒業資格が貰えるんだよ」

銀時「そうなのか……で、学科だけなのか？」

ナナフシ「アハハハハ！」

神楽「中華料理が落ちたらしいアル」

銀時「おい！」

ナナフシ「アハハハハハハ！」

ミラクル「もう始めましょう『リリカル銀魂』魔法少女と銀髪の侍と白銀の刀』始まります！」

ナナフシ「おつと、今回は銀時VS雷雅です！後、黒龍さんが考えてくれた技を一つ出しますので！」

銀時「おい！」

第六訓・迅雷つてどれだけ速いの？

翌日。

銀時ははなのはとなののはの兄の恭也そしてなのはの友達であるアリサと一緒に月村すずかの家に遊びに来ていた。

あ、銀龍は姿を消してるけど。

銀時が何故なのは達と一緒に居るかと言つとまたなのはに「銀さんも一緒に行かないの？」（涙目 + 上田遣い）で誘つてきたので、泣々着いてきたのだ。

そして月村邸に来た銀時的第一声が……

「でか！？」

だつた。

まあお金持ちの中のお金持ちである月村家の家はめちゃくちゃでかい。

さすがに一般庶民である銀時にとっては驚かずにはいられなかつた。ついでに銀時の服装はいつも通りだが、木刀は竹刀袋に入れている。月村邸を見て呆然している銀時に恭也が声を掛ける

「おい、何しているんだ。置いて行くぞ」

銀時はその言葉を聞いて、なのは達の後を追つた。

銀時達は月村邸の庭に来た。

銀時は庭にある椅子に座つた後、恭也が美女と一緒にどこかに行くのが見えた。

「ん？ アイツと一緒にいるねーちゃん誰？」

「あつ、あの人はすずかちゃんのお姉さんのお母さんです

「ちなみにあの一人付き合つてているのよね」

「マジか？」

そして銀時は……。

『主やめうよ』

銀龍が姿を消したまま銀時の耳元で囁いた。

銀時は大人しくした。

とりあえず恭也の話はここまでにしてなのは達は紅茶を飲んだりお菓子を食べながら楽しそうに話していた。

銀時は話に参加していない。

銀時はこういのにあまり参加しないのだ。

とりあえず銀時はお菓子食べながらなのは達の話を耳を傾ける程度に聞いていた。

（何か詰まんねえ）

銀時がそう思った時だった。

「キュー キュー！」

さつきからネコに追われてたユーノが鳴き声を上げながら銀時の肩まで上った。

「うおッ！？」

突然ユーノが自分の肩に登つて来た事に驚いた銀時は少しバランスを崩すがすぐに持ち直す。

そして自分の右肩に乗っているユーノを見ると、さつきから追いかけて来たネコを見下ろしながら少し怯えていた。

（なんつうか、コイツも苦労してんだな）

ちょっとユーノに同情した銀時であつた。

その時、なのはは一瞬驚いたような顔をした。

【ユーノ君！】

なのはは念話でユーノに話し掛けた。

【うん。近くにジューエルシードがあるね】

どうやら一人はジューエルシードの気配を感じ取ったようだ。

ユーノは、銀時の肩から降りて森の中に走つていった。

アリサ達を巻き込まないためだ。

「ごめんねアリサちゃん、すずかちゃん。ユーノ君どこかに行つちやつたみたいだから探してくるね」

そう言つて、なのはは席を立つ。

「ユーノが？ 私たちも探すわよ？」

「ううん、大丈夫。すぐ見つかると思つから」

手を振りながらなのはが言つ。

なのは達の様子に銀時は気付いた。もしかして一人がジュエルシードの反応を捉らえたと思ったのである。

「じゃあ、俺も行くか」

銀時が頭を搔きながら立つた。

銀時はなのはの後を追つた。

*

なのは、ユーノ、銀時は森の中でジュエルシードを探していた。なのはバリアジャケットを着て、手にはデバイスの『レイジングハート』を持つてゐる。

「なのは、ここいら辺にあるのか？」

「そのハズなんですけど……」

すると大きな足音のような音が聞こえた。

『この足音は？』

銀時達は辺りを見回す。

「アレ！」

ユーノが何かを見つけて前足で見つけたモノを指す。

『『！』』

ユーノが指したモノを見て皆驚いた。

「にゃ～～

皆の目の前に大きな大きな猫がいたのだ。

どれくらいでかいかと言つと体長ハメートルはありそつなほどだ。

『でかいな』

銀龍は呑気に言つた。

「えつと……これは……」

「多分あの子の『大きくなりたい』って願いが叶えられた……んだと思つ」

大きな猫を見ながら、なのはとユーノは苦笑いした。

「いやア、でかいなア」

銀時は大きな猫を見ながら言った。

後、ユーノが言つた事を聞いて思つた。

（ああ、ジユエルシードってそんな感じか）

銀時は巨大化した猫を見ながらジユエルシードの力を認識した。例えて言うならいい加減なドラゴンボールだと思った。

「でも、あのままじゃ危険だから早く封印しないと」

ユーノは『広域結界』と言つ辺りの空間と時間軸をずらす魔法を使つた。

「そ……そうだね。流石にあのままじゃ、すすかちゃん困つりやうだろうし……」

そう言つてなのははレイジングハートを構えた。

銀時は頭を搔きながらやる事を決める。

「よし……帰るか」

『そうだな』

銀時と銀龍はそう言った。

「つて待つてくださいよ！」

ユーノは銀時を止めた。

「銀さん何帰るうとしてんですか！？」

封印するんでしょう封印！

「手伝つてくれるつて言つたじやないですか！？」

「あん？ あんなでかい奴はウルト○マンに任せとけば良いんだよ」

「ウル○ラマン！？ ウルトラ ンつてなんですか！？」

銀時とユーノがそつやつて揉めていると、背後から金色の光が通過して猫に直撃した。

「にやーー！」

猫は悲鳴を上げてよろけた。

「だ、誰！？」

全員が光が発射された方へ振り返った。

そこには金髪のツインテールで黒い服を着た少女 フェイトが空中

中にたたずんでいた。

そして、フェイトはなのは達を見る。

（私と同じ魔導士…）

フェイトはなのはを見ながらそう思った。

（でも……母さんのためにも、ジュエルシードは譲れない）

フェイトは、なのは達の方へ飛んでいった。

*

「あれは……まさか僕と同じ世界から来た魔導師！？」

フェイトを見てユーノが驚く。

『と言う事はジュエルシード狙いだな。主よ』

「はいはい、わーったよ」

銀時は竹刀袋から木刀を取り出した。

フェイトは木の上に着地した。

なのは達は木の上に立つてゐるフェイトを見つめた。

フェイトの持つバルディッシュは鎌のよだな姿の『サイズフォーム』

になる。

「申し訳ないけど、頂いていきます」

フェイトはバルディッシュを構えて、なのはに襲い掛かる。

「なのは！」

ユーノが叫ぶ。

バルディッシュの刃がなのはに迫る。
ガキン！！

「！」

だがバルティックショの刃がなのはに届くことはなかつた。なのはに当たる直前、刃は一本の木刀によつて止められた。

攻撃を止められた事にフェイトは驚いた。

「銀さん！」

なのははフェイトの攻撃を止めた人物の名前を叫ぶ。

銀時はそのまま木刀を横薙ぎ振る。

「くつ！」

フェイトは銀時の力に押され後退し、体勢を整えて少し地面に近い辺りで体を浮かせる。

フェイトを後退させた後、銀時は肩に木刀を掛けながらフェイトに言葉を掛ける。

「おいおい、ガキが随分物騒なモン振り回してんじゃねえか

軽口叩く銀時をフェイトは睨みながら質問する。

「……何者ですか？」

「俺か？ 俺は坂田銀時です。趣味は当分摂取。キャプテン志望してます」

銀時はいつものダルそうな声で言つた。

「それでお前は？お前も何者なんだよ

「……」

名乗らなかつた。

「おいおい、自己紹介も出来ないのか？今の世の中なア、自己紹介くらい出来ないと友達も禄に出来ないぞ！って何処かの誰かさんが言つてました！！

ズテーン！

銀時の最後の言葉にその場に居た全員がズッコケた。

「何処かの誰かさんって誰ですか！？」

「何処かの誰かさんだよ！」

ユーノは銀時にツッコンだが、銀時の答えは変わらなかつた。

「フェイト……フェイト・テスター・ツサ

フェイトは銀時達に名乗った。その後に……。

「フェイトーーー！」

オレンジ色のい「狼だ！」狼……アルフがやつて來た。

「大丈夫かい！？」

「うん」

フェイトはそう言つた後地上にいる銀時となのはを見る。アルフもつられて銀時達を見る。

「他の魔導師かい？」

「うん」

アルフの間にフェイトは答えた。

「よし！ あたしが連中の相手をするから、その隙にフェイトはジュエルシードを回収して！」

「でもアルフ……」

「大丈夫。あたしはフェイトの使い魔だよ？ 心配いらないって

「……うん。お願ひね

アルフの言葉を聞いてフェイトは微笑んで、巨大猫の方へ向かつた。マズイ！ ジュエルシードを封印するつもりだ！ 止めないと！

！」

ユーノが叫んだ後、フェイトを追いかけようとする。

「そつはさせないよ！！」

だがその時空からアルフがユーノに迫る。

「ユーノ君！」

なのはがユーノに向かつて走る。

「大丈夫だよ、なのは！」

ユーノは防御の障壁を張つてアルフの攻撃を防いだ。それを見て安心したなのはは足を止めて安堵する。

「ちつ！」

舌打ちした後アルフは一旦、ユーノから離れる。

「なのは！ ジュエルシードを！」

「う……うん！」

ユーノに言われて、なのはが走り出す。

「させないって言つたろ！」

アルフは素早く動いてなのはの背後に回り襲い掛かる。

「なのは！！」

ユーノが叫んで、後ろを振り向いてアルフの攻撃に気づいたなのはは咄嗟に目を瞑つてしまつ。

その時。

ガキン！

「お前……！」

アルフは声を上げ、目の前で自分の爪での攻撃を木刀の刀身で防いでいる銀時を睨みつける。

「銀さん……！」

銀時に助けられたなのはは嬉しそうな顔で銀時の名前を叫ぶ。

「わりいが、そう簡単に傷つけさせねえぜ」

ニヤリと微笑を浮かべてアルフの攻撃を防いでいる銀時。

銀時はそのまま思いつきり木刀を振つた。

アルフは後ろに飛ばされ、着地した。

銀時とアルフが対峙していると……

「……」

銀時は何かに気付いた様に後ろに飛んだ。

ドスッ！

何かが地面に刺さる音がした。

銀時が立っていた所を見ると薙刀が刺さつていた。

「これは！？」

銀時は驚いた。

この薙刀は……。

「よオ、銀の兄貴」

雷雅の薙刀だつた。

雷雅が薙刀がある所に姿を現したのだ。

「あんた誰だい！？」

アルフは雷雅に言った。

雷雅はそれを聞いて振り返った。

ゾクツ。

雷雅の目を見た途端逆らつてはいけないと思った。

「何……お前等の手伝いをされる様に雇われた者よ」

雷雅は不気味な笑みを浮かべた。

「銀の兄貴は俺に任せな」

アルフはそれを聞いて頷いた。

「なのは、ユーノ……ここは俺に任せろ」

「わかりました」

なのはとユーノは一度会った事がある雷雅が危険だとわかつっていた。

そのまま銀時と雷雅だけが残つた。

「さア……勝負と行こうぜ……銀の兄貴」

「雷雅！」

銀時と雷雅が睨み合い……同時に動いた。

雷雅が突きを放ってきた。

銀時はそれを右に交わした。

雷雅はそのまま右に薙刀を振った。銀時はそれを木刀で防ぐ。そのまま銀時は雷雅の腹に蹴りを入れ、蹴り飛ばした。

雷雅はすぐさま態勢を取り直して、銀時を見た。

「銀龍を使う気はねえか」

「当たりめえだ」

雷雅の問いに銀時は答えた。

「なら……本気で行く」

雷雅がニヤリと笑うと田の前から姿を消した。

『主！出たぞ！』

「わかつてらア！」

雷雅の異名は『迅雷』……その名の通り、素早いのだ。

素早さで相手を翻弄し、そのままドンドン斬つていくのだ。

銀時は雷雅が何処に行つたか辺りを見回しながら一生懸命探していく

る。

すると……。

ブショウツ！

銀時の体に切れ目が入った。

それが始まりの様にドンドン銀時の体に切れ目が入っていく。

「ククク、銀の兄貴……俺を捕らえられるかな？」

雷雅が銀時にそう言った……と同時に木刀を弾かれた。

木刀は地面上に落ちた。

取りに行こうとするが……雷雅が行かせない。

「ちつ！」

「銀の兄貴……得物がないぜ？」

雷雅の姿は見えないがきっと笑っているであろう。

銀時は銀龍を取り出した。

「ククク、銀の兄貴！勝負だ！」

雷雅はまだ連続で銀時に襲いかかる。

銀時の体にドンドン切れ目が入る。

そして……。

「オラア！」

雷雅が上に現れて、突きを放った。

銀時はそれに反応して、後ろに飛んで避けた。

「なつ！！」

雷雅は驚いていた。

自分の攻撃が避けられたのだから。

銀時はそのまま白銀の鎧を纏つた。

そして、銀龍を鞘にしました。

「やべえな

雷雅は態勢をまだ整えていなかつた。

「喰らえ」

銀時が一瞬にして雷雅に近づいた。

すると……。

雷雅の体に斬つた後が出来る。

銀時は雷雅に近づいた時に斬撃を浴びせたのだ。
つまつは強力な属性の刃を放つ二つ巴。

「瞬銀」

銀時はそう呟いた。

雷雅はそのまま地面に倒れたかまた立ち上がった

銀龍は驚いていた。

「ハアハア……今回

雷雅は姿を消した。

「おひ

銀時はなのはの元へ走つていつた。

『おまけ』

銀八「教えて」

生徒「銀八先生！」

銀八「ハアイ、今回も質問コーナー始めるぞ。今回のアシスタン
トは」

ヨーノ「アシスタントのヨーノ・スクライアです」

銀八「はい、それじゃ張り切つて行こうか」

ヨーノ「まずはペンネーム『月光閃火』さんからの質問

『1・雷雅（名前：合つているだろうか？（汗）に質問…銀時の『甘党』のように食べ物の好みのこだわりつてあるのか？

あ…確かに、それは気になるかも…。桂の兄ちゃんも大の『そば好き』だし。次は俺からだ。

2・ナナフシさんに質問…といつが、この前の質問の続きだ…。第四訓の前書きでやり過ぎたな？（黒笑）…全身煤まみれ決定（そういうつて、漆黒笑みを浮かべながら右掌から立ち上らせた紫焰でナナフシの全身を煤まみれにする）

輝刃「あ…あ…だから言わんこつちやない…（呆）。あと、閃火は新八を蔑むような事柄も嫌悪感を抱くからな。」『つて作者大丈夫なの！？』

銀八「ナナフシなら」

ナナフシ「ぎやああああああああああああああ…！」

ナナフシの断末魔が聞こえた。

ユーノ「…」

ユーノはナナフシを哀れな目で見ていた。

銀八「で、雷雅どうなんだ？」

雷雅「特にねえな。食のこだわりなんて…」

銀八「らしいです。と言つて『月光閃火』さん。廊下に立つてなさい」

『黒龍』「酷い意味の納得のされ方だ！－－で、でば、質問します」

「ミラクルに質問。」
「あなたの方が冴えている」と言つてましたが、どうしますか？

3・銀さんに質問。結婚するならなのはヒューリットのビーチが良いですか?

ミラクル一僕のツツヒミより泳えているだとオオオオオオオ！勝負しろオ！」

ユーノ「えー? だから言つて…… ああああああああー。」

ユーノはミラクルに連れて行かれた。

銀八「……二つ目だが」

なのは「……」

なのはは黙り込んだまま、黒龍さんの所の方角にレイジングハートを向けた。

なのは「デイバインバスター！！」

と、黒龍さんの新ハに放つた。

まあ、こつちでは新ハはまだしね。

銀ハ「放つちゃつたよ！最後は却下で！」
銀ハは言つが……聞いてしまつたなのはが。

なのは「銀さん……」（涙目 + 上目遣い）

で、銀時を見ていた。

銀時「これは……言えない」

銀時はさすがに言えなかつた。

銀ハ「むかつぐ！」と言つ訳で『黒龍』一廊下に立つていろ！

銀ハは黒龍さんにハつ当たりした。

ユーノ「やつと解放された」

ユーノが新ハから解放されて帰つてきた。

銀ハ「次行くぞ」

ユーノ「はい。ペンネーム『黒神』さんからの質問
『質問します。

銀時へ

『リリカル銀魂striker's～攘夷戦争～』に関する質問を2
つ。

その1　自分の専用『デバイス』『ブレイシリバー』でのバリアジャケットに関する感想を。（黒笑）

その2　桂の重要人物扱い、神楽とエリオの関係、九兵衛のキャラ崩壊、山崎の彼女持ちなど大抵のキャラクターは原作とは程遠くなりましたがそのご感想を。

『銀魂王デュエルモンスターZSD』に関する質問を1

貴方はここでは決闘者として覚醒しており、使用デッキは白のイメージとして『青眼の白龍』を使いこなします。

そんな自分の決闘者としての感想は？』銀さん、お願いします

銀時「一つ曰だが、おいいいいいい！これ完全にコスプレじゃねえか！？何でブレイルーのラグナの服なんだアアアアアアア！武器も武器だし！」

銀時は完全にコスプレに怒っていた。

銀時「二つ曰だけど、ヅラの重要人物として扱うとはなア……神楽とエリオは良いと思うぜ別に。一番驚いてんのが、九兵衛のキャラ崩壊とジミーの彼女持ちだわ！特に九兵衛はもう誰！？」

銀時は九兵衛のキャラ崩壊に驚いていた。

銀時「最後だが、良いんじゃねえか？見た限りスゲエ使いこなしてるし。俺も使えるんじゃねえか……あっちの俺みたいに

銀八「と言つて『黒神』さん廊下に立つてなさい」

ユーノ「最後です。ペンネーム『獄黒』さんからの質問

『質問

総悟と神楽と銀時とトシに
にじファンでは、神楽と総悟の恋愛小説があります。どう思います
か。』 それでは指定の四人お願ひします

沖田「誰がチャイナなんかと！」

神楽「それはこっちのセリフアル！」

沖田と神楽は喧嘩を始めた。

銀時「神楽と総一郎君がなア」

沖田「総悟です。旦那」

喧嘩をしながら銀時に間違いを指摘した。

土方「チャイナと総悟がか……ブフツ」

土方は妄想しただけで笑ってしまった。

沖田「覚えとけ、土方コノヤロー……！」

沖田は青筋を浮かべながら土方に怒鳴った。

銀八「ハァイ、と言つて『獄黒』さん廊下に立つてなさい」

ユーノ「質問は以上です」

銀八「それではまたア」

第六訓・迅雷つてどれだけ速いの？（後書き）

ナナフシ「さすがに長すぎた」

銀時「だろうな」

ナナフシ「雷雅は相変わらず速いねエ」

銀時「それがあいつの戦闘スタイルだからな」

ナナフシ「思った。黒神さんの所のスバルの刹那の瞬間移動と雷雅のスピード……どっちが速いんだろう？」

銀時「さア」

ナナフシ「もし、刹那の瞬間移動が地雷亞並み、もしくはそれ以上
だったら雷雅より速いね」

銀時「雷雅は地雷亞の次かよ」

ナナフシ「まあね。それではまた次回！」

瞬銀

シルバー・オブ・アーマー

白銀の鎧を纏い、身体能力が上がった事で使える技

刀を鞘に納め、一瞬にして相手に近づき相手にいくつもの斬撃を浴
びせる技。

簡単に言えば、強力な居合い切りである。

第七訓・温泉では心と身を癒そう（前書き）

ナナフシ「今回家族……なんて言えば良いんだろうか……」
銀時「おい！」

ナナフシ「とりあえずなのはお願ひ」
なのは「『リリカル銀魂』魔法少女と銀髪の侍と白銀の刀』『始まります』

第七訓・温泉では心と身を癒そづ

銀時がなのはの所に向かう途中でフェイト達が飛んで行くのが見えた。

銀時がそのまま見ていると、

「銀さん！」

「なのは」

バリアジャケット姿のなのはが飛んでやつて來た。

そして銀時の近くに降り立つたなのはは申し訳なさそうな顔で銀時に謝る。

「じめんなさい銀さん！ ジュエルシーの子に取られちゃったの…」

なのはは巨大猫の所に付いた時には既に黒い魔導師にジュエルシードを取られていたと銀時に説明した。

「銀さんに任されたのに、何も出来なかつたの……」

なのはは悲しそうな顔で俯いていた。

銀時が体を張つて自分をジュエルシードの元まで導いてくれたのに対し、自分は何も出来なかつた事が悔しくてなにより悲しかつた。落ち込んでいるなのはの頭に銀時は手を置く。

それに気づいたなのははゆつくりと顔を上げる。

「ま、しゃあねえよ。取られたんなら取り返せば良いだけの話だ。そう自分を責めんじゃねえよ」

銀時はそう言つてなのはの頭をゆつくりと撫でた。

「銀さん……」

なのはは銀時に慰められた事でつい嬉しくなり涙を流しそうになるが、すぐに笑顔を作つて言つた。

「うん！」

なのはは今度あの魔導師に遭つたら銀時のためにも次は頑張りつと思つた。

*

翌日。

銀時は高町家と一緒に海鳴温泉来ている。
ちなみにアリサは執事の鮫島とすずかは姉の円村忍と一緒に来ている。

何故銀時達が一緒にいるかと言つと、なのはの親である土郎や桃子に誘われて一緒に温泉に行く事になつたのだ。

銀時としても温泉と言う心体がリフレッシュできる上に美味しい料理が食べられると思ったのですぐに着いて行くと言つた。

そして女湯ではなのは達が温泉に入つていた。
そして、なのはの腕の中には、

「キュー キュー！」

男のフェレットであるユーノが鳴きながら暴れていた。

顔も赤くなつていて。

「ユーノつたら、初めての温泉でそんなにはしゃいじやつて」「可愛いね」

一緒に入つているアリサとすずかは勘違いしながらユーノに触れる。
(銀さん！助けて〜〜〜)

ユーノは念話で隣の男湯に入つてゐるであらう銀時に助けを求めた。
だが、魔導師でない彼に念話が届くことはなかつた。

*

「良い湯だね」

「そうだな

銀時と土郎は頭に畳んだタオルを乗せて気持ち良さそうに温泉に浸かつっていた。

ユーノは届くはずのない念話を銀時はずつと送っていた。

*

温泉を上がった後、なのはは銀時にアルフと会った事を話した。

「マジでか? だつてあれ……犬じやなかつたか?」

銀時はアルフの事を犬と言つた。

狼なのにね。

なのははそのままアルフが脅してきた事も話した。

「それでやめんのか?」

銀時はなのはに訪ねた、

「やめません。誰かが傷つくなんて嫌だから……」「……」

なのはは銀時にそう言つた。

銀時はフツと微笑みながらなのはの頭を撫でた。

なのはは顔を赤くしながら笑つていた。

銀時はなのはを撫でるのをやめて立ち上がつた。

「何処に行くんですか?」

なのはは銀時に訪ねた。

「ちょっとくら出掛けくらア」

銀時はそつと外に出て行つた。

*

銀時は旅館の周りを歩いていた。旅館の周りは森に囲まれていて、鳥の鳴き声などが聞こえてくる。

そんな森の中で銀時は探していた人物を見つけた。

木の上にフェイトが座っていた。

(やつぱな)

銀時はアルフが居るのならフェイトも居るのではないかと思い探していたのだ。

「おーい

「……」

銀時の声に驚きフェイトは『パルティッシュ』を取り出した。

フェイトは銀時を睨みながら警戒している。

「いや、別に戦いに来た訳じゃねえから」

銀時はそう言うがフェイトは警戒を解かない

「坂田銀時……何か用？」

フェイトは警戒しながら言つ。

「銀時で構わないぜ」

銀時はそう答える。

「それじゃ、銀時……何か用？」

もう一度銀時に言つた。

「何……たまたま見つけただけだよ」

銀時はそう言つた。

「そう……」

フェイトはまだ銀時を睨んでいる。

「なあ、フェイト、お前は何でジユエルシードを集めてんだ?」

「それは言えない」

フェイトは銀時の問いを断つた。

「どうしてか?」

「どうしても」

銀時がもう一度問うがフェイトの答えは変わらなかつた。

「まあ、それなら良いや

銀時は旅館に戻ろうとする。

「銀時……何しに来たの？」

フェイントの言葉に銀時は振り返った。

「だから言つたら？ たまたま見つけただけだつて」

銀時はそう言つた。

フェイントは思つた。

敵の魔導士の味方である銀時だが、何故か信頼が出来る気がする……。

フェイントは考へて口を開いた。

「銀時に私がジュエルシードを集めてる理由を言つ」

銀時はそれを聞いて止まり、フェイントは銀時に近づいた。

「私がジュエルシードを集めている理由は母さんの為なんだ」

「お前の母ちゃんの為に？」

銀時はフェイントの言葉に首を傾げた。

「母さんがジュエルシードを必要としているの。私はそれを集める様に言われたの」

「ジュエルシードは何に使うんだよ？」

銀時はフェイントに訪ねた。

「わからない。集めろつて言われただけだから」

フェイントは銀時にそう言つた。

「そうかい。これはなのはに言わないでおいてやるよ」

銀時はフェイントの頭を撫でながら言つた。

フェイントは顔を赤くしながらすぐつたそうにしていた。

「ま、お前はガキなんだからちつとは周りを頼れよ。アルフって言う最高のパートナーも居るじゃねえか」

「うん」

「それに……俺はなのはの味方だからボンボン助ける事は出来ねえがお前が危なかつたら助けてやるよ」

「え！？」

フェイントは銀時の言葉に驚いた。

「でも、それじゃあ

「だから言つたろ？俺はなのはの味方だからお前をそんなに助ける事は出来ねえがつて……でも、お前が困ついたら助けてやるからよ」

銀時はそれだけを言つと旅館に戻つていった。

フェイトは顔を赤くしながら銀時の背中を見送つた。

『おまけ』

銀八「教えて」

生徒「銀八先生！！」

銀八「ハァイ、質問コーナー始めるぞ～。今回のアシスタントは

フェイト「フェイト・テスタークロッサです」

銀八「それじゃあ質問行こうか」

フェイト「まぢはペンネーム『黒龍』さんからの質問

『黒龍』では、質問します」

1・!!ラクルに質問。なのはがけみの事を好きだと言つてました
がどうしますか?—ヤ(・・)—ヤ

2・なのはに質問。なんでも銀さんがあなたと結婚したいと言つて
ますが、どうしますか?

3. 銀龍に質問。
あなたが一番苦手な人は誰ですか?』 まずはミラ

「ミラクル フェイタちゃんまで…？それよりも黒龍！それ本当！？」

「なのはぢやアアアアアアん！」

ミハケ川
はなのに向かって走り出した

なのはは黒龍さんに向けてスター・ライトブレイカーを撃つた。

銀八「おい！ 一つ目だが」

なのは「本当に銀さん!」

銀時「んな事言つてねえよ！黒龍の嘘を信じるんじゃねえ！－それ
に子供じゃ無理だろ！－」

なのは「それじゃ大人になつたら良いんですね！！」

銀時「そう言ひ問題じやねえーー！」

なのはと銀時はそんなやりとりをしていた。

フェイトはそれを頬を膨らませて面白くなさそうに見ていた。

銀時「要らねえ嘘を吐くんじゃねえええええ！」

銀時は怒って銀龍で魔力の斬撃を黒龍さんに向かって放つた。

銀八「何かむかつくー三つ目だが銀龍」

銀龍『「そうだな……変わり果てた高杉だな……』』

銀八「と言ひ訳で『黒龍』さんそつちにスター・ライト・ブレイカーと魔力の斬撃が向かいましたんで気を付けてください」

フェイト「次行きます。ペンネーム『月光閃火』さんからの質問『輝刃』……俺もたまに狼の姿になるが、よく『犬』扱いされる事が多いな……（汗）。まあ……子供によく懐かれるから悪くはないが……あ……質問……行くぞ？まずは俺からだ。」

1・コーンに質問……ぶっちゃけ言つて、変身魔法で『フェレット』以外になれるか？ちなみに、俺は『ニホンオオカミ』をオススメするぞ？

：一緒に寄り添つて寝るのか？家族みたいに……。次は俺からだ。

2・ナナフシさんに質問……何かこの小説読んでてオリキャラの設定案が沸々と湧き上がるのだが、投稿してもいいか？あと、この前の煤まみれの刑だが……一応ヤケドにならないように煤まみれにさせたからな……。

輝刃「……後半の質問、完全にフォローだな……（汗）。」「三つ目だけど本当に大丈夫なのナナフシー？」

ナナフシ「ヤケドはありませんけど煤まみれになりました……オリキャラですが、投稿しても構いませんよ。オリキャラを見て使うか使わないか決めるので」

銀ハ「先に一つ用を答えたよ!」で、ユーノどうなんだ?」

ユーノ「う~ん、たぶんフレットにしかなれません」

銀ハ「まあ、原作ではフレットだからな。と言つて『月光閃火』さん廊下に立つてなさい」

フェイト「次です。ペンネーム『支配者』さんからの質問『さあ、質問行きましょ

雷雅へ

銀さんへ

神速剣術の剣心を如何思いますか?

今回の格好つてコスプレになるんじゃないですか?つまりコスプレマニアなんですね。

ミラクル さんへ

地獄汁を送りますから誰かに飲ませて遊んで下さい。て言うか全員に飲ませてほしい』って三つ目恐いんですけどそオオオオオ!」
フェイトは三つ目を見て驚いた。

ミラクル「ふははははははは！今までの恨みいいいいい！」
新八が地獄汁を持って走ってきた。

銀八「作者ガード」

ナナフシ「え？ ぶびやあああああああ！」

地獄汁は全てナナフシが飲んだ。

ミラクル「……まあ満足ですね」

ミラクルはいつもナナフシに苛められていたので満足して去つていった。

フェイト「ひ、一つ目だけぞ」

雷雅「あの剣術はスゲェなア……ククク、一度手合わせを願いてえ
なア……ククク」

銀八「本当に戦闘狂だな！！」

フェイト「一つ目の答えて銀時」

銀時「なつてたまるかアアアアアアアア！ 黒神と真王の所でなつてる
けど」「ではなつてたまるかアアアアアア！」

ナナフシ「デバイスが手に入つたらなるかも」

銀時「やめろおおおおおおおお！」

銀八「と訳で『支配者』さん廊下に立つてなさい」

「最後の質問です。ペンネーム『獄黒』さんからの質問『はあ～い、またまた質問おこらせていきま～す。では、ナナフシさんへ、また、コラボするんですか？（コラボするんだつたらセツセツと言つて、断られて、玉碎して、落ち込んでる。）あつ、ちなみに私ナナフシさんけつこいつすきですよ。（いじりがいありそだから。）』ナナフシ可愛そつ」

銀ハ「一つ田だがコラボなんにしてねえぞ？それにあいつは前向きだから落ち込みもしねえぞ。逆に「あ、来ねえや！」ってぐらいだからな。後、限度を考えろよ。幾ら何でもナナフシは怒りだす時があるからな。これ見て結構心痛めたらしげゼ。あいつビッちかつて言ひついだから」

フロイト「ナナフシうだつたんだ」

銀ハ「と言ひ訳で『獄黒』さん限度を考えて質問を送れよ」

フロイト「それではまた次回」

第七訓・温泉では心と身を癒そう（後書き）

ナナフシ「銀さんがフェイトにもフラグを立てた」

銀時「お前がやつたんだろ！」

ナナフシ「まあ。それではまた次回

」

第八訓・子供は夜更かしをしてはいけません！（前書き）

ナナフシ「今日はおまけ2を載せます」

銀時「投稿されたキャラクターを載せるんだよな」

ナナフシ「はい！」と言つ訳でフェイト！お願い！」

フェイト「『リリカル銀魂』魔法少女と銀髪の侍と白銀の刀』始まります」

第八訓・子供は夜更かしをしてはいけません！

外は夜であり、その間に一つの月が光っていた。
そして影は三つある。

銀時などのはとコーノである。なのはは足に桃色の羽を生やして飛びながらある場所に向かっている。

その向かっている場所とは旅館の近くにある森の中だ。
何故ならそこにジュエルシードの気配を感じたからだ。
森の中にある橋が架かった池には既にジエルシードを封印し終えた
フェイトとアルフとがいた。

「これで、二つ目……」

「順調に集まってるねフェイト」

封印をし終えて安堵の息を漏らすフェイトにアルフは笑顔で賞賛する。

アルフとしてもこの調子ならすぐに全部のジュエルシードが集められると思つた。

ただ、あの白い魔導師じやまものがいなければ話だが。

フェイトが一度封印を終えた時だつた。

「あ…あれつて！」

銀時などのは、ユーノがやつて來た。

「おじおい、ガキがこんな時間まで起きてちゃアダメだろつが」

「銀時……」

フェイトは銀時を見た。

自分は銀時とは戦いたくない……。

フェイトはそう思つた。

（戦いたくない……戦おつとしたひ……考えるだけで胸が苦しくな

る）

フェイトは困つた表情を浮かべた。

「フェイトどうしたんだい？」

アルフがフェイトに訪ねた。

「うんん、なんでもない」

フェイトはアルフにそれだけを言つた。

「それを・・ジュエルシーードをどうする氣だ！？それは危険な代物なんだ！」

ユーノがフェイト達に向かつて叫んだ。

「さあね。答える理由が見当たらないよ。それにあたし親切に言つたよね？良い子にしてないとガブッと行くよつて・・・」

アルフは目をギロリと光らせた。

「いやいや、それは親切とは言わねえ……」

銀時が言つている時だつた。

アルフが人から狼に変わつたのだ。

「おわああああああ！」

銀時はそれに驚いて尻餅をついた。

「ひひひひひ、人が犬になつた！！」

「あたしは狼だ！」

銀時の言葉にアルフは叫んだ。

「犬も狼も同じだろ」

「違う！！」

アルフは銀時に怒つっていた。

「やつぱり彼女は使い魔だつたか」

ユーノは狼になつたアルフを見ながら言つた。

「使い魔？」

なのはは聞き慣れない言葉に首を傾げた。

「そう。あたしはこの子に造つて貰つた魔法生命。主の魔力を命とする代わりにその命と力の全てを賭けて護るのさ」

アルフが自分について説明した。

「フェイト……なのはだつてお前が悪い奴じやないつてわかつてんだ」

「そうだよ。だから私達が分かり合える事だつて！」

「うんん、なんでもない」

「うんん、なんでもない」

「それとこれとは話はが別なんだよー。」

「つー?」

フェイトが肯定の意を見せた事でなのはは聲音を強くしながら必死にフェイトと分かり合おうと試みるが、なのはの言葉をアルフが声を上げて遮る。

「あんた等一人の言うとおりアタシはともかくフェイトは良い子だよ? でもね、だからと言つてアタシ達とあんた達が分かり合えるつて理由にはならないんだよ!!」

「それに……私達はジュエルシードを集めなきやいけない。それは貴女も同じ事。だつたら私達はジュエルシードを求めて争う敵同士つて事になる」

「だからー そんな勝手に決めない為に話し合ひつて必要なんだと思つー!」

(やつぱゆぢやんの為か……)

銀時はそう思つた。

フェイトの言葉に、なのはは声を大きくして言つた。

なのはは必死にフェイトと分かり合おうと言葉を投げ掛けるが、フェイトはそれを受け付けないかのように口を閉じた。

「言葉だけじゃ……何も変わらない……伝わらない!」

フェイトとなのはの空中戦が始まる。

そう言つてフェイトは口を開く。

バルディッシュを構えてフェイトは『ソニックムーブ』でなのはの背後に高速移動して、バルディッシュを死神の鎌のような形にした『サイズフォーム』に変形させて金色の刃でなのはを斬りうとする。

「くつ!」

<Final form>

なのはは足から翼の様なものを展開し、空に舞い上がりつてフェイトの初撃をかわした。

「けど、だからって!」

「賭けて。それぞれのジュエルシードを一つずつ!」

なのはの言葉にまったく聞く耳を立てないフュイトは、なのはを追つて空を飛ぶ。

「なのは…」

まだ魔導師として未熟なのはではフュイトに苦戦を強いられるところノは考えた。

それに純粋に心配もしている。

コーカは慌ててなのはを援護しようとすると、コーカの前に一つの影が立ちはだかる。

「あなたの相手はアタシだよ…」

牙を見せながら威嚇するアルフが居た。

「おいおい

「銀さん！」

「え？ 何？ なのはとフュイトの所に行けってか？ 行けってか！？」

「お願いします！」

「無理だよ。俺空飛べないし」

「それにあんたもあたしが相手だよ」

『まつたく……主よ……空ぐらに飛べるだらう』

銀龍が姿を現した。

「刀が喋ってる…！」

アルフは驚いた。

「ええ？ でも行くのメンドーだからなア」

銀時が愚痴を言つ。

「銀さんアナタ飛べるんですか！？」

コーカは驚いた。

『飛べるぞ。ほら

シルバーオフ・アーマー

いきなり白銀の鎧を纏い、背中にドリゴンの様な銀色の翼が一つ生えた。

「二翼一対の翼だがな」

銀時がそう言つた。

（ま、魔力！…）こいつ魔導士でもないのになんで魔法を使えるんだ

い！？）

アルフは驚いていた。
てか、皆驚くよね。

「それって？」

「シルバー・オブ・アーマー」

「白銀の鎧のもう一つの能力だよ」

銀時はそう言った。

「でも、今頃行つても無駄か……」

銀時が空を見る。ユーノもつられて見てしまう。

*

なのはとフロイトの空中戦。フロイトの足元と前方に魔法陣が展開される。

「Thunder smasher」

バルディッシュから金色の閃光が放たれる。

「Divine buster」

なのはのレイジングハートからも桜色の閃光が放たれた。
二つの閃光が火花を散らせて激しくぶつかり合つ。

「レイジングハート！お願い！！」

「All right」

なのはの言葉にレイジングハートが応える。

桜色の閃光が更に勢いを増して金色の閃光を押していく。

「！」

金色の閃光は桜色の閃光に焼き消された。

フェイトは少し表情を強張らせた。

地上で見ていたユーノは驚いた。

「なのは……強い！」

だがフェイトの使い魔アルフは冷静だった。

「でも…甘いね」

アルフは勝負の結末を読んだ。

「なのは…！」

「…」

「あつ…？」

なのはの砲撃はフェイトには当たらなかつた。

なのはの上空からフェイトは、鎌に変形したバルディッシュを振り下ろす。

「…」

鎌の刃は、なのはの首筋に当たられた。

勝負は決した。

「P U U U O U t」

レイジングハートから女性の電子声が聞こえて、赤いコアからジュエルシードが一つ出てきた。

「レイジングハート…何を…？」

「きっと主人思いの良い子なんだよ」

フェイトはジュエルシードを受け取ると、地上に着地した。

「さつすが、あたしのご主人様」

アルフはフェイトの下へ戻る。

「待つて！」

なのはも地上に降りる。

なのはの声にフェイトは足を止めた。

「できればもう、私達の前に現れないで。今度会つたら、きっと加減なんて出来ない」

振り向かずに、なのはにそう言った。

そしてその後銀時を見た。

「…」

銀時を見て驚いた。

刀を持っており、更には銀時は銀色の魔力を纏つてあり、背中には

ドラゴンの様な銀色の翼が一つ生えていた。

（魔導士でもない銀時が何で魔法を！？）

フェイトもやはり驚いた。

もしかしたらなのはを助けるつもりだったのかも知れないと思った。
フェイトは銀時を見るのやめて去っていった。

「ばいばい」

アルフもフェイトの後を追つた。

余談だが銀時に生えている銀色の翼を見て驚いたのは当たり前である。

『おまけ』

銀八「教えて」

生徒「銀八先生！！」

銀八「ハアイ、質問コーナーを始めるぞ。今回のアシスタンントは」

なのは「高町なのはです」

銀八「それじゃあ行こうか」

なのは「まずはペンネーム『支配者』さんからの質問
『質問です

ナナフシさんへ

地獄汁を送りますから復讐して下さい

凶悪な怪物のラスボスはいますか？

ミラクル ヘ

なのはが貴方の事を阿呆眼鏡と言つていましたが如何しますか?』
作者は?』

銀ハ「ナナフシなら」

ナナフシ「ふはははははははー! 仕返しだアアアアアアアー!」

ミラクル 「ぶぎやああああああああああああああー!」

新ハは地獄汁を飲まされて氣絶した。

二人「「.....」」

二人はそれを見て黙り込んだ。

ナナフシ「二つ目ですけど..... A、S編の最後のやつですね。一
様考えてますよ」

銀ハ「だそうだ。三つ目だが新ハが氣絶の為答えられません..... つ
て言つかあいつなら「なのはちゃんがそんな事を言つはずがない!」
とか言つてそうだけだ」

なのは「そ、そつなの?」

銀ハ「ああ、と訳で『支配者』さん廊下に立つてなさい」

なのは「次です。ペニーム『黒龍』さんからの質問
『黒龍』しつれいな!! ハホン..... 鬼にも角にも、質問します」

1. //ラクルへ。今度はフェイトがあなたを好きだと語ります
けどどうしますか？（。 - - ） - ヒ

3・私は、高町なのはが質問します。そつちの私、頑張つてください
!!

銀時「ん?
なんかお前等、顔に赤いモンが付いてんぞ?」

フェイト・なのは

『『『ケツチャップだから（二口）』』』そつちの私とフエイトちゃんが黒龍さんを殺つちゃつたよオオオオオオオオオオ！』

銀八「いや、生きてるからな！ 一つ目だが」

「ハカル 「本当にすく」

ドカアン！

言いかけた時に金色の閃光が飛んできた。

「ホイト、黒龍さん……嘘を吐かないでください」ホイトはそう言った。

「ホイトで、二つ目だけど……格好いよ。何故か信頼出来るんだよ銀時は」

ホイトはそう答えた。

「二つ目だけど私頑張るよ！そつちの私も頑張つて！」

銀ハ「と訳で『黒龍』さん廊下に立つてなー」

「最後です。『黒神』さんからの質問

『と訳で質問。』

銀さんへ

「で魔導士に目覚めたのであれば、バリアジャケットは是非とも『ラグナ・ザ・ブリットンジ』の『スプレヘ』（黒笑）

神楽へ

僕の小説では貴方はエリオとは師弟関係と言つ形になりました。しかしそのせいでキャロは醜い嫉妬を抱いたジョイソンと化しました。そんな彼女を見てどう思いますか？（黒笑）

ナナフシヘ

出来ればいいの新ハハ口リコン設定はなしにしたほうが良いです。出なければ僕は間違いなく新ハハを軽蔑して酷い扱いをしなきゃいけなくなります。』一つ田だけ銀さん

ナナフシ一考えとこ

銀ハ二つ目だか神樂

鉢ハ それは世の神樂と戸説が原因だよ！」

たのは、
はやははは
三、月たはと

「すみません……それは出来ません……必要になりました
んで。理由はこの後のおまけ2を見てください……あ、でもロリコ
ン設定は要らないかも……でもアニメオタクに墮ちる事がなくなる
のでやつぱ無理です」

銀八と云う訳で『黒神』さん廊下に立つてなきい

なのは「それではまた次回」

『おまけ2』投稿されたオリジキャラ紹介。

ナナフシ「二つ来てます。二つ共『月光閃火』さんからです」

名前：神宮寺 漸呀

年齢 : 20 代前半くらい (僕年齢は忘れた (汗))

容姿

容姿：金髪のウルフヘッドに少し黒の瞳、黒と銀色の髪を纏うた体格のクールガイで甚平姿がトレードマーク

武器：『エンオウ炎龍』（銀時の『銀龍』と同じく突然斬牙の前で
れば一転して勇猛果敢な熱血漢に変わる

現れいつの間にか契約し長い付き合いになつてゐる『喋る刀』、『銀龍』とは違ひ性格はしつかり者で漸呀とはよく口喧嘩になるが、共に信頼し合う仲もある（）

詳細：かつては攘夷戦争で銀時達と共に戦場を駆けたとも戦友であり、【戦場の中を勇猛果敢に駆け抜け、その『黄金』色に輝く髪を血で紅く染め行くその様は正に『戦鬼』…。故に彼の者は…『おつごんせんき黄金戦鬼』と呼ばれた】と敵味方問わず言わしめた程の剣豪戦争の終焉と共にその行方を眩ませ、その後妹（詳細は後ほど）と共に放浪の旅をしていたが…知り合いのからくり機巧技師（源外）の依頼で次元転送装置の実験に付き合わされその際のいざこざで次元転送装置が暴走を起こし次元の歪みに妹共々引き摺りこまれ銀時達と同じ日に遭う（汗）ちなみに、特殊な家柄な為かその身には『不老（寿命で死ねない）』と『鋼体（どんな病気でも数分で治るamp;人智を超えた舌と胃腸（汗））を持つ』ている

名前・神宮寺 しんぐうじ
葵 あおい

年齢：10代後半くらい（実年齢は忘れた（汗））

性別：

容姿：金髪の肩まであるウエーブヘアに淡い黒の澄んだ瞳、身長が平均的（165cmくらい）な割に意外と抜群のスタイルで顔立ちはやや童顔、兄と同じ甚平姿だがどちらかと言えば華やかな方

性格：普段はおしとやかな大和撫子だが、一度武器を手に取ると一転してお転婆で男勝りな性格に変わる武器：薙刀（刀身は木製、どんなにぶつ叩いても壊れない（汗））

詳細：漸呀の実妹であり、漸呀に負けず劣らずの強さを持つ攘夷戦争終焉後、実兄である漸呀の帰還と同時に放浪の旅に付いて行く事になり、その最中立ち寄ったからくり機巧技師（源外）の工房でのドタバタの後漸呀と共に次元の歪みに引き摺り込まれて銀時達と同じ目に遭う（汗）漸呀と同じく特殊な家柄な為かその身には『不老』と『鋼体』を持つているちなみに、実は隠れオタクな所があり…新八と出会った時に同族の勘を感じ親愛と共にその本質の『武士としての芯の強さ』に強く惹かれ恋愛感情を抱く

ナナフシ「どうでしたか？後『月光閃火』さん……『炎鳳』の事なんですけど……どんな能力ですか？『銀龍』と同じでよろしいんでしょうか？後、デザインをお願いします」

銀時「後二人目だけど新八に春が来た！？」

ナナフシ「来ましたよオ……これは兄が採用されるのに妹が採用されないのは可笑しいでしょ？それに俺も新八に春を迎えてやったかったのよ！」

銀時「お前……」

ミラクル 「ありがとつー『月光閃火』さん……」

ナナフシ 「で、『炎鳳』を見て思った……『銀龍』と『炎鳳』だけ
じゃなんだな……つて」

銀時 「は？」

ナナフシ 「つまり『銀龍』は『龍』、『炎鳳』は『鳳凰』じゃない
かな？これを見て思った……どうせなら後三つ作らねえ？つて」

銀時 「おい！」

ナナフシ 「一つは『虎』、もう一つは『麒麟』、もう一つは『玄武』
つて」

銀時 「何故！？」

ナナフシ 「五つとも中国関係じゃん！だからー」

銀時 「そつ言つ事かよー！」

ナナフシ 「その内の一つ『虎』を魔剣士になるスバルに使わせる気
満々」

銀時 「何故！？ティルヴィング・エアを使はんじやないのかよー？」

ナナフシ 「魔剣士化ネタはStrikers編を書く時に許可を黒
神さんから貰おうかなって。それにティルヴィング・エアも使わせ
るよ。でも、そのままじゃあストーリーが変わらない気がするから
持たせようと思つた」

銀時「なるほど」

ナナフシ「『虎』はスバルのイメージカラーに合わせて『蒼』にするつもりだから」

銀時「そうかよ」

ナナフシ「ついでにこの五つを『五天魔刀』、もしくは『五天神刀』にしようかと思っている」

銀時「凄い所まで来たぞ！？」

ナナフシ「と言つて募集開始！」

銀時「何の！？」

ナナフシ「下記を御覧あれ」

・スバルに銀時同様『喋る刀』五つをどつちの呼び方にするか

- 1、賛成
- 2、反対

・『銀龍』達『喋る刀』五つをどつちの呼び方にするか

- 1、五天魔刀
- 2、五天神刀

・『虎』『麒麟』『玄武』を元にした『喋る刀』の名前とデザインを募集します。たぶん『銀龍』と同じ能力だから。ちゃんと自分で考えていてますので。

ナナフシ「これぐらいかな。後、一番田が反対が多かつた場合は『虎』の方の名前も変わるかも」

銀時「でも、もし一つ目が賛成だつたらいいのスバル……凄い事にならねえか?」

ナナフシ「まさかア。スバルに『虎』を使わせる理由はこの五つの中でスピードがあるからですよ」

銀時「なるほど。『虎』を静剣用にしようつて言つ考えか。それにスバルは速いからな」

ナナフシ「そつとつ事です。それでは協力お願いします!締め切りは12月20日までです」

第八訓・子供は夜更かしをしてはいけません！（後書き）

ナナフシ「『』協力お願いします！」

銀時「おいおい」

ナナフシ「それではまた次回！」

第九訓・綺麗な物にはトゲがある（前書き）

ナナフシ「やつとこ」まで来た

銀時「おいおい」

ナナフシ「今の所のアンケート数です」

スバルが銀時同様『喋る刀』持たせる。

1、賛成 4票

2、反対 1票

『銀龍』達『喋る刀』五つをどっちの呼び方にするか

1、五天魔刀 2票

2、五天神刀 3票

ナナフシ「今の所こうですね」

銀時「おいおい、一番目は良い勝負じゃねえか

ナナフシ「12月20日まで受け付けてるのでよろしくお願ひします！」

なのは・フエイト「『リリカル銀魂』魔法少女と銀髪の侍と白銀の刀』始まります」

第九訓：綺麗な物にはトゲがある

銀時は公園に居た。

誰もいない公園で、一人ベンチに座り込んで考えていた。

ジュエルシードは危険な物なんだ！

ユーノが言つた事を思い出す。

「危険な物ねえ…」

そう呟いて夕焼けの空を見上げた。

*

銀時はなのはとユーノと一緒に街中でジュエルシードを探していた。三人がジュエルシードを探している時だつた。

いきなり空が暗くなり、海では激しく雷鳴が轟く。

「こ…これは…？」

別々に探してたユーノが街の異変に驚く。

「こんな街中で強制発動！？」

空を見上げてユーノは叫んだ。

「く…！広域結界！間に合え！」

ユーノの足下に緑色の魔法陣が展開された。

すると、ユーノの広域結界で世界の色が変わつた。

そしてなのははジュエルシードの光を確認した。

『あれはジュエルシードの光だな』

銀龍がそう言つた。

なのははレイジングハートを構える。

「リリカルマジカル！」

レイジングハートに桜色の光が集束される。

「ジユエルシード、シリアル19！」

バルディッシュにも金色の光が集束される。

「封！」

「印！」

二人のデバイスから閃光が放たれた。閃光を受けたジユエルシードは光を失い、宙にたたずんだ。

なのはと銀時は急いでジユエルシードのある場所に向かつた。

ユーノも走る。

「やつた！なのは、早く確保を！」

「そうはさせるかい！」

空からアルフが襲い掛かる。

ユーノが障壁を張つて防御する。

銀時は木刀を腰から抜いて構える。

「おつと、あんたの相手は俺だぜ！」

急に銀時の後ろから声が聞こえ振り返ると……刀を持ち、和服を着た男が居た。

「テメエは！」

銀時は後ろに飛んでそいつを見た。

「あれま。雷雅の次はあんたですか……人斬りさんよオ」

「ククク、久しづりだねエ……白夜叉」

銀時の目の前に居る男は『雷撃』の一人 - - - - 川下

ざん
斬だつた。

この男は人斬りの異名を持ち、雷雅同様戦闘狂である。

「銀さん……この人は？」

ユーノが銀時に訪ねる。

「雷雅が作り出した組織『雷撃』の一人、人斬りの異名を持つ川下

斬だ」

「人斬り！！」

ユーノは驚いた。

「お前じゃあ無理だ！」こいつは俺に任せろ…。」

「わ、わかりました」

ユーノは斬を銀時に任せた。

銀時と斬は対峙しあう。

「で、お宅等はこの世界で何がしたいんだ？」

銀時は斬に訪ねる。

「ただ強者を求めているだけだ」

斬はニヤリと笑う。

「そうかい」

銀時のその言葉が合図の様に二人は走り出した。

「オラア！」

「ハア！」

ガキン！

木刀と刀がぶつかり合つ。

銀時と斬は一度後ろに下がつた。

「行くぞ！」

銀時は斬に向かつて、走り、連続で木刀を振る。

「くつ！」

斬は銀時の型が変わる剣に苦戦した……そして。

ドカア！

「ぐつ！」

木刀が斬の顔面に直撃した。

「ちつ！」

斬は素早く刀を振る。

銀時はそれを後ろに飛んで避けた。

「さすが白夜叉だ」

斬は不気味な笑みを浮かべる。

「へ、ただのザコにやられつかよ

銀時はそう言った。

「そうかい……」

すると、斬は銀時の目の前まで移動して刀を振り上げてきた。

銀時はそれを何とか避けて、斬に向かって木刀を振った、

斬はそれを刀で防ぐ。

「ちつ！」

「甘いよ白夜叉！」

斬は銀時の腹に蹴りを入れ、蹴り飛ばした。

「ブツ！」

銀時はそのまま地面を転がり、素早く起き上ると目の前に斬が来ていた。

斬は思いっきり刀を振り下ろしてきた、

銀時はそれを木刀で何とか防いだ。

銀時はその態勢のまま斬に蹴りを入れた。

「ぐつ！」

斬が怯んだ所に木刀を振り下ろし、斬の顔面に直撃する。

「があああああああ！」

そのまま斬は殴り飛ばされた。

斬は起きあがると銀時を見る。

「ククク、今回はここまでだ

「あ？どういうこつた？」

斬が空に指を差す。

銀時はつられてその方向を見る。

*

フェイトは、なのはの後ろに回る。

「Flash move」

足に展開した翼が羽ばたき、なのははフェイトの後ろに回った。

「Divine shooter」

レイジングハートから桜色の閃光が放たれる。

「Defencer」

フェイトは金色の障壁を張つて閃光を防ぐ。

「フェイトちゃん！」

「！」

突然、名前を呼ばれてフェイトは驚いた。

「話し合いだけじゃ……言葉だけじゃ何も変わらないって言ってたけど……話さないと、言葉にしないと伝わらない事だつてきつとあるよ！」

「……」

フェイトは何も答えない。

「何も知らないのにぶつかり合つのは私、嫌だ！」

声に出して必死に自分の想いをフェイトに伝える。

「私がジュエルシードを集めるのは、それがコーカス君の探し物だから。最初はコーカス君のお手伝いで集めてたけど、ジュエルシードの力で街の人や大切な人に危険が降り懸かつたら嫌だから！」

「……」

フェイトは黙つて、なのはの話を聞く。

「これが……私の理由！」

「私は……」

なのはの想いに戸惑いながらフェイトが答えようとした時、

「フェイト！ 答えなくていい！！」

アルフがそれを止めた。

「！」

「優しくしてくれる人達の所で、ヌクヌクと甘つたれて過ごしてきましたガキんちよに何も教えなくていい！！」

アルフの言葉に銀時は顔を険しくした。

（何か関係あるのか？ あいつの母親と……）

銀時はそう思った。

「じゃあな白夜叉」
斬は姿を消した。

銀時は気にしなかった。

あっちの方が一番気になるからだ。

「あたし達の最優先事項はジュエルシードの捕獲だよ！」
アルフの言葉でフェイトは我に帰り、ジュエルシードの方へ向かつた。

なのはもジュエルシードへ向かつ。

そしてジュエルシードの前で、一人の持つデバイスがぶつかり合つた。互いのデバイスにヒビが入る。

その瞬間、ジュエルシードから強烈な光が放たれた。

「フェイト！」

「なのは！」

アルフとゴーノが叫んだ。

フェイトと、なのははジュエルシードから離れた。

フェイトは傷ついたバルディッシュを見た。

「大丈夫？ 戻つてバルディッシュ」

「Y e s , s i r 」

バルディッシュは小さな三角系になり、フェイトの手の甲の手袋に戻つた。

フェイトは田の前に佇んでるジュエルシード田掛けて走つた。

「フェイト！ ダメだ危ない！ ！」

アルフの制止も聞かず、フェイトはジュエルシードを掴み取る。するとジュエルシードから強い光が放たれる。

「く…！」

フェイトはその場に座り込み、魔法陣を展開させる。

「止まれ」

光が激しさを増す。

「止まれ…止まれ！」

手袋が破れて血が吹き出る。

「あのバカガキ！！」

木刀を手放して銀時はフェイトに駆け寄った。

「銀時！何のつもり！？」

「ひつするんだよ！！」

ジユエルシードを握るフェイトの手を握った。

直後、銀時の体に激痛が走り、手から血が吹き出た。

「ぐああああああああ！！」

銀時は悲鳴を上げた。

「銀時！」

「銀さん！」

フェイトとなのは、コーノは銀時の名を叫んだ。

「がああああああああ！！」

体に激痛を受けても銀時はフェイトの手を離そうとはしなかった。

「あいつ！敵なのに何でそんな事をするんだい！？」

アルフは銀時の行動がわからなかつた。

「銀時！」

フェイトが銀時の名を呼ぶ。

「バ…バカヤロー…さつさと…封印しやがれ…！」

「銀時…！くつ…止まれ、止まれ、止まれ、止まれ！」

懇願するようにフェイトはジユエルシードを握り締める。

やがてジユエルシードの光が收まり、魔法陣も消える。

銀時は地面に膝をついた。

「銀時（銀さん）！」

フェイトは銀時の体を支え、なのはは銀時の木刀を拾つた。

「銀時！しつかりして！」

銀時の手からポタポタ、と血が地面に落ちる。

「…く…く…フェイト…オメーはやればできる子だと信じてた…ぜ

…」

銀時の言葉にフェイトは口を開いた。

「何で私を助けよつとしたの？何で？私はあの子の敵だよ」
フェイトは涙目で言つ。

「前……言つたろ……忘れたのか……？」

「あつ」

フェイトはあの言葉を思い出した。

『それに……俺はなのはの味方だからボンボン助ける事は出来ねえ
がお前が危なかつたら助けてやるよ』

フェイトはあの時銀時が言つた言葉を思い出したのだ。

「銀時……」

「へへ……俺は少し疲れたわ……」

銀時はそのまま目を閉じた。

そしてフェイトはアルフに銀時を運ぶ様頼んだ。

「わかつたよ」

アルフはそれを承知した。

銀時はフェイトを助けようとしてくれたからだ。

アルフは銀時を抱きかかえて、フェイトと共にビルを渡りながら去つていった。

『主は我に任せとおけ』

銀龍はなのはとユーノの目の前に現れてそれだけ言つと姿を消した。
(銀さん……)

なのはは銀時の木刀を強く握った。

『おまけ』

銀八「教えて」

生徒「銀八先生！」

銀八「ハァイ、質問コーナー始めるぞ。今回のアシスタントは

銀龍『主の相棒である銀龍だ』

銀八「それじゃ、質問行こ」うか

銀龍『まずはペンネーム『獄黒』さんからの質問だ
』では、質問しますね。

・なのはに質問、ダークマターをたべると、銀時に
なんて大嫌い』って言つて、どつちのほうが『いや?』だそつだ。
なのはよ

なのは「銀さんなんて大嫌いって言つのが嫌に決まつてますよお
おおおおおお！」

銀八「だそつだ。と言つて『獄黒』さん廊下に立つてなさい」

銀龍『次だ。ペンネーム『支配者』さんからの質問だ
』銀時へ

あなたに』『スプレ・ザ・侍』の称号を『えます。

ナナフシさんへ

何で新ハガ『ミラクル』になつたんでしたっけ?……主よ

銀八「普普通、その称号貰えよ」

銀時「絶対嫌だ！」

ナナフシ「一つ田ですけど……」
『それの生みの親『霜月サヤ』さん曰く、『人気投票ミラクル八位おめでとう』って言う意味らしいです
よ……ついでにこれを作るきっかけになったのは原作者が「ほら、
新ハミラクルだね」って言つたそうです。それでミラクルと八位を
合わせて『ミラクル』になりました」

銀ハ「そ、ひ、ひ、意味かよー。それでは『支配者』さん廊下に立つてな
さいー。」

『銀龍』次だ。『ペンネーム』『黒神』さんからの質問だ
『では質問を。

黑
神

「マヨラーへ、前から聞こうと思いましたけど、銀時はリリカルキヤラにメツチャモテまくつていますが『リリカル銀魂シリーズ』の貴方は全然モテていないような気がします。

そんな自分は銀時以下だと思うか？（黒笑い）

ティアナ

黒神

「その2、そう言えばマヨラーもロリコンに墮ちるような事になりそうな気がしますが気のせいでしょうか？特に烈火竜さんの小説では貴方はアギトに…」

ティアナ

「止めてええええ！！ それ言つたらマジで怒られるからあ…！」
……土方』

土方「うるせえよ！万事屋以下なんて納得出来ねえ！後、黒神！俺はロリコンに何かならねえぞ！喧嘩売つてんのか！？今からでも殴り込みに行つてやろうか！？」

土方は完全にきれていた。

銀八「行くなら勝手に行つてこい。と言つて『黒神』さん廊下に立つてなさい！」

銀龍『次だな。ペンネーム『黒龍』さんからの質問だ。
『黒龍』では、質問いきま～す』

1・フェイトに質問。銀さんが“俺の隣にいてくれ”と言つてましたが、あなたはこの言葉をどう受け止めますか？

2・ナナフシさんに質問。あなたが一番苦手なタイプの人間はなんですか？

3・なのはに質問。銀さんと大人のホテルに入つた時の事を想像してみてください。

銀時「3だけどんでもねえ質問しねがつた！！？？」『ほむほむ子供に答えさせて良いのか？』

銀龍は疑問に思つた。

なのはは顔を真っ赤にさせ、頭から湯気が出て倒れた。

銀龍 『……一つ目だが』

「隣に居るよーずっと居ても良こ！」

アーティストになれた。

銀八「んで、一つ目は？」

ナナフシ「そうですねえ……不良みたいな奴と自分が正しいと思つてゐる奴ですかね。偽善が一番嫌いですね……そう言つ奴見ると苛立つてきます」

銀八「時空管理局が嫌いな訳だ。」
「と言う訳で『黒龍』さん廊下に立
つてなさい！」

『銀龍』『最後だ。ペンネーム『坂井ゆり』さんからの質問』
『「銀八先生に質問です」

1・なんでミラクルは
そんなに変なんですか?

（兄弟のお妙さんも周りにいる人もみんな綺麗なのに）

2
ミラクル
へ

たまに死にたくなりませんか？

3. ミラクル以外へ

古文觀止

「おお、アーヴィング、お前がアーヴィングだよ！」

ミスエ川 に優食(夢になら) われなしよひ

最後に

ミラクル へ
なんで存在してるんですか?

九月一
在在
一
九月一
九月一

銀ハ先生おねがいします！！』……坂井めらよ。質問は三つまでなのだ。今回は載せたがな」

銀八「それでは答えて行こうか」

ミラクル 「うるせええええええええええええ！何で僕のいじめ質問なんだ！？一つ目は知るかアアアアアアア！――一つ目はならんわア！」

銀時「三つ目だが、ドンマイだミラクル」

神楽「そうアル。なのは、フェイト、偏食には気を付けるアル」

なのは「は、はい」

フェイト「そんな事つてあるのかな？」

銀龍『ないだろまぜ』

ミラクル「最後の質問なんでもう酷すぎだろオオオオオオオオ！
それは原作者の空知に言えええええええええええええ！」

銀八「と、言つて『坂井ゆら』さん廊下に立つてなさい！」

銀龍『それではまた次回だな』

第九訓・綺麗な物にはトゲがある（後書き）

ナナフシ「……」

銀時「……何あの状況？俺人質みたいじゃん」

ナナフシ「……」

銀時「何か答えるよ」

ナナフシ「……人質ではないでしょ？」

銀時「それかよ！ 知るかよ！」

ナナフシ「と言つ訳でまた次回！」

ナナフシ「面白い物見つけたぜやふうへ……と言ひ訳でなのは、フ
「イト」

「のは・フ・ヒ・イ・ト・「・は・レ・?・」

ナナフシが懐から一枚の

それを見て、二人は顔を赤くし、目を輝

なのは・フハイド「『此の一事』」

二人はナナフシからそれを貰つた。

銀時「何渡したんだ?」

銀時

ナナフシ「これ」

ナナフシが見せたのは銀時に猫耳と尻尾が生えており、銀時の顔がニッコリ笑つていて、愛らしい写真だった。

ナナフシ「これ……銀時ラバーズに見せたらひとたまりもありませ

愛らしい婆が行く

ナナフシ「ふふふ、これを他の次元の銀時ラバーズに……」

金田一 やあ、

なのは・フエイト「『リリカル銀魂』魔法少女と銀髪の侍と白銀の刀・『台風アーミー』

第十訓・いやとした食生活をおくれ！

フェイト達はマンションの部屋に戻った。氣絶してゐる銀時を、フェイトの部屋のベッドに寝かせて傷の手当をしてゐる。

フェイトの方の傷は銀時が庇つたおかげで軽いもので済んだ。

「これでよしつと」

アルフが傷の手当を終える。

「銀時……」

フェイトはそつと銀時の手に触れた。

「「めんなさい……私のせい……」」

フェイトは悲しげに顔を俯かせた。

「フェイト……」

隣に座つてゐるアルフは優しくフェイトの肩を抱いた。

「「ごめんね銀時……本当に「めんなさい……」」

俯きながらフェイトは謝つた。

その時。

「何勝手に自分のせいにしてんだ」「ノヤロー」

声がした。

フェイトは顔を上げて銀時を見た。銀時はいつの間にか目を開けていてフェイト達を見ていた。

「銀時……」

「気がついたのかい！？」

「ああ」

ゆつくりと銀時は上半身を起こした。

「銀時……本当にごめんな。私のせい……銀時を危ない目にあわせて

……」

フェイトはまた悲しそうな表情で顔を俯かせる。

銀時がため息をついた。

「顔上げろ、フェイト」

銀時の優しい声が聞こえた。フェイトはゆっくりと顔を上げた。

「銀時……」

「コイツは俺の意志で動いて、できた傷だ。だからそりやつて自分を責めるんじゃねーよ」

「銀時……」

場の空気が少し和らいだ感じがした。

「けどな、フェイト」

銀時は微笑んで、しばし間をとった。

「やつぱお前のせいだろ？がアアアアアア……」

突然、銀時が豹変して怒声を上げた。

鬼の形相になつた銀時は、フェイトの頭に拳骨を食らわせた。

「つ……」

フェイトは両手で頭を押さえて痛みに悶えた。

「あんた何やってんだい！？」

アルフが銀時に飛びかかるうとして……

「おすわり！」

「わんつ……は！」

銀時の言葉でアルフは思わず、おすわりをしてしまつた。

「フェイト。何でお前は一人で無茶をするんだ？」

「……」

フェイトは黙り込んでいる。

「ガキのくせに、何でも一人で背負おつとじやがつて

「……」

フェイトはまだ黙り込んだまま。

フェイトの様子に銀時は一度目のため息をついた。

そしてゆっくりと片手をフェイトに伸ばした。

「……」

また殴られると思ったフェイトは、ビクッと体を震わせて目を開じた。

だが、頭には痛みではなく暖かさを感じた。ゆっくりと目を開ける

と、銀時はフェイトの頭に手を乗せていた。

「お前は、まだガキなんだからよ。もつと周りを頼れ。甘えていいんだよ。お前にはアルフって最高のパートナーがいるだろ?」

微笑みながら銀時はフェイトに言った。

言われてフェイトはアルフを見た。アルフも微笑みながらフェイトを見つめてる。

「ま、俺もな」

そう言つて銀時はフェイトの頭から手を離した。

「銀時……」

フェイトは銀時に顔を向けた。

「もう一人で無茶するんじゃねーぞ。いいな?」

フェイトを真っ直ぐに見ながら銀時が言う。

「…うん」

フェイトは首を縦に動かして答えた。

フェイトの答に銀時は満足そうに笑つた。二人の様子を見守つてたアルフも嬉しそうに笑つて尻尾を振つてゐる。

その時だつた。

銀時の腹の虫が鳴つた。

『あ……』

三人は同時に声を上げた。

「飯……良いか?」

銀時が訪ねるとフェイトは頷いた。

「思えばテメエには挨拶してなかつたな。俺は坂田銀時だ」

「あたしはアルフだよ」

二人は挨拶をした。

*

フェイントアルフが夕食をテーブルの上に置いた。

「それじゃあ食べよつかフェイント

「うん。 いただきます」

とフェイントが食べようとした時。

「ちょっと待て」

「え？」

銀時がフェイントを止めた。

「フェイント。 アルフ。 これは何だ？」

銀時はテーブルの上を見た。

「何つて夕食だけど……」

テーブルに置かれてるのはインスタント料理と冷凍食品ばかりだった。

「バッキヤロオオオオオ……」

テーブルに置かれた料理を見て銀時はテーブルに足をのつけて二人に怒鳴った。

「「えつ！？」」

銀時の勢いに圧されてフェイントとアルフは体を大きく震わせた。
「育ち盛りがこんなモンばつか食つて、ちゃんとしたメシ食わねーとどーなると思つてんだああ！！」

銀時は怒りの形相で一人に怒鳴った。

「あの……えつと……ごめんなさい……」

銀時の迫力に圧されてフェイントは戸惑いながら謝った。

「それからアルフ！！」

銀時はアルフを指差した。

「お前は何を食おうとしてんだ！？」

「何つて……」

アルフは手に持つてた箱を銀時に見せる。

「ドッグフードだけど」

「やっぱ犬じやねえか！！」

「違う！狼だ！」

「え？」

アルフが怒鳴り返す。

「ドッグフード片手に持つて言つても説得力ねーんだよ！…ってか
お願いだからドッグフード吃べるのはやめてくれ！何か見てて悲し
くなつてくるから！…」

銀時は頭を抱えて叫んだ。

「あ～銀時…大丈夫かい？」

恐る恐るアルフが声をかける。

「ちつ。しようがねえ。俺が作るしかねーか」

そう言つて銀時は台所に向かい冷蔵庫の扉を開けた。

「…」

冷蔵庫の中を見て銀時は絶句した。

「今度はどうしたんだい銀時？」

アルフが歩いてきた。

「冷蔵庫の中が空じゃねーかああああ…！」

再び銀時が叫んだ。

「それに銀時、その手で出来るの？」

「あ……」

銀時はフェイントに言われて気付いた。

*

結局銀時達はインスタント料理を食べて夕食を済ませた。

ソファに銀時達は座つていた。

「なのはとコーカは心配してねえかな？……それに木刀置いてきて
しまつた」

銀時は完全に人質状態だと思つていた。

「ここが何処だかわからねえから帰りよつがねえし……しかもこの
町の事よく知らねえし」

銀時は諦めていた。

「銀時大丈夫?」

「ああ……」

フェイントの問いに銀時は答えた。

「しょうがねえ。ここに住んで良いか?俺なのはの所に帰ることも帰られねえから」

銀時が聞くとフェイントは頷いた。

「まあ、あたしの『主人様』が良いなら良いよ」

アルフも許可をした。

『まったく……主よ。我を忘れてはいなか?』

いきなり銀龍が姿を現した。

「おお、銀龍」

『まったく、我の自己紹介もせねばならんのに』

「すまんすまん」

銀時が銀龍に謝っていた。

フェイントとアルフは銀龍に驚いていた。

「銀時……それは?」

フェイントが訪ねると

「こいつか?こいつは」

『我は銀龍と言う。主の相棒だ』

銀龍はそう答えた。

「デバイス……ではなさそうだね」

フェイントは疑問に思つた。

『うむ、ユーノと同じ反応か』

『ま、こいつのおかげで俺は魔法を使えるんだけどな』

「え!?」

二人は驚いた。

「それデバイスじゃないのに!?」

フェイントは声を上げた。

「ああ、不思議だよな」

銀時は答えた。

「不思議な刀だねえ」

アルフは銀龍を見る。

「いやいや、犬の耳と尻尾がある方が珍しいぞ」

『 そ う だ な 』

「あたしは狼だ！」

アルフは狼と言つた。

それはしてお體の耳いておあい一とは全然違ひだ

あさ そにたな

金田と金龍の言葉は「シヘリとアリ」は首を傾げた

それは銀時が元の世界で万事屋の下の隣に住んでる
全然聞かない
猫耳年増女を思い出して、いた。

「何を話してゐる銀時？」

卷之三

「ア川ノを見てな、俺の知り合いにも、頭に鷹の耳が付いてる奴がいるんだよ。でもソイツは顔は濃いし、性格は悪くて最悪なんだわ」

ソイツも使い魔なのかい？」

いや、天人だ

天人？

アルフは首を傾げた。

卷之三

11

「んで、ソイツに比べたらお前の方が可愛いなと思つてな」「えっ！？」

銀時の言葉にアルフは顔を赤くする。

「ああ。お前は可愛い……」

銀時は口元を吊り上げた。

「犬だ！」

「狼だ！！」

アルフは銀時の言葉を即座に否定した。

「はいはい。わかつたよ」

「それよりもこの世界にそんなのが居たなんて」

フェイントは銀時がまだ『次元漂流者』とは知っていない。

「何言ってんだ？俺の世界の話だよ」

「え？ どういう事？」

銀時の言葉に一人は首を傾げた。

『思えば主よ。この一人に我等の事は話していないぞ』

「そうだつたな」

銀時はフェイントとアルフに説明した。

「銀時は『次元漂流者』だつたの！？」

フェイントは驚いた。

「まあな

「そんな世界が存在するんだね」

アルフは銀時の世界に驚いた。

「思えば銀時つて魔導士じやないよね？」

「あ？ そうだが」

「銀時つて何者なの？」

フェイントは銀時に訪ねた。

「思えば凄い事をやつてのけてたね。銀時は」

アルフも思った。

雷雅との戦い、斬との戦い、どれも凄いものだった。

「俺は『侍』だ」

「『侍』？」

フェイントとアルフは首を傾げた。

「自分の武士道を持つてて、そいつを貫くのが侍だ」

「自分のルール…」

フェイトが小さく呟いた。

「ふうん。じゃああの木刀は？真剣とやり合って折れないなんて丈夫だよね」

アルフは銀時がよく使っていた木刀を聞いた。

『あれでやろうと思えば隕石も壊せるからな』

「「隕石を！？」」

二人は驚いた。

隕石を木刀で壊せるなんてありえないからだ。

「凄い木刀なんだね」

『だが、あれはt……！』

急に銀龍は黙り込んだ。

銀時が黙らしたからだ。

「あれはな、修学旅行に行つた時に洞爺湖に住む仙人に貰つたんだよ

「仙人に貰つたのかい！？」

「す……凄いよ銀時！」

銀時の話にフェイトとアルフは驚く。

確かに銀時の木刀は辺境の星に生える『金剛樹』と呼ばれる樹靈一万年の木から作られた代物で、そこらの真剣より丈夫で何でも斬れる。

だがこの木刀、なんと通販でお手軽に手に入るのだ。しかも中には紛い物もあるとかないとか。

「銀時つて凄いんだね」

フェイトは完全に銀時の嘘を信じている。

(主……知らんぞ)

バレた時の恐ろしさを銀龍は想像した。

「後だがな。お前の母ちゃんに会わせてくれねえか？」

「え？」

フェイトはそれだけ言うと黙り込んだ。

アルフはフェイトに何か言つているようだ。

『で、でも』

『銀時ならあの人からフェイトを護ってくれるかもしれないよ』

『大丈夫だよアルフ。母さんは私の為だつて言つてたし』

微妙に聞こえる声。

(やつぱ何かあんのか?)

銀時は疑問に思つた。

「ダメか?」

銀時は訪ねた。

「……」

フェイトは黙つてゐる。

『我と主は会つて話がしたいだけだ』

銀龍も頼む。

「わ、わかつた。良いよ

フェイトはそう言つた。

銀時はフェイト達と翌日に行く事になった。

『おまけ』

銀八「教えて」

生徒「銀八先生!」

銀八「ハァイ、今回のアシスタントは」

アルフ「フェイトの使い魔のアルフだよ

銀八「と言つて質問行こうかア」

アルフ「まずはペンネーム『支配者』さんからの質問

一人ぼっちですね。さびしくて死にたくなりませんか？
唯でさえ主人公っぽくないのに

ミラクル に質問

本名無視されますね。それって貴方には存在価値が無いと思われてるからじゃないですか？

んで、3つ田の質問

皆さんへ

屁怒紹ティラノと戦つて勝てますか？
実際に送りますんで皆さんで戦つてみてください（黒笑）』ちよつと三つ田ええええええええええ！』

銀八「来る前に他の一つ答えるぞ！銀時！」

銀時「寂しいが死にたくはならねえよーてか、唯でさえ主人公っぽくないのについてどういう事だ！」

銀八「一つ田！」

ミラクル 「何だとオオオオオオオ！そり思つてゐるのか…？作者！」

ナナフシ「いや、氣に入つてるだけ」

ミラクル 「本当に戻せえええええええ！」

銀八「だそりだつて來たアアアアアアアア！」

しばりくお待ちぢくださー……

銀八「死ぬかと思つた……」

銀八はもぢりん、眞^マボロボロだった。

銀八「と、言つて、『支配者』さん……恩^シいもん送らないでぐだ
さい」

アルフ「つ……次だよ。ペニーネーム『黒龍』さんからの質問
『黒龍』では、質問します」

1・フェイトに質問。もしなのはを倒したら銀さんと結婚できる権
利を手に入れられるとしたら、どうしますか？

2・フェイトとなのはに質問。銀さんは、結のアナと言つ女性のフ
アンだそうです。二人はどう思ひますか？ ショックで銀さんへの
思ひを諦めますか？（黒笑）

3・雷雅質問。魔導師の中であなたが興味ある人物は居ますか？『
フェイト』

フェイト「全力で行くよー」

銀八「ホント銀時が好きだな！」「つ田だが」

なのは・フェイト「諦めない！」

銀ハ「むかつぐ・三つ田だが」

雷雅「そうだな……今の所は……フェイトかなのはだな」

銀ハ「だそうだ。と言ひ訳で『黒龍』さん廊下に立つてなさい」

アルフ「最後だよ。ベンネーム『月光閃火』さんからの質問
『輝刃』……基本的に伏せ字の意味が無いな……（汗）。あ……質問……行
くぞ？ まづは俺からだ。」

1・雷雅に質問……ふつちやけ、好きな女性のタイプって……居るか？

たはは……（汗）おもいつきリストレーントなの言つたな……（汗）。次
は俺からだ。

2・ナナフシさんに質問……色々な『リリカル銀魂シリーズ』の銀時
のよう、現実でモテたらどうする？もちろん、言い寄つてくる女
性は皆ブツ飛んだ娘ばかりで（苦笑）。

輝刃「……それはある意味大変そうだな……（滝汗）。いくら男のロマ
ンと言えど、言い寄つてくる女性達が皆ブツ飛んだ娘ばかりなのだ
からな……（汗）。」「一つ目だが」

雷雅「そうだなア……俺は今まで戦闘にしか興味がなかつたからな
……どっちかって言つとないかもな」

銀ハ「だそうだ。二つ目だが」

ナナフシ「嬉しいですけど、それはさすがにちょっと……俺銀さん

じゃないんで無理です……」

銀八「だそうだ。と言つ訳で『月光閃火』さん廊下に立つてなさい」

アルフ「質問は以上だよ」

銀八「それではまた次回」

第十訓…ひやんとした食生活をおくれー（後書き）

銀時「ナナフシイイイイイイイイ！それ全部よこせHHHHHHHH！」

۹۷

銀時「やめてええええええええ！」

ナナフシ「それではまた次回！」

第十一訓：自分の子供を虐待してはいけません！（前書き）

ナナフシ「暇だから連続投稿」

銀時「おい！」

ナナフシ「何か面白いから次は銀さんの犬耳と尻尾のやつをなのはとフェイトにあげた」

銀時「またかよオオオオオオオオオオ！」

ナナフシ「ふははははははははー次は何にしてやうつかなアー！」

銀時「やめてくれエエエエエエエエー！」

銀龍『……』リリカル銀魂』魔法少女と銀髪の侍と白銀の刀』始まるぞ』

第十一訓・自分の子供を虐待してはいけません！

翌日。

銀時達はマンションの屋上にいる。

「銀時。準備はいい？」

「ああ」

これから母親に、これまでの報告とジューエルシードを渡しにいく。フェイトは喫茶店で買ったケーキが入った箱を持っている。母親へのお土産だろう。

「じゃあ行くよ」

「おお」

「次元転移。次元座標。876C 4419……」

フェイトが呟くと魔法陣の光が強くなつていぐ。

「開け、誘いへの扉。時の庭園、テスター・ロッサの主の所へ！」魔法陣が強い光を発し、三人を包み込んだ。

*

高次空間内『時の庭園』。

光が止み、三人は時の庭園に到着した。

その直後、銀時は顔を青くして、

「おぼろ、ろ、ろ、ろ、ろ、！…」

盛大なゲロを吐いた。

「銀時！？」

「ちょっと…どうしたんだい銀時！？」

二人が心配そうに聞いてくる。

「な…何か気持ちわ…オボロロロロ…！」

「まだ吐くんかい！…」

アルフがツッコんだ。

銀時が気分を悪くしてゲロを吐いた理由。

それは『高次空間内』という空間が、今までいた所とは別の環境の空間だからだ。この空間の環境に慣れていない銀時は気分を悪くしてゲロを吐いたのだ。

「わ……悪い……先行つててくんねーか?…後から行くからよ……」

「う……うん。わかつた。無理しないでね銀時」

「ゆっくり休んでな」

そう言つて一人は母親の所に向かつた。

一人残つた銀時は、座り込んで気分を落ち着かせた。

*

しばらくして銀時の気分は落ち着いてきた。

「ふー。やつと落ち着いたぜ」

ゆっくりと立ち上がつた。

「あ……フェイトに部屋の場所聞くの忘れてた……」

銀時は軽く舌打ちをした。仕方なく適当に中を歩くことにした。

しばらく歩いていると長い廊下に出た。

『主……思つたのだが白銀の鎧を纏えればよかつたのではないか?』

「あ……」

今さらの様に思い出した。

(さてと……何で集めているのか聞き出すか)

銀時はフェイトの母親に集めている理由を聞くつもりだった。

頭を搔きながら銀時は悩み続ける。

少し歩くとアルフを見つけた。

だが様子がおかしい。アルフは扉の脇で頭を抱えてうずくまつてゐる。

「何やつてんだアイツ?」

銀時は首を傾げた。同時にある事に気がついた。

フェイトがいない。

（一人で母親に報告してんのか？）

そう思いながら銀時はアルフに近寄った。

「おい。こんなトコで何やってんだ？」

アルフに声をかけた。

銀時の声に反応したのか、アルフの耳がピクンと動いた。ゆっくりと顔を上げて銀時を見た。

「銀時…」

アルフは立ち上がり、涙目になつて銀時に抱き付いた。

「銀時つ…！」

「おわつ！？おいアルフ！何だよ急に…？」

銀時は慌てながらアルフに尋ねた。

「銀時…お願いだよ…フェイトを…フェイトを…助けて…」

「…」

泣きながら懇願するアルフに銀時は手を細めた。
その時、扉の中から何か音が聞こえてきた。

「…こいつあ何の音だ？」

銀時は扉を睨んだ。

「フェイトが…フェイトが…」

「此処にいる」

銀時はアルフに残るようになつて、扉の前に立つた。

大きく息を吸い、

「うるああああ…！」

叫びながら扉を蹴った。扉は開き、銀時は部屋の中に入った。

「…！」

部屋に入つて銀時は目を見開いた。

バリアジャケットを引き裂かれ、体中に傷ができたフェイトが倒れていた。

「フェイト…！」

銀時は駆け寄つてフェイトを抱き起こした。

「フェイト！ おい！ しつかりしろ！」

「あ……銀時……？」

フェイトはうつすらと目を開けて銀時を見た。

「いきなり扉を開けて入ってきて……貴方、一体何者？」

前から声が聞こえた。

銀時は顔を上げて声の主を見た。

そこには、まるで虫けらを見るような眼で見てくる黒髪の女が立っていた。

この時が、坂田銀時と大魔導師プレシア・テスタロッサが初めて対峙した瞬間だつた。

「……人に名を名乗らせる前に、自分から名乗るのが礼儀だつて母ちやんに習わなかつたか？」

銀時の言葉にプレシアは不快そうに眉間にシワを寄せた。

「……私はプレシア。大魔導師プレシア・テスタロッサよ」

「俺は銀時……坂田銀時だ」

銀時はフェイトを抱いたまま立ち上がつた。

「アルフ！」

銀時は大声でアルフを呼んだ。扉の外からアルフが駆け寄ってきた。

「フェイト！」

「フェイトを連れて傷の手当てをしろ」

そう言つて銀時はアルフにフェイトを預けた。

「う……うん。銀時は？」

「俺はあの女と話がある」

「……銀時……気をつけなよ……」

アルフはフェイトを抱えて部屋を出た。

部屋には銀時とプレシアの二人つきりになつた。

「テメー、フェイトの母親だろ？ 何であんな仕打ちをした？」

「何故？ あの子は、この大魔導師プレシア・テスタロッサの娘なのよ。それなのに、回収してきたジュエルシードはたつたの四つ。この程度の成果しか上げられなかつたから躰をしだだけよ」

プレシアの言葉に銀時は怒りを燃やした。

「…フェイトがどんだけ頑張ったか…どんだけ辛い思いをしたか、わかつてんのか？」

怒氣を含んだ視線をプレシアに向ける。

「さあ？そんなのは私の知つた事じやないわ」

「テメエ！」

『さすがにそれは許せん！主！我を使え！』

銀龍は姿を現した。

プレシアは銀龍に驚いた。

「それは何？」

「銀龍だが？」

プレシアは名前を聞いて疑問に思つた。

（銀龍……何処かで聞いた気がする）

プレシアは考えたが思い出せなかつたので、また銀時を見た。

「田障りだわ。いい加減消えなさい」

プレシアから紫色の雷が銀時に向かつて放たれた。

「ちつ！」

銀時は横に跳んで雷をかわした。

（速い！）

銀時の素早さにプレシアは少し驚いた。

（魔力による肉体強化？違うわ。あの男からは全く魔力を感じない）

プレシアは杖を銀時に向けて再び雷を放つ。

魔法が使えるが、銀時は避けることしかしなかつた。

「今まで逃げ切れるかしら！？」

プレシアの容赦のない雷が銀時に迫る。

「くつ！」

銀時は後ろに飛び、雷は銀時の前に落ちた。

後ろを向くと壁があつた。

（ヤベツ！）のままじゃ壁にぶつかる…）

だが銀時は、壁にぶつからなかつた。当たる直前に壁は横にスライ

ドして道が開かれたのだ。

「！」

この時、初めてプレシアは焦りの色を浮かべた。

「おわっ！」

銀時は床に倒れた。

「何だここ？隠し通路か？」

立ち上がりながら銀時は隠し通路を見渡した。

少し狭い通路の先に何かを見つけた。

「なっ！？」

ソレを見て銀時は驚愕した。

通路の先にはガラス張りのケースのような物があり、その中に一人の少女が裸で入っていた。

「…フェイト…！？」

『これは一体！？』

銀時は驚いた。

中にいる少女はフェイトに瓜二つだった。

銀時がケースに近づこうとした時、

「アリシアに近寄らないで！！」

「！」

プレシアの怒声と共に雷が銀時を襲った。

「うおっ！」

銀時はなんとか雷を回避した。

プレシアも通路に入ってくる。

「おい…こいつあどういう事だ？」

銀時は目の前にいるプレシアを睨みつけた。

「何でフェイトがもう一人いるんだ？」

「フェイトがもう一人？ふん。笑わせないで」

銀時の言葉にプレシアは鼻で笑った。

「私の可愛い『アリシア』を、あんな人形と一緒にしないでほしいわ」

「人形だと…？」

『……』

プレシアの言葉に、銀時は目を細め、銀龍は黙り込んだ。

「フ…イト・テスター…ロッサは、私がアリシアの代わりに造った生命体よ。」フ…イトの名前はその当時のプロジェクトの名残よ

「な…！？」

銀時は目を見開いて驚愕した。額から汗が流れる。

「けど姿形は同じでも、あの子はアリシアではなかつた。アリシアの記憶をあげても無意味だつた」

銀時は黙つて聞いている。

「アリシアはもつと素直で明るくて、いい子だつた…いつも私に笑顔を見せてくれた」

プレシアは遠い目をしていた。

「だから私は、あんな出来損ないを捨ててアリシアを蘇らせる事を決意したのよ！」

プレシアの目がカツと見開かれた。

「ジユエルシードを使って、失われた秘法を用いる約束の地『アルハザード』へ向かつて、娘のアリシアを蘇らせるのよ！！」

プレシアは両手を高らかに挙げて言い放つた。

銀時はジッとプレシアを見つめた。プレシアの姿を見て銀時の脳裏に一人の男が浮かんだ。

林流山。

銀時のいた世界の有名な機械技師だ。

自らの実験中に娘を死なせてしまい、死んだ娘を蘇らせようと『芙蓉プロジェクト』を計画した。

娘・芙蓉の人格データを機械人形に引き継がせ、娘が死んでしまった苦しみや悲しみから逃れるために流山自身も実験体に使い、自分の人格データを機械人形に組み込んだ。

全ては死んだ娘のためではなく、自分のためにしてのこと。

『あやつを思い出したか？』

「まあな……」

銀時と銀龍は喋りあつた後、プレシアに向いて銀時は口を開いた。

「…プレシア」

プレシアは、上げていた視線を銀時に戻した。

「テメーは娘のために、娘を生き返らせようとしてんじゃねえ

「……何ですって？」

銀時の言葉にプレシアは目を鋭くする。

「フュイトを造つたのも、アルハザードに行つて娘生き返らせようとしてんのも全部、自分のためだ」

「…？」

プレシアの目が見開かれる。

「テメーは自分の寂しさを埋めるために、フュイトとアリシアの魂を弄んでんだ」

プレシアの顔が怒りで歪んでいく。杖を握る手に力が入る。

「……黙りなさい」

「テメーは、娘が死んだ事実から逃げてるだけだ」

「…黙れ」

銀時の言葉がプレシアの心に突き刺さる。

「今のテメーが、胸張つてアリシアに”母親”だと言えんのか…！」

「？」

「黙りなさいって言つてるのよ…！」

プレシアから、巨大な雷が銀時に向かつて放たれた。

「ぐああああああ…！」

『主…』

雷は銀時に直撃した。

（避けなかつた…？）

避けると思っていたプレシアは少し驚いた。雷がおさまる。

銀時は火傷を負い、着物は所々焦げて煙が出てる。
肩で息をしながら銀時はプレシアを見る。

「…気が済んだかよ？」

「く…！つるさい！その減ららず口を黙らせ…」

杖を掲げようとしてプレシアの動きが止まつた。

「つ…じほつ…」

突然プレシアは手で口を抑えて、その場に膝をついて咳込んだ。

「おいっ…どうした！？」

プレシアの異変に銀時が駆け寄る。

床にはプレシアの血が付着していた。

「あんた…まさか病に…」

プレシアは杖を立てて立ち上がつた。

「…ふふ。大魔導師でも…不治の病は治せないのよ…」

プレシアは皮肉な笑みを浮かべた。

「…私を殺すなら今がチャンスよ」

目の前の銀時を睨みつける。

「…んな事するかよ。あんたを殺すのが目的じゃねえ。それに…」

銀時は一旦、言葉を切つた。

「フェイトのヤツが悲しむ」

「…」

プレシアは顔を俯かせた。

「銀時…」

「ん？」

プレシアはゆっくりと顔を上げた。

「貴方なら…雷をかわしながら一気に私の懷に入り、その銀龍と言

う刀で斬れたはずよ…何故そうしなかったの…？」

「だから、俺ああんたを斬るのが目的じゃねーんだよ

メンドくさそうに頭を搔きながら銀時は答えた。

プレシアは顔を少し俯かせる。

「…銀時…」

「今度は何だ？」

「私は……間違っていたの……？」

俯いたままプレシアは銀時に聞いた。

だが銀時はその問いには答えない。

「もし……間違っているなら……私は……私はどうすればいいの？」

プレシアはその場に座り込んでしまう。

「……もあな」

『それは自分で見つけると良い』

銀時は歩き出した。

静かにプレシアの横を通り過ぎる。通路の扉の前で銀時は足を止めた。

「ただよお」

「！」

プレシアは振り返って銀時の後ろ姿を見た。

「フュイトの母親も、アリシアの母親も、世界中であんただけなんだよ」

「……」

銀時の言葉にプレシアは目を見開いた。

「じゃあな

銀時は通路から出ていった。

一人残されたプレシアはケースの中で眠つてゐるアリシアを見つめた。

「アリシア……私は自分のために……貴女を弄んでいたの……？」

近寄つてケースに触れる。

「私は……どうすれば……」

プレシアは力無く床に座つた。

その時、プレシアの口から一人の少女の名前が出た。

「フュイト……」

*

『主らしこと言えば主らしこな』

「つぬせえ」

銀時はそう言つた。

『主よ……プレシアは我を知つてゐるかの様な顔だつた』

「だつたら何か言つだろ」

『我的予想だが、何処かで聞いた事があるのかもしけぬな』

「知りたいのか?』

『いや、我は今で十分だ……それに悲しい過去なら思い出したくな

い』

「……」

銀時と銀龍はそんな会話をしていた。

その時だつた。

「銀時!』

銀時に気付いたアルフが駆け寄つた。

「あんた……どうしたんだい、その体は!-?』

プレシアの雷を受けてボロボロになつた銀時の姿を見てアルフが叫んだ。

「あ?お前これはアレだよ?ドーナツ作りに失敗したんだよ

「何言つてんだい!-?あの女にやられたんだろ!-?』

「大丈夫だよ。それよりフェイトはどうだ?』

銀時は、ベッドで寝てるフェイトを見た。

「…今は落ち着いて眠つてるよ』

銀時は椅子に座つて、眠つてるフェイトを見つめた。

「ん…』

フェイトが目を覚ました。

「フェイト!』

アルフが目に涙を浮かべる。

「…アルフ……銀時』

フェイトは一人を見て小さく咳いた。

「よお」

銀時が声をかけた。

フェイトはボロボロになつてゐる銀時の姿を見て驚いた。

「銀時……！その傷……どうしたの？」

「これか？」

銀時は、指で耳の穴をほじる。そして、アルフにも言つた言葉を口にした。

「ドーナツ作りに失敗した」

第十一訓・自分の子供を虐待してはいけません！（後書き）

ナナフシ「俺的には『月光閃火』さんが考えててくれたオリキャラを
A、S編に出したい」
銀時「そうかよ」
ナナフシ「いやア……早くA、S編が書きたい……そして銀さんハ
ーレムを狙う！」
銀時「狙うな！」
ナナフシ「ま、それでは次回…」

第十一訓・会いたくない奴とは会つもんだ（前書き）

ナナフシ「はいー支配者さんの所に銀龍が出る事になりました！」
銀時「喜んでんな」

銀龍『あんな風なお願いは初めてだつたそだ。更にはよく読むリ
リカル銀魂シリーズの一つだからな』
ナナフシ「嬉しいに決まってるでしょ！と言つ訳で『リリカル銀魂
～魔法少女と銀髪の侍と白銀の刀～』始まります！』

第十一訓・会いたくない奴とは会つもんだ

翌日。

銀時はフェイト達を止める方法が思い浮かばず、ジュエルシード集めに付き合つことになった。

屋上に銀時達が立つてゐる。

「もうすぐ発動するジュエルシードが近くにある」
夕焼けの空を見上げながらフェイトが言つてゐる。

後ろには銀時と狼形態のアルフがいる。
(マズイな…今はまだフェイトにアリシアの事はバレないが、ジュエルシードを集めれば、いづれはバレる)

銀時は表情を険しくして考へる。

(何か…何か方法は……ないか!?)

*

夕方。

学校からの帰り道。

ユーノが赤く丸い石をなのはに渡した。待機状態のレイジングハートだ。

「レイジングハート。直つたんだね? よかつた」

「Condition green」

レイジングハートは、なのはに答えた。

「また、一緒に頑張つてくれる?」

「All right, my master」

なのははレイジングハートを握つた。

「ありがとう」

なのはは銀時の木刀を見た。

銀時は無事なのが心配なのだ。

(銀さん)

六

銀時達はジユエルシードがある場所にやつてきた。海が見える公園。公園内には限界壁以外、誰も一人ない。

公園内には鉛時鐘以外 話もいなし

公園内にジュエルシードの光の柱が現れた
一本の木の中に、ジュエルシードが入つていった。木に変化が起

一本の腕が生えた巨大な木の化物になつた。

「元気いいなオイ。その元気を少し分けてほしいぜ」

「フエイー

アルフがフェイトに声をかけた。

「うん、あの子もいる」

卷之三

今度は銀時がフェイエイトを呼んだ。

一
何
?

「え、あの作物の木三日作がんばらんがんばらん

銀時の提案にフェイトは戸惑つた。

「でも…」

三十九

鉢にはハニエの頭に手を乗せた

卷二

銀時は前に出る。

木の化物と対峙する銀時。

「銀さん！」

なのはは銀時の名を呼んだ。

「よつ、なのは」

銀時は無事であると確認させる。

なのは安堵の息を吐く。

「あ、銀さん！木刀です！」

銀時に木刀を渡した。

「ありがとな……あいつは俺が何とかするからな

「え？でも」

「心配するな」

銀時はそう言つと左手には銀龍を握った。

右手には木刀である。

木の化物は、目の前にいる銀時を睨みつけている。

「ゴオオオオオオ！」

銀時を睨みながら木の化物は雄叫びを上げた。

「ギャー、ギャー、ギャー、ギャー、やかましいんだよ。発情期ですかコノ

ヤローー」

銀時は構えを取る。

「ゴオオオオオオ！」

木の化物が雄叫びを上げながら、木の根を振り上げた。そして銀時
目掛けて木の根を振り下ろす。

「うおおおおおおおおおお！」

銀時は叫びながら木の化物目掛けて走り出した。

「だらああああああ！」

銀時は、木刀を振るつて自身に迫る巨大な木の根を切り裂いた。

次々と襲いかかる木の根を木刀と銀龍で切り裂いて銀時は木の化け
物に迫る。

*

「つ
強
い
！」

戦いの様子を見てるアルフが驚きの声を上げた。

銀時：こんなに強かーたんだー！」

だつたが、本当に『つもり』だつたようだ。

「銀さん……凄い！」

はのむすびの間を上る。

今まで一緒に戦ってきたが、まだ驚きを隠せない。ユーノも同じである。

六

「ジユエルシード斬りじゃあああーー！」

銀時は叫びながら、木刀を振り下ろして木の根を斬った。

斬スて斬スて斬スりまぐるんじやああああああああああ！」

銀時は木の化け物の前まで迫る

銀時は木の化物に攻撃するが、

木の化物は、
障壁を展開して防いだ。

銀時は一曰、木の化物から離れた。

銀時は一曰、木の化物から離れた。

「あいつ、生意氣にバリアなんか張つたよ！」

「今までのより強いね」

フェイトはバルディッシュュを持つ手に力を入れる。銀時を助けたい気持ちを必死に抑える。

（大丈夫…銀時ならきっと……）

フェイトは銀時を信じて待つた。

「ゴオオオオオオ！」

木の化物が両手を上げながら雄叫びを上げた。

「近所迷惑だコノヤロー！」

銀時は目を鋭くした。

「ジュー」

「エー」

「ルー」

銀時は木刀と銀龍を構える。

「『シード』」

銀時は凄まじい気迫を放つ。

更には銀龍からも気迫を感じられた。

「ゴオオオ！？」

銀時と銀龍の気迫に、初めて木の化け物は動搖した。

銀時は地を蹴つて、木の化物の顔の前まで跳んだ。

「割りじゃああああ！！」

木刀と銀龍を振り下ろす。

木の化物は障壁を展開した。銀時の攻撃は障壁に当たり、ガラスが砕けるような音を立てながら障壁は割れた。

「うおおおおお！」

銀時は一人木の化物の眼前にまで迫つた。

「ジュエルシード狩りじゃあああああああ！」

上段から木刀と銀龍を振り下ろし、木の化物を縦に斬つた。

銀時は地面に着地した。銀時が斬つた木からジュエルシードが出てきた。

「やつた！やつたよフェイト！」

「うん！」

銀時の勝利にアルフとフェイトは喜んだ。

なのはも喜んでいた。

「さつさと封印だ！」

銀時が言うとフェイトとなのははハツとした。

銀時に言われて、フェイトはバルディッシュを構えた。なのはもレイジングハートを構える。

「ジュエルシード、シリアルフ！」

「封印！」

ジュエルシードに光が降り注いだ。

光が收まり、空中にジュエルシードが佇む。フェイトとなのははジュエルシード挟むように対峙する。

「…ジュエルシードには衝撃を与えたらいけないみたいだ」

「うん。この間みたいになつたら、レイジングハートも、フェイトちゃんのバルディッシュも可哀相だしね」
なのはの言葉にフェイトは少し戸惑つた。

「…だけど、譲れないから」

フェイトはバルディッシュを鎌の形状に変えた。

「私は…フェイトちゃんと話がしたいだけなんだけど…」

なのはもレイジングハートを構える。

銀時達は地上で二人の様子を見る。

「アレ？何やつてんの？何やろうとしてんの？嫌な予感がするんですけど」

二人を見上げて銀時は言つ。

『あの二人戦うつもりだぞ……しかもジュエルシードの近くで』

銀龍が言つた。

ジュエルシードの近くで一人が戦つたら、またジュエルシードが暴走するかもしない。

「おいイイイー！フェイト、なのは待てエエエー！お前等そんなト

「でやり合つたら、またジュエルシード暴走するぞ……」

銀時が必死に叫ぶが、二人の耳には届いていない。

フェイントと、なのはは同時に動いてデバイスを振り下ろす。

「あああああ……」

銀時は頭を抱えて叫んだ。

だが二人のデバイスが当たる直前、

「ストップだ！」

二人の間に青い魔法陣が展開され、そこから現れた黒いバリアジャケットを羽織つた少年がデバイスを受け止めた。

「……!?」

突然の乱入者に一人は驚いた。

「ここでの戦闘は危険すぎる！」

地上にいる銀時達も呆然と見上げている。

「時空管理局執務官クロノ・ハラオウンだ。詳しい事情を聞かせてもらおうか」

時空管理局の者と名乗る少年が現れた。

「まずは一人とも武器を引くんだ」

クロノに言われてフェイントと、なのはは一旦デバイスを引いた。ジユエルシードを空中に残して、三人は地上に降りた。

（おいおい、ここで管理局のお出ましかよ……）

銀時は、クロノと名乗る管理局の魔導師を見つめながら顔を険しくした。

『どうする主』

「どうするって言われてもなア」

銀時は険しい表情のまま悩んだ。

フェイントと、なのはの間に立つてゐるクロノは交互に一人を見た。

「このまま戦闘行為を続けるなら……」

クロノが言いかけた時、突如空からオレンジ色の魔力弾が降つてきた。

「はつ！」

クロノは青い魔法陣を展開して魔力弾を防いだ。

全員、空を見上げた。

アルフが空中に佇んでいた。

「フェイト！ 撤退するよ！ 離れて！！」

アルフが再び魔力弾を放つ。

フェイトは戸惑いながらも空中にあるジュエルシード目掛けて飛んだ。

なのはとクロノは後ろに跳んで魔力弾を避けた。銀時達も離れる。魔力弾は地面に当たり、土煙が立ち込めた。

フェイトはジュエルシードに手を伸ばす。

その時、クロノは青い魔力弾をフェイトに向かつて放つた。

「ちつ！」

銀時は、素早く木刀を魔力弾に向かつて投げた。投げたと同時に銀時は走り出した。

フェイトの手前で、魔力弾は銀時の投げた木刀によつて弾かれた。

「ああっ！」

フェイトは、魔力弾と木刀がぶつかつた衝撃を受けて地面へ落ちていいく。

「フェイト！」

急いでアルフはフェイトの元へ向かう。地面にぶつかる前に、アルフはフェイトを背中で受け止めた。

クロノは意識をフェイト達から銀時に向けた。

「何の真似だ！？」

銀時に向かつて叫びながら黒いデバイスを構える。

だが銀時はクロノには何も答えない。

「抵抗するなら相応の対応をするぞ！」

言いながらクロノは数発の魔力弾を銀時に向かつて放つ。

銀時は魔力弾を避けながら一気にクロノに近づく。

「銀時！」

アルフが叫んだ。

銀時とクロノの距離はどんどん縮まる。

（こいつ！魔法を使つてないのに、なんて速さだ！）

面には出さないが、クロノは銀時の身体能力に内心驚いていた。

クロノは再び魔力弾を撃つた。銀時は上に跳んで魔力弾をかわした。

（上？今まで左右に避けていたのに何故？）

クロノは上に跳んだ銀時の姿を見た。

銀時の右手には、先ほど投げたはずの木刀が握られていた。

「なつ！？」

「ふつ！」

銀時は、上段から木刀を振り下ろしてクロノのデバイスを地面に叩き落とした。地面に着地して、木刀をクロノの顔に向けた。

「チェックメイトだ。管理局さんよ」

言つて、銀時はニヤリと笑つた。

銀時が上に跳んだのは、落ちてくる木刀を掴むため。その場にいる全員が驚いた。

特に管理局や魔導師の事をよく知つてゐるフェイイトやアルフ、ユーノは驚愕を隠せなかつた。

「か…勝つちやつた…」

銀時の後ろにいるアルフは、開いた口が塞がらなかつた。

（あの管理局の人間は、間違いなく一流の魔導師だ。その魔導師に銀時は勝つた！？しかもアッサリと！？）

木の化物に勝つた事にも驚いたが、今はその時以上に驚いている。

「凄い…」

フェイイトも驚いて、目を大きく見開いていた。

木刀を突き付けられてるクロノは動けなかつた。

「き…君達はどれだけ危険な事をしてゐるのか分かつてゐるのか！？」

「さあな。どんだけ危険か教えてくれませんかね？黒井教務官さん

「僕はクロノだ！それに教務官じゃなくて執務官だ！」

銀時に向かつてクロノが怒鳴る。

「そつ怒るなよ。短氣は損氣だぜ？カルシウム摂れば全てつましくいぐ」

『主はうまくいっていないだろ』

銀龍がツツコンだ。

「か、刀が喋つているだと！？」

クロノは銀龍に驚いた。

「もうその反応は飽きた」

『うむ、嫌と言う程皆が言つからな』

銀時と銀龍はそう言つた。

「下がつてろクロノ」

男の声がした。

「テメーじゃソイツの相手は荷が重すぎる」

クロノの後ろの林の中から三人の男が現れた。

「なつ！？」

男達を見て銀時は驚愕した。

男達は黒い制服を着て、腰に刀を挿してある。

「おいおい、何でテメエ等が居るんだ？」

そう、その男達は、近藤勲、土方十四郎、沖田総悟であつた。

「モニターの映像を見てまさかとは思つたが、本当にテメエだったとはな」

煙草をくわえた男が言つた。

土方十四郎。幕府の武装警察『真選組』の副長。鬼の副長と恐れられている。常に瞳孔開き気味。

「いや～奇遇ですねエ旦那ア」

栗色のサラサラヘアの男が言つ。

沖田総悟。真選組の一番隊隊長。組隨一の剣の使い手で腹黒いドS。

「おおつ！本当に万事屋だ！」

ゴリラ顔の男が大声で言つた。

近藤勲。真選組の局長。新八の姉・お妙に付き纏うストーカーでもある。

『どうしてお前等がここに？』

銀龍が訪ねた。

すると土方は表情を曇らせた。

「……こりこりあつたんだよ。それよりテメ何でこんな所にいる？」

「おいおい、銀龍の質問に答えろよ」

木刀を降ろして土方に言つ。

「ま…まさか…！？」

突然、近藤が声を上げた。

「まさかお前も俺達と同じように、『魔法少女リリカルなのは』のDVDを持っている事に気付かないで瞬間移動装置を使つてこの世界に来たのか！？」

「『違うんだけどオオオオオオオオオオオオオオオオ…！？』」

銀時と銀龍は瞬間移動装置は一緒だが、こっちの場合は暴走である。

「てか、『魔法少女リリカルなのは』て何！？」

銀時は疑問に思つた。

「これでさア、旦那ア」

沖田が銀時に見せる。

「おいおい……マジかよ」

銀時は驚いた。

パッケージに載つているのはとフェイドに驚いた。

銀龍もだ。

「ここニアーメの世界かよ……」

銀時は驚愕した。

『で、それを持っていたのはまさかだと思つたが

銀時が土方を見る。

「ちつ、俺だよ」

土方は舌打ちをしながら言つた。

『やはりな』

銀龍は理解していた様だ。

真選組のメンバーで、アニメのDVDを持つてゐる可能性があるのは土方だけだと考えていたからだ。いや…正確に言えばDVDを持つていたのは『土方』ではない。

『トッシー』。土方が妖刀『村麻紗』を手にした事によつて生まれた、もう一人の土方十四郎。主にアニメ等の一次元の作品が好きなヘタれたオタク。別人格ではなく、れつきとした土方十四郎の人格の一部なのだ。

「あの野郎…いつの間にかアニメのDVDなんぞ寝にしまいやがつて…！」

土方は拳を握つて怒りを燃やした。

「ブハハハハ！何？お前またトッシーに体乗つとられたの？」

土方を見ながら銀時は笑つた。

「テメー何笑つてやがんだ！斬るぞコラ！…！」

土方が銀時に掴みかかる。

「やれるもんならやつてみやがれ！マヨラー侍さんよオ！」
「上等だコラ！」

いつもの銀時と土方の争いが始まる。

「君達！少しば落ち着いて…」

クロノが一人を止めようとするが、

「「うるせー！ガキはすつこんでる……」

二人に怒鳴られてしまう。

銀時の後ろで様子を見るアルフは、どう動くべきか迷つていた。

その時、銀時はチラッとアルフに目配せした。

「！」

アルフは銀時の意図に気付いた。銀時は”逃げる”とアルフに目配せしたのだ。

（銀時……ありがと…「」めんよ…）

アルフは心の中で銀時にお礼と謝罪をした。フェイントを背中に乗せたまま、気付かれないように静かに動いて、アルフは去つていった。銀時と土方はまだ言い争つてた。

「テメーには、いろいろと借りがあるからな。延滞料金も含めてキツチリ返してやるぜ！」

「土方さん」

沖田が声をかけた。

「何だ？」

「金髪の魔導師、いなくなつちました」

沖田の言葉で、全員の視線が銀時の後ろに集まつた。フェイトとアルフの姿はなかつた。

「しまつた！」

クロノは顔を険しくした。

「…万事屋。テメーわざと俺と口喧嘩して…」

土方は、目の前にいる銀時を鋭い目で見つめた。

「あ？ 何の事かわからんねーな

「ちつ

*

土方は舌打ちした。

時空管理局の次元空間航行艦船『アースラ』。

緑色の長髪の女性がモニターを眺めていた。

「戦闘行動は迅速に停止。ロストロギアの確保も終了。よしとしましょう。事情もいろいろ聞けそうだしね

リンディ・ハラオウン。時空管理局提督”アースラ”艦長である。

*

公園。

銀時達の前にリンディの映像が現れた。

「クロノ。お疲れ様」

「すみません。片方は逃がしてしまいました」

「ううん。まあ大丈夫よ」

リンディは視線を銀時達に向けた。

「その方達と話がしたいから、アースラに案内してくれるかしら?」

「了解しました。すぐに戻ります」

クロノが返事をすると映像は消えた。

『おまけ』

銀八「教えて」

生徒「銀八先生!」

銀八「質問」「一ナーハー行くぞ。今日は」

フェイト「フェイト・テスター・ロッサです」

銀八「それじゃ、まずはペンネーム『黒龍』さんからの質問だ

『黒龍』では、質問に移ります

1・アルフに質問。銀さんに惚れましたか? 今の所あなたが一番銀さんと付き合っても問題ないですよ。

2・なのはとフェイトに質問。あなた達二人は美女ではなく、美女なので、ぶっかけ銀さんと恋に落ちる事は倫理的に社会的に無理ですよ? 謹めたら? (笑)

3・ナナフシさんに質問。リリカルなのはで一番人気アルヒロインはぶっかけフェイトですよね? なのはは次だと思うんですけど、

どう思いますか?』 一つ田だが

アルフ「あたしはその……あの……／＼／＼

銀八「ありや惚れてるな。 一つ田だけど…… 一人とも恐い」

なのは・フェイト「大人になつたら出来るよオオオオオオオオオ
! 何で毎回諦めたらなのオオオオ! 」

なのはとフェイトは黒龍さんの所に飛んでいった。

銀八「黒龍確か隠れてるんだよな。 …… って言つたアシスタンントは
! ? まあ良いや。 ナナフシ最後」

ナナフシ「そうですね…… リリカルなのはでは一番人気ですよね
フェイト。 なのはは確かに次かもしれませんね…… でも、 僕はどう
ちかつて言つたなのはの方が好きですけどね。 だからメインヒロイ
ンの可能性が大なんですね。 (フェイトもだけど) 」

銀八「だそうだ。 と言う訳で『黒龍』さん、 そつちになのはとフェ
イトが向かつたから気を付けてください。 最後だ。 ペンネーム『支
配者』さんからの質問だ。

『銀時に質問

甘い物以外に好きなものありますか?

ミラクル に質問

本名に戻りたいですか? 面白いからそのままで言ひと 思いますけど

神楽に質問

つてか神楽つて誰? つて完全に喧嘩売つてるよ三つ目!」

銀時「そうだなア……ジャンプだろ? それ以外だつたらねえ」

銀八「だらうな。二つ目だが」

ミラクル「戻りたいわアアアアアアアア! ナナフシがなかなか飽きないんじゃアアアアアアアア!」

銀八「最後だが」

神楽「支配者! それどういう事アルカ! ミラクルは覚えてて何で私は覚えてないアルカ! 喧嘩売つてているアルカ! なら相手をしてやるヨ!」

神楽は支配者さんの所まで走つていった。

銀八「と言う訳で『支配者』さん。そつちに神楽が向かつたのでどうにかしてください……返り討ちに合つのが目に見えてるけど。質問はここまでだ。それではまた」

第十一訓・会いたくない奴とは会つもんだ（後書き）

ナナフシ「次回は『アースラ』ですねア……僕は管理局の様な偽善
大嫌いなんで」
銀時「そうか」
ナナフシ「と言つ訳でまた次回！」

第十二訓・お茶に砂糖を入れてはいけません（前書き）

ナナフシ「もうすぐでアンケートが終わります」

銀時「そうだな」

ナナフシ「ああ、どうなるかな」

銀時「さあな」

ナナフシ「楽しみだな」

なのは「と言う訳で『リリカル銀魂』魔法少女と銀髪の侍と白銀の刀』『始まります』

第十二訓・お茶に砂糖を入れてはいけません

銀時達はアースラにやつてきた。

「ファンタジーの次はＳＦか…何でもありだな」

銀時が呟いた。

魔法やら使い魔やらジユホールシードなど、いろんなモノを見てきた銀時達は、もう驚きはしなかつた。

先頭に立つてゐるクロノが、なのは達に振り返つた。

「ああ。もうバリアジャケットとデバイスを解除しても平氣だよ」

「あつ、そうですね」

なのははバリアジャケットを解除して、レイジングハートを待機状態にした。

クロノは視線をユーノに向けた。

「君も、元の姿に戻つてもいいんじゃないかな?」

「ああ、そういうえばそうですね。すっかり忘れてました」

「え?」

なのはは首を傾げた。

ユーノの体が光輝く。光の中でユーノの体は、フェレットから人間の姿に変わつた。見た目は、なのはとそつ歳が変わらないくらいの少年の姿だ。

「えつ…?」

ユーノの姿を見て、なのはは驚いた。

銀時は、

「おお」

と呟いただけで、そんなに驚いた様子はない。

「ふう。なのはにこの姿を見せるのは久しぶりになるのかな?」

ユーノは顔を、なのはに向けた。

なのはは、驚きながらユーノを指差している。

「ふえええ…!…?」

アースラに、なのはの声が響いた。

「な……なのは？」

ユーノは首を傾げた。

「ユーノ君つて……ユーノ君つて……！」

なのははユーノの正体に動搖を隠せないでいた。

「そんなに驚く事か？ フェイトんとこのい……狼も人の姿に変身してたじやねえか」

銀時は冷静に言う。

『そうだな』

銀龍もそう言った。

「お前らの間で、何か見解の相違でもあるのか？」

今まで黙つてた土方が言った。

「えつと……なのは、僕達が初めて会つた時、僕はこの姿じや？」

「ち……違う違う！ 最初からフェレットだつたよ～！」

なのはは、首を横に振りながら答えた。

言われてユーノは記憶を辿つた。額に指を当てて最初に会つた時の事を思い出そうとする。

「ああつ！」

そして思い出した。

「そ……そういうえば、この姿まだ見せてなかつた

「だ……だよね？ ビックリした～！」

なのはは大きく息を吐いた。

『ん？ そういうえば…』

銀龍も何かを思い出した。

『ユーノ、海鳴温泉に行つた時、フェレット姿で、なのは達と入らなかつたか？』

『あつ！』

ユーノは銀龍に言われて声を上げた。

「……！」

思い出した、なのはは顔を赤くして俯かせた。

「いや…違つんだ、なのは！あれは……」

ユーノが、なのはに説明しようとした時、

「おい」

銀時が声をかけた。

「じゃあお前何？フェレット姿のをいい事に、お前女湯に入つたの？」

銀時は、軽蔑の眼差しでユーノを見つめた。

「いえ…その……」

真選組の三人を見た。みんな冷たい視線をユーノに向いている。いや、沖田だけはイジメ甲斐のありそうな獲物を見つけて、ドンな笑みを浮かべていた。

『ユーノよ……』

銀龍も呆れていた。

「いや違うんです！僕はそんなつもりじゃ……」

もはや、この場にユーノの味方はいなかつた。

ユーノが絶望した時。

「ユーノ」

「銀時さん！」

銀時がユーノの前に立つた。

「誰にでも間違いや失敗はあるわ。次は『うならなつよつ』と氣をつけな」

優しく銀時が言つた。

「銀時さん……」

ああ、僕にも味方がいた。ユーノがそう思つた時。

「でもな、ユーノ」

銀時は微笑んだ。

「やっぱお前最低だろうがアアアアア……」

突然、銀時が怒声を上げた。

「ええつ……？」

ユーノは銀時の豹変ぶりに、驚いた。

やつたらんかいイイイ！という銀時の声を合図に、土方、沖田、近藤がコーンに襲い掛かつた。

ガキだからって優しく許されると思うなよ！銀魂は甘くねーんだよ！ＳＭショーの始まりでイーと、鉄拳、蹴りがコーンに降り注いだ。

「あやあああああーー！」

コーンの悲鳴が、アースラの中に響き渡つた。

なのはとクロノは、静かにその光景を見守る事しかできなかつた。

*

「艦長。 来てもらいました」

銀時達は艦長がいる部屋に到着した。

中に入つて、銀時達は少し驚いた。部屋の中には、盆栽やお茶の道具、置や獅子脅しが置かれていた。

何この妙な和風空間？と銀時達は思つた。

畳の上には、艦長のリンティが正座していた。

「よつこモ。 まあ皆さんとりあえず座つて楽にしてくださいね」

笑顔でリンティが言つた。ふとリンティはコーンの姿を見た。

コーンは服はボロボロで、顔や腕、足には青アザが出来ていた。

「えつと…君は何かあつたのかな…？」

戸惑いながらリンティは尋ねた。

「……いえ……何もありません……」

力無くコーンは答えた。

コーンの答にリンティは苦笑いをした。とりあえず銀時達は畳の上に座つた。

「どうぞ」

銀時達の前に、お茶と羊羹ようかんが差し出された。

「ありがとうございます」

なのはが礼を言つた。

「私は時空管理局提督『アースラ』の艦長、リンディ・ハラオウンです」

それから互いに自己紹介をしてコーノ達は、これまでの事をリンディ達に話した。

「まあ そうだつたの。あのロストロギア、ジュエルシードを発掘したのは貴方だつたんですね」

話を聞き終えたリンディが言つた。

「…それで僕が回収しようとした…」

「立派だわ」

「だけど同時に無謀でもある!」

クロノの言葉に、コーノは顔を俯いてしまう。

「あの、『ロストロギア』って何なんですか?」

なのはがリンディ達に尋ねた。

*

銀時達はリンディ達から『ロストロギア』について話を聞いた。

次元空間の中には幾つもの世界が存在する。その中には、他の世界よりも進化しすぎた世界がある。その世界を滅ぼした危険な技術の遺産。それらを総称して『ロストロギア』と呼ぶ。使い方によつては世界どころか次元空間を滅ぼす程の力になる。

話を聞いた、なのは達は自分達がとんでもなく危険な物に関わつていた事を理解した。

ふと、なのははリンディを見た。

リンディはお茶の中に角砂糖を入れていた。

「あつ！」

お茶に角砂糖を入れるという行為に、なのはは驚いた。しかもリン

ディは何の躊躇いもなく、角砂糖を入れたお茶を飲んだ。

(まるで主だな)

銀龍は、そう思いながら銀時を見た。

銀時は、リンディの行為を見ながら不敵な笑みを浮かべていた。
(おもしれえ)

対抗心を燃やした銀時は、角砂糖が入ってる器に手を伸ばした。な
のは達とリンディ達が、銀時の動きに気がついた。銀時はみんなの
視線を浴びながら、リンディが入れた倍くらいの数の角砂糖をお茶
に入れた。

「なっ！？」

銀時の行為にリンディは驚いた。リンディだけでなく、なのは達も
驚いてる。

銀時は、リンディの前で沢山の角砂糖の入ったお茶を飲んだ。
(まさか、この男も私と同じ！？しかも私よりも多く角砂糖を入れ
た！？)

リンディは目を見開いて驚いた。隣に座ってるクロノも目を丸くし
ている。

銀時はリンディに不敵な笑みを見せた。

「！」

銀時の笑みを見たリンディは、更に角砂糖をお茶の中に入れた。

「か…艦長！？」

クロノが驚きの声を上げた。

(さあ、これで私の勝ちよ！)

そう思つて、リンディは銀時を見た。

「！？」

そして驚愕した。

銀時のお茶の中には、更に足した角砂糖と、お茶と一緒に出された

『羊羹』が入つていた。

(よ…羊羹をお茶の中に…？わ…私でもそんな発想はできなかつ
たわ…！)

動搖しながら、リンディは銀時の顔を見た。

銀時は、またも不敵な笑みを浮かべてリンディを見ていた。
(ふん！糖尿病寸前まで糖分摂取をしてきた俺に敵うと思ったのか
？)

銀時は邪悪な笑みを浮かべた。

「俺とあんたどじや、糖の器が違つ

「！？」

銀時の言葉を聞いて、リンディは畳に両手をついた。

「わ…私の負けだわ」

悔しそうにリンディは顔を俯いた。

『いや、何がやりたいんだ二人とも？』

銀龍がツツコンだ。

『くだらない争いをしてどうする主よ』

「バカヤロー銀龍。ここで引いたら、糖分王の名折れだらうが」
言つて銀時は、角砂糖と羊羹が入つたお茶を飲んだ。

『そんな称号いらぬだろ』

と、銀龍が銀時にツツコンだ時、

「刀の言つ通りだ」

土方が口を開いた。

「お茶に角砂糖を入れるなんぞ、テメーらの味覚はどうかしてるぜ」
そう言う土方は、お茶の中にマヨネーズを入れていた。

『お前もだらうが！』

即座に銀龍がツツコンだ。

『何故お茶にマヨネーズを入れる！？』

「食い物だけでなく飲物にもマヨネーズを混ぜるのが、一流のマヨ
ラーつてもんよ」

土方はフツと短く笑つた。

『全然格好良くないぞ！？』

三人の味覚馬鹿のせいで、場の緊張感は完全に消えていた。

なのは達は、銀時達の並外れた味覚に、ただただ目を丸くして驚く

しかなかつた。

リンディが敗北から立ち直つて顔を上げた。コホン、と小さく咳をする。

「これよりロストロギア『ジュエルシード』の回収については、時空管理局が全権を持ちます」

「えつ！？」

リンディの言葉に、なのはとユーノは戸惑つた。

「君達は今回の事は忘れて、それぞれの世界に戻つて元通りに暮らすといい」

「でも……そんな……」

「次元干渉に関わる事件だ。これ以上民間人を巻き込むわけにはいかない」

なおも戸惑う、なのはにクロノが言った。

「まあ急に言われても気持ちの整理がつかないでしよう。今夜一晩ゆっくり考えて、それから改めて話をしましょう」

リンディが、なのは達に言った。

土方は、リンディの言葉に目を細めた。

「ちょっと待て」

クロノが、なのは達を送ろうと立ち上がつたところ、土方が口を開いた。

「何がしら？」

リンディが土方に顔を向けた。

「何で考える時間なんて与える？民間人を巻き込むつもりが無いなら、そんなもんは必要無いだろ」

煙草に火をつけながら土方が言つ。

本当に事件から手を引かせようと考へているなら、話し合つ時間など必要無い。なのに何でリンディはあんな事を言つたのか。

「まつ、あなたの考へてる事は大体読めてるがな」

フーッと、土方は煙草の煙を吐いた。

「大方、コイツらの方から協力を申し出るよう誘導して、足りな

い人員を補強しようつて魂胆だろ?」

土方の鋭い眼がリンディを射抜く。

いや、土方だけではなく近藤、沖田、銀時も眼を鋭くしている。二人もリンディの考えに気付いていたようだ。

「……」

リンディは無言で表情を険しくした。

「本当ですか艦長!？」

クロノがリンディに尋ねた。どうやらクロノの方は、本心から手を引かせようと考えていたようだ。

「そんな姑息なマネしねーで、堂々とソイツらに頼んだらどうだ? そしたら俺も余計な口は挟まねえ。決めるのはソイツらだからな」

そう言って、土方は腕を組んで目を閉じた。

「リンディ艦長。立場上、あなたの方から民間人に協力を頼めないのはわかる。だが、だからと言つてこのような手段で彼女達を巻き込む事を、俺達は認めることはできん!」

近藤がリンディに言つた。

しばらく場が沈黙に包まれた。

「あ…あの…！」

なのはが沈黙を破つた。

「私にお手伝いさせてください!」

全員が、なのはへ振り向いた。

「その…リンディさんに言われなくとも…きっと私、自分から頼んでいたと思います」

「し…しかし…」

なのはの言葉にクロノが戸惑つ。

「お願いします!」

立ち上がって、なのはは頭を下げる。

「ほ、僕もお願いします!」

ユーノも立ち上がって頭を下げる。

「だとよ艦長殿」

銀時が笑みを浮かべて言った。

「俺もあんたのやり方は気に入らねえ。だがコイツらは、あんたに

言わされたからじゃなく、本当に自分の意志で手伝うと言つてゐる」

銀時は真っ直ぐにリンディを見つめてる。リンディも銀時の視線を受け止めてる。

「……わかりました。あなた方の乗艦を許可します」

「艦長！？本気ですか！？」

「一人の善意を利用しようとした私には、この頼みを断る事は出来ません」

リンディは静かに語つた。

「高町なのはさん。ユーノ・スクライアさん。先ほどは、あなた達を利用しようとして申し訳ありませんでした」

リンディは一人に頭を下げた。

「い…いえ…そんな…」

頭を下げられて、なのははあたふたする。リンディは頭を上げた。「ご協力に感謝します。それと改めて、一人ともようろしくお願ひします」

「は…はい！よろしくお願ひします！」

「お願いします！」

こうして、なのは達は管理局に協力する事になつた。

「では、なのはさんは一度ご家族とお話をして、また明日、公園にきてください」

「はい！」

「クロノ。一人を元の世界へお送りして」

「…はい」

クロノはまだ納得していないようだったが、渋々了解した。なのはとユーノ、クロノが部屋から出でていった。

リンディは銀時に顔を向けた。

「あなたはどうしますか？」

「あ？俺か？」

銀時はお茶を飲み干した。

「俺達も協力させてもらひづ。あいつらだけじゃ心配だからな」

『なのはとコーカスが心配だしな……それにフェイトもだ』

銀時と銀龍はそう言った。

「わかりました。あなた方もこれからよろしくお願ひします。それと……先ほどは失礼しました」

リンディは、なのは達を利用しようとした事を銀時達にも謝った。

「まあ……アイツらなら、どっちにしろ協力を申し出たかもな」

銀時が言った。

『「そうだろうな』

銀龍も答えた。

「後、一つ聞いて良いですか？」

「何だ？」

リンディが銀時に訪ねる。

「その銀龍は本当に『デバイスではないと』報告は受けましたが『喋る刀』なんて」

「ああ、こいつは『デバイスじゃねえぜ』

『うむ、皆がそう言つからな』

銀龍はそう言った。

「わかりました」

リンディが承知した後、沖田が立ち上がった。

「あ～俺、腹減つちましたよ。そろそろ飯にしませんかイ？」

「そうだな」

沖田の言葉で、全員が立ち上がった。

「それじゃあ食堂へ案内します」

リンディが先頭に立つて銀時達を案内した。

（…フェイトとアルフのやつ…大丈夫だらうな？）

二人の事を思いながら、銀時はリンディの後を歩いた。

(銀時は次元漂流者だから保護してくれるよね)

フェイントは銀時が心配であった。

「…ねえフェイント…もう止めようよ…」

アルフはフェイントに詰め寄った。

「本気で捜査されたら…此処だつていづればバレちゃうよ…」

「…でも私、母さんの願いを叶えてあげたいの」

「あたしは…！」

アルフが声を荒げる。

「フェイントには幸せになつてほしいんだよ！フェイントが泣いたり悲しんだりすると、あたしの胸も苦しくなるんだよ…」

アルフは床に伏せて、必死にフェイントを説得した。

「アルフと私は精神がリンクしてるから、私の感情が流れちゃつているんだね…ごめんね。私、もう泣かないよ」

フェイントの決意は固かつた。アルフの説得もフェイントには届かなかつた。

「なら…約束して…あの女の為じゃなくて、フェイントは自分の為に頑張るつて…そしたらあたしは、全力でフェイントを護るよ…」

「うん。ありがとうアルフ…」

フェイントは、優しくアルフの頭を撫でた。

(銀時…)

フェイントの表情が少し暗くなつた。

(ごめんね銀時…無理しないつて約束…破るかもしれない)

フェイントの目から一筋の涙が流れた。

(あれ…？もう泣かないつて…決めたばかりなのに…)

アルフは顔を俯いていて、フェイントが泣いている事に気付いていない。

(銀時…)

銀時の事を考えると、胸が苦しくなる。

(…みたいよ……銀時……)

フェイトは、アルフに気付かれないようこ、そつと涙を拭いた。

『おまけ』

銀ハ「教えて」

生徒「銀ハ先生…！」

銀ハ「ハァイ、質問コーナー始めるぞ。今回のアシスタントは」

ユーノ「ユーノ・スクライアです」

銀ハ「それじゃあ行こうか」

ユーノ「ペンネーム『黒龍』さんからの質問

『黒龍』「そうですかそうですか。もう良いです。こいつなれば質問で報復してやります…！」 質問です」

1・なのははとフェイトに質問。なんと銀さんのタイプはグラマーな人らしいです。残念でした。

2・フェイトに質問。銀さんが、“あ、俺ガキは無理だからお前とは付き合いねえわ”とか言つてました（黒笑）

3・なのははとフェイトに質問。なんとリリカルなのはの人気投票ではフェイトが圧倒的票数で一位だそうです。一人はどう思いますか？『完全に報復してますね』

銀八「だな。一つ目だが」

なのは「なら、なれる様に頑張る！」

フェイト「私も！」

銀八「Strikeers編では大人だもんな。一つ目だが」

フェイト「そうなんだ……」

フェイトは暗い顔をする。

銀八「大人になつた時を考えろよ」

フェイト「そうだね！」

フェイトは立ち直つた。

銀八「三つ目だけど」

なのは「凄い人気だねフェイトちゃん」

フェイト「私人気あるんだ」

銀八「だそうだ……つて何一人ともデバイスとバリアジャケット出してんの？」

なのは「また苛めの質問だしたからア」

「フエイト」〇 H A N A S I をして行くんだよ

銀ハ「いや、何で銀時も連れて行こうとするんだ?」

フエイト「ダイヤモンドで出来た盾があるんでしょ? なら銀時にも協力してもらおうと」

銀時「助けてくれえええええええ!」

なのは「銀さん! 手伝ってくれたらパフュをナナフシが奪つてあげるって言つてました」

銀時「よし行こう!」

銀時はなのはとフエイトと一緒に行つた。

銀ハ「あれ? ナナフシが奢る事になつてんぞ? 後、銀時の技を使わせる気が? 一番攻撃力が高いやつで? と言つて『黒龍』さん。そつちになのはとフエイトが銀時を連れて行きました。気を付けてください」

ユーノ「銀さん甘い物に目がないね。最後ペンネーム『黒神』さんからの質問

『では質問です。』

今回は『銀魂王デュエルモンスターZ SD』に関する質問。

銀時へ

『遊戯王の主人公が使うエースモンスターの攻撃力は大抵2500
・『遊戯王の主人公が最初に戦うデュエリストのエースモンスター
の攻撃力は大抵3000』では土方さんと決闘しましたが、見事に
大勝利しました。

そして土方に向かつて負け犬と呼びましたがそのご感想を

マヨラーへ

貴方は銀時に決闘^{デュエル}で敗れてしまい、あげくに負け犬と言われちゃいました。

そのご感想を（黒笑）

なのは・フェイトへ

新八の前のデッキは女の子をぱっかり入れていたハーレムデッキですが、そんな新八のデッキのご感想を（黒笑）『銀さん』

銀時「いい氣味だぜ そのままもつと負けちまえ」

銀八「だそうだ。で、負け犬」

土方「誰が負け犬だ！負け犬だとオオオオオオ！納得いかねえ！
万事屋ア！斬つてやらあ！」

銀時「無駄無駄」

銀時は土方から逃げていた。

銀八「最後だが」

なのは「……最低ですね」

フェイド「私もそう思つ」

ミラクル「ガーン」

銀八「と言ひ訳で『黒神』さん廊下に立つてなさい」

ユーノ「質問は以上です」

銀八「また次回」

第十三訓・お茶に砂糖を入れてはいけません（後書き）

ナナフシ「追試ダルかつた」

銀時「ご苦労さん」

ナナフシ「と言つ訳でまた次回！」

第十四訓：鎌で遊んではいけません！（前書き）

ナナフシ「連続投稿！」

銀時「おい！」

ナナフシ「暇で暇で」

銀時「知るか！」

フェイド「『リリカル銀魂』魔法少女と銀髪の侍と白銀の刀』始まります」

第十四訓：鎌で遊んではいけません！

「」はアースラの食堂

『思えばここに連中は、アニメの世界だと知っているのか？』
銀龍が疑問に思い訪ねる。

「リンディ艦長とクロノには、この世界がアニメの世界である事を教えてある」

「まあ最初はリンディ艦長達も、自分達がアニメのキャラクターである事には信じられなかつたみたいだがな」

近藤が腕を組んで言つ。

そりやあそうだ。自分達がアニメのキャラクターで、住んでいる世界が架空の世界だなんて、すぐに信じられるわけがない。

「ちょっとといいかな？」

なのは達を送りに行つたクロノが、戻つてきた。

「銀時。貴方に聞きたい事があります」

「あ？ 何だ？ 失望官さん」

「失望官じやない！ 執務官だ！！ いい加減覚えろ！」

「わーつたよ」

銀時は、手をヒラヒラ動かしながら答えた。

クロノが、口ホンと咳をする。

「貴方はあの金髪の魔導師と一緒に行動していた。彼女の目的は何だ？」

真剣な表情で銀時に尋ねるクロノ。

だが、銀時は。

「あつ、すんませーん。チヨコレートパフェお願いしまーす。え？
話何だつけ？」

「人の話を聞けエエエエー！」

叫びながらクロノは、強くテーブルを叩いた。

「あーはいはい。アイツの目的ね」

「ちゃんと聞いてたのか！？」

クロノは肩で息をしている。

「おいおい、もう疲れたのか？新ハだつたらもつとイケるぜ？」

「聞かれた質問にだけ答えろ！！それに新ハつて誰だ！？」

『落ち着いたらどうだクロノよ』

銀龍に言われて落ち着くクロノ。

「質問の答ね。目的はわかんねーよ。俺人質みたいなもんだつたら

「うかうか……」

クロノはそれで引いた。

「明日の会議で、君達の事を紹介する。遅れずに来てください」

「へいへい」

銀時は軽く返事をし、クロノは食堂を去つていった。

*

翌日。

アースラの会議室。

局員達が椅子に座つてゐる。

その中には万事屋、真選組、なのはとコーンの姿もあつた。なのはとユーノは、緊張のせいか表情が固い。

リンディが局員達に、これから之事について説明している。

「……というわけで本日をもつて、本艦の任務はジュエルシードの回収に変更されます」

局員を見渡しながらリンディが言つ。

「また、今回は特例として問題のロストロギアの発見者であり、結界魔導師でもある」こちら
リンディがユーノを見る。

「はい！ コーノ・スクライアです！」

コーノは緊張しながら立ち上がり、自己紹介をした。

「それから彼の協力者でもある現地の魔導師さん」

「た…高町なのはです！」

なのはもコーノ程ではないが、緊張しながら自己紹介をした。

「最後に真選組以外の一般の協力者です」

『主よ』

銀龍が喋った事にやはり皆が驚いた。

銀時と銀龍はそれを無視した。

「たくつ、しようがねえなア」

メンドくさそーに銀時は立ち上がった。

「どーも。坂田銀時です。趣味は糖分摂取で、キャプテンを志望してまーす」

緊張した様子もなく、ダラけた声で自己紹介する。

『私はこの主の相棒の銀龍だ』

銀龍も挨拶をした。

「え…えつと…彼らが臨時局員となつて事態にあたつてくれます」「よろしくお願ひします！」

なのは、コーノは頭を下げて挨拶する。

銀時は椅子に座つて欠伸^{あくび}をかいっている。

真選組の三人はそれを見て頭を抱えた。

*

森の中。

なのは達は管理局が見つけたジュエルシード発見場所にいた。

そこには不死鳥のような姿の巨大な怪鳥がいた。怪鳥は、コーノの

緑色の鎖に繋がれて鳴き声を上げながら暴れる。

「あ～あ～ダメでさア、ゴー」

そつ言いながらゴーに近づいたのは沖田だった。

「沖田さん？」

「鎖の締め具合いが甘えぜ。もつとキツく締めな」

そつ言つて沖田は、一本の鎖を思いつきり引っ張つた。

「グアアアアアア！」

怪鳥は先ほどよりも大きな悲鳴を上げながら暴れた。

「おつ、なかなかいい悲鳴上げるじゃねえか。道具持つてくりやあよかつたな～」

沖田は、道具を持つてこなかつた事を心底後悔した。

「あの……この鎖は相手を痛ぶるための物じゃないんですけど……」

ゴーは、やんわりと沖田に言つた。

「他に道具はねえのかイ？」

「いや……それは……」

沖田の質問に、ゴーは困った顔をする。

「じゃあ鎖の数もつと増やしな」

「いや貴方、鬼？」

二人がそんなやり取りをしてる間に、なのははジュエルシードを封印した。

「あ～全然イジメ足りなかつたけど、仕方ねえや」

沖田は少し残念そうな顔をした。

そんな沖田を見て、なのはとゴーは顔を引きつらせた。

*

遺跡。

フェイントとアルフがいた。

「フェイント。ダメだ。また空振りみたいだ」

「やう」

フェイントは田の前にある遺跡を見つめた。

「やつぱり向こうに気付かれずに、隠れて探すのは難しいよ」「うん。でも、もう少し頑張ろう」

フェイトは空を見上げた。

（銀時……今頃どうしてるかな？）

*

時の庭園。

プレシアは一人王座に座っていた。

（フェイト……今頃、私のためにジュエルシーードを集めてるのかしら……）

プレシアは考えた。

（坂田銀時……あの男の言葉を聞いてから……何故かフェイトの事を考えるようになつたわ……）

銀時に言われた言葉を思い出す。

「ああ……そうか……」

プレシアは気付いた。

「フェイトはフェイト。あの子はアリシアの代わりなんかじゃない……」「こんな事に今まで気付かなかつたなんて……」

プレシアはため息をついた。

「アリシアもフェイトも私の娘。私は一人の母親」

ようやく気付いた真実。

プレシアは、自分にこの事を気付かせてくれた男を思い浮かべた。

「銀時……魔法も使えないただの人間が、この大魔導師に向かつてあんな事を言うなんて……いい度胸をしているわ」

プレシアは短く笑つた。

「……自分の大切なものを……自分で傷つけていたなんて……」

プレシアは自嘲の笑みを浮かべた。それからプレシアの表情は、少しづつ暗くなつていった。

「何故……」

手が震える。

「何故……やつと大切なものに気付いたのに…」

目には涙が浮かぶ。

「私は死に近づいていくの?」

あの男のお陰でようやく気付いたのに。フェイトが大事だつて気付いたのに。

プレシアは両手で顔を覆つた。

「…フェイト…」

自分の娘の名を言いながら、プレシアは涙を流した。

*

クロノとオペレーターのハイミィ・コモエッタがフェイトについて調べていた。

「フェイト・テスター。かつての大魔導師と同じファミリーネームだ」

画面を見ながらクロノが言った。

「じゃあ、その関係者かな?」

「わからない。偽名かもしだれ。でも、もしかしたら、その大魔導師と繋がりがあるかもしだれ」

*

銀時達がアースラに移つてから十日目。なのはが回収したジュエルシードは8、9、10の計三つ。

一方、フェイトが回収した数は2、5の計一つ。残るジュエルシードは六つ。だが、その残り六つが見つからずにいた。

銀時達は食堂にいた。

それぞれ料理を持って、席に着いたのだが。

「…………」

なのはとユーノは、苦い顔をしていた。原因は銀時と土方についた。

銀時は白い」飯の上に大量の『小豆』をかけた。

土方はカツ丼の上に大量の『マヨネーズ』をかけていた。

小豆テソコ盛りの『宇治銀時丼』と、マヨネーズたっぷりの『カツ丼土方スペシャル』。

「銀さん……土方さん……それは？」

なのはは恐る恐る聞いてみた。

「ん？ 宇治銀時丼だ」

「土方スペシャルだ」

一人はそう答えた。

「食うか？」

銀時がなのはに宇治銀時丼を差し出した。

『主……さすがにそれは』

「あの……じゃあ……一口だけ」

『なのは！？』

銀龍は驚いた。

「やめとけ。そんなのまずいに決まってる」

土方が言つ。

「お前の犬の餌と一緒にするな」

「何を！？」

銀時と土方は睨み合つている。

なのははと言つと。

ゆつくりと宇治銀時丼に箸を伸ばし、少し掘んで口の中に入れた。もぐもぐ、と口の中で噛んで飲み込んだ。

「おいしい」

「おつ、マジで」

銀時は少し身を乗り出す。

「うん！ 涙くおいしいよ銀さん！」

なのはは田を輝かせている。

「おおっ！ やつとこの味がわかる奴に出会えたぜ！」

なのはと黙つ同士が見つかって大喜びする。

『マジで?』

その場に居た皆が呟いた。

「万事屋」

「何だ」「」

近藤が銀時に声を掛けた。

「フェイトちゃんを管理局に保護を頼まなくて良いのか?」

近藤が銀時に聞く。

公園の時に、体を張つてまでフェイト達を護つたのだ。銀時なら、リンディ艦長に頼んでフェイト達を保護して貰おうと考えそうなのだが。

「今、アイツらを管理局に保護しても、何の解決にもならないんだよ」

宇治銀時丼を食べながら銀時は答えた。その顔は険しかった。

「何かワケありか? 万事屋」

近藤が銀時に尋ねた。

「ああ。まあな」

銀時は、丼と箸をテーブルに置いた。

「アイツはよお。ガキのくせに一人で何でも背負おつとして、無茶ばっかする厄介なヤツなんだよ」

そう言つて銀時は頬杖をついた。

「銀さん」

「ん?」

なのはが唐突に銀時に話しかける。

「私もね。小さい頃はよく一人だつたんだ」

「… なんだ」

銀時は頬杖を解いて話を聞く。周りの皆も黙つて話を聞いてる。

「私が小さい頃に、お父さんが仕事で大怪我しちゃつて… しばらくベッドから動けなかつた事があるの」

なのはは話を続ける。

「喫茶店も始めたばかりで、まだ人気はなかったから、お兄ちゃんやお母さんもずっと忙しくて」

「…………」

なのはの話を、銀時は黙つて聞いてる。

話をしている時の、なのはの顔は少し寂しい表情をしていた。

「お姉ちゃんは、ずっとお父さんの看病で……だから私、割と最近まで家にいる事が多かったの」

そう言って、なのはは笑顔を作った。

「銀さん」

「ん？」

「一人ぼっちの子にしてあげるのは、大丈夫つて優しく言う事でも、心配する事でもないと思つんだ」

「…………」

銀時は黙つて、なのはの答を待つ。

「同じ気持ちを分け合える事。悲しい気持ちも寂しい気持ちも半分ここにできる事だと思うんですね」

なのはが答を言う。

答を聞いた銀時は、静かに目を閉じた。

銀時も最初は一人だった。家族もいない。一人で生きてきた。そんな銀時を一人の人物が拾つた。

それから銀時には仲間ができた。気持ちを分け合い、解り合える大切な仲間。

だが、その仲間の多くを天人との譲夷戦争で失つてしまった。

そして時を経て、銀時に新しい仲間。いや、家族と呼べる者達ができた。

銀時は目を開けた。

「… そうだな」

そう言って銀時は微笑んだ。

その時、アースラ内に緊急事態のアラームが鳴った。

第十四訓：鎌で遊んではいけません！（後書き）

ナナフシ「次回は竜巻と対決」

銀時「俺も行くのか？」

ナナフシ「それは次回を待つていてくださいー。」

第十五訓・乱入者つているんだね（前書き）

ナナフシ「調子に乗つて三話連続投稿」

銀時「おい！」

ナナフシ「今回は『黒神』さんのリクエストです」

銀時「『リリカル銀魂』魔法少女と銀髪の侍と白銀の刀』始まる

ぞ」

第十五訓・乱入者つているんだね

曇天の海。

海上には巨大な金色の魔法陣が展開されていた。

「アルタス、クルタス、エイギアス…」

魔法陣の上には、呪文を唱えてるフェイトがいた。
魔法陣から少し離れた場所には、狼形態のアルフが心配そうにフェイトを見つめていた。

（海の中にあるジュエルシードの位置を特定するために、電気の魔力流を海に叩き込んで強制発動させる。それは間違つてないけど…）
アルフの表情が険しくなる。

「はああああ…！」

呪文を唱え終えたフェイトが、海に向かつて巨大な雷を放った。
海から六つのジュエルシードの光の柱が現れる。

「見つけた…残り六つ！」

フェイトの呼吸が荒くなる。

（これだけの魔力を打ち込んで、さらに全てを封印するなんて…いくらフェイトの魔力でも絶対限界を超えてる…）

フェイトの心配をしながら、アルフは数日前まで自分達と一緒にいた、銀髪の男を思い浮かべた。

（銀時…あんたなら…フェイトを上手く抑えられたのかな？）
アルフが考えていると、

「アルフ！」

フェイトがアルフに声をかけた。

「空間結界とサポートお願い！」

「あ…ああ…任せといて！」

フェイトの言葉でアルフは考えを切り替えた。

（弱気になるな！あたしはフェイトの使い魔なんだ！銀時は体を張

つてフェイトを護つたじやないか！だつたら…

アルフは決意を固めた眼をする。

（あたしも全力でフェイトを護るんだ！！）

フェイト達の前で、ジュエルシードの光は巨大な竜巻になつた。

「いくよバルディッシュ。頑張ろ！」

バルディッシュを構えて、フェイトは嵐の中を飛んだ。

*

緊急事態のアラームを聞いた銀時達は、ブリッジに入つた。

銀時達は画面を見た。ジュエルシードの力に弾き飛ばされても必死に戦うフェイトの姿が映つていた。

「フェイト！」

「フェイトちゃん！」

銀時となのはが、フェイトの名を叫んだ。

「なんとも呆れた無茶する子達だわ！」

画面を見ながらリンディが呆れ半分、心配半分に言った。

「無謀ですね。間違いなく自滅します」

クロノが悪びれた様子もなく言った。

その言葉に、銀時は眉を顰めた。

「あれは個人が出せる魔力の限界を越えている」

「あの…私急いで現場に行きます！」

なのはが、ブリッジの転送装置に行こうとした時、

「その必要はないよ。放つておけば、あの子は自滅する」

クロノがそれを止めた。

「…？」

クロノの言葉に、なのはは驚いた顔をして動きを止めた。

銀時と真選組の三人は、表情を険しくした。

「仮に自滅しなかつたとしても、力を使い果たしたところを叩けばいい。」

「でも……」

クロノの非情な言葉に、なのはは戸惑つた。

「今、うちに捕獲の準備を」

「了解」

クロノの指示を受けたオペレーターが準備をする。

「私達は、常に最善の選択をしなきゃいけないの。残酷に見えるかもしれないけど、これが現実よ」

リンディが険しい表情で画面を見上げた。

フェイトは、まだジュエルシードを封印しようと必死に戦っていた。画面を見上げていた銀時が口を開いた。

「最善の選択？ 最低の選択の間違いだろ」

「何だと！？」

クロノは、振り返つて銀時を睨んだ。

「俺達のいた世界にも、幕府つて組織があるが……ビツヤーハーメーラも、幕府と同じくらい腐つてゐてえだな」

「貴様……口を慎め！……」

クロノが銀時に向かつて叫んだ。

直後、銀時の眼がカツと見開かれた。

「目の前で苦しんでるヤツらを救おうともしねーで、世界を管理するなんて大層な事吐かしてんじゃねエエエ……！」

銀時の怒声がブリッジに響き渡つた。

その声にクロノとリンディだけでなく、ブリッジにいる局員全員がたじろいだ。

『主の言う通りだ！』

銀龍も流石に怒りだして怒鳴つて叫びだす。

『世界を救う前に、目の前で必死に戦つてゐる少女を救つたらどうなんだ！？ 苦しんでる女の子を見捨てるなんて、お前ら薄情者以前に、そこらの罪人と変わりはしない屑野郎だ！』

「ぞ……罪人！？」

銀龍がリンディ達に向かつて怒鳴つた。

世界を救う為とは言え他人の命を見捨てるような行為……いや、他人の命を犠牲にしてまで自分の都合勝手な正義を突き通すような行為は偽善な考え方で銀龍が怒らない訳には行かなかつた。

「き……君達は……！」

銀時と銀龍の言葉に、クロノは歯を食いしばる。

「今のはクロノ達が悪い、そして万事屋の言つとおりだ」と土方は鋭い目線でクロノ達をにらみつける。

土方は、静かに煙草とライターを取り出した。

「確かに何を優先させるべきかは、俺にもわかる。だがな、目の前で弱ってるガキを見捨てるテメーらを見ているだけで虫唾が走るぜ」「土方さんまで！？」

土方の言葉に、クロノは大きく目を見開いた。
続いて沖田が言った。

「田の前で苦しんでる奴がいたら、いい奴だろーが悪い奴だろーが手え差し伸べる。でしたよね？近藤さん」

「その通りだ」

沖田の言葉に、近藤は大きく頷いた。

それから近藤はリンディを見つめた。

「リンディ艦長。俺達はあなたの部下でも管理局の者でもない」隣にいる土方と沖田も、目を鋭くしてリンディを見つめた。

「俺達は真選組だ！」

毅然とした態度で近藤が言い放つた。

銀時達や真選組の言葉に、クロノは表情をどんどん険しくした。

「貴方達は、事の重大さがわかっているのか！？ おふざけはその変な天然パーーマに変なマヨネーズ方のライターだけにしろ！」

クロノの禁断台詞についてブチキレた銀時と土方は、ついに怒り任せにクロノをボロボロ二した。

2人の猛攻にクロノの断末魔が響きだした。

テメー、よくも語りてはいけない」と言いやがつたなああああ

もはや2人の怒りを止められることは出来ない。

いやむしN止めたくでもそこしたら直分達が差し込まれたけて
あつた。

6

*

「たく…コレだからお坊ちやま気取りの糞ガキは気にくわねえ」「反省してろボケが」

ボロボロにされたクロノは土下座をして涙を流しながらも謝り続ける。

「コレには流石のコンティも苦笑して…

「く……クロノ、もう下がって良いわよ」
リンディに言われて、クロノは下がった。

銀時はなのはに近づいてなのは自身の気持ちを聞きに来た。

「なのは……てめは、フェイトを助けたいか？」

「はい！私は…フェイトちゃんを助けたいです！」

なのはの言葉に、なのはは決意のこもったまなざしでそう言つ。銀時は『OK』と言つと、ユーノに振り向く。

「ユーノ、転送魔法でなのはをフェイトの元に移動せろ…」

「は・・・はい」

ユーノの足元から魔法陣が現れた。なのはもユーノの魔法陣に入ろうとしたその時だった。

「待つて！」

声が聞こえ、なのはは振り向くと、リンクディーだった。リンクディーはオペレータに目配せをし、転送装置を起動させた。

「行動…許可します。気をつけてね」

「……はい、ありがとうございます！」

「急ごう、なのは！」

リンクディーにお礼を言つて、なのははユーノと一緒に転送装置に向かつた。

*

荒れ狂う海上で、フェイトはバルディッシュを構えて竜巻に突っ込むとする。もう何度弾かれたかわからない。バルディッシュの魔力の刃も失った。

それでもジュエルシードを封印しようとした時。

「…！」

バリアジャケットを着て、レイジングハートを持った、なのはが現れた。

「フェイトの邪魔するなアアア…！」

なのはに気付いたアルフが、噛み付こうとする。

間にユーノが入り、魔法陣を展開してアルフを止めた。

「待ってくれ！僕達は戦いにきたんじゃない！」

「えっ！？」

アルフが驚きの声を上げる。

「今はジュエルシードの封印を！」

叫んで、ユーノは巨大な緑色の魔法陣を展開した。魔法陣から緑色の鎖を放ち、竜巻に巻きつけて動きを抑える。

「フェイトちゃん！」

なのはは、フェイトの隣に移動した。

「二人でジュエルシードを止めよう！」

レイジングハートの赤い玉から、桜色の魔力が出る。桜色の魔力は、バルディッシュの黄色い玉に入つていった。

「Power charge」

バルディッシュに魔力の刃が戻る。

「Supplying complete」

フェイトは隣にいる、なのはに顔を向けた。

なのはは、頷いて応える。

ユーノが必死に竜巻を抑える。途中からアルフもオレンジ色の鎖を放つて、一緒に竜巻を抑える。

「ユーノ君とアルフさんが止めてる今のうちに！」

隣にいるフェイトに顔を向ける。

「二人で”せーの！”で一気に封印するよー！」

レイジングハートを構える。

「デイバインバスター、フルパワー！」

「All right, my master」

なのはの足下に、巨大な桜色の魔法陣が展開された。

フェイトもバルディッシュを構えて、巨大な金色の魔法陣を展開する。

「せーの！」

なのはが合図する。

「サンダー…」

「ディバイン…」

二人ともデバイスを構える。

「レイジー…！」

巨大な雷が、竜巻に向かつて放たれた。

「バスター…！」

桜色の閃光が竜巻に直撃した。

金色の光と桜色の光が六つの竜巻を飲み込んだ。

*

アースラのブリッジ。

「ジュエルシード、六個全ての封印を確認しました！」

オペレーターのヒイミイが報告する。

「な…なんてデタラメな…！」

クロノが驚く。

クロノだけでなく、ブリッジにいる全員が驚いていた。

「こいつあスゲーや」

画面を見て、沖田が呟いた。

銀時は小さく微笑んだ。

その時だった。

「未確認物体がジュエルシードに近づいています！」

オペレーターが声を上げた。

「…！」

皆は驚いた。

「モニターに出せる?」

「はー！」

モニターには機械らしきものが映っていた。

「おいおい、まさか雷雅の所の！」

「雷雅！？あいつもこの世界に来ていやがるのか！？」

土方は驚いた。

雷雅は自分の世界では殺人犯として指名手配されているのだ。
しかも全員浪人だ。

戦闘狂である雷雅は強者を求めているのだ。
機械は人型で、背中には悪魔の翼みたいのがあり、腰には刀を挿してある。

「ちつ！」

銀時は転送装置に向かった。

「何処に行くの！？」

「俺も行くんだよ！」

そう言つと銀時は行ってしまった。

*

海上。

フェイトと、なのはの前に六つのジュエルシードが現れた。

嵐は収まり、雲が割れて太陽の光が差し込む。

「えつと…半分こ…で良いよね？」

「…………

フェイトは無言で頷いた。

半分ずつジュエルシードを回収し、全てのジュエルシードを封印した。

回収を終えたフェイトは、アルフを連れて、その場から立ち去った。

その時だった。

「！！」

機械がフェイントとなのはの元に向かってきているのだ。
しかも腰にある刀を抜いて……。

「何あれ！？」

なのはは驚いていた。

フェイントは魔力弾を撃つが刀で弾かれる。

「！！」

フェイントは驚いた。

そして、そのままフェイントに刀を振り下ろしてきた。

「フェイントちゃん！！」

なのはが叫んだ。

フェイントは目を閉じた。

ガキイイイイイ！

金属同士がぶつかる音がした。

目を開けると銀色の魔力を纏つており、その魔力で出来たドラゴンの翼を広げた銀時が銀龍を使って、そいつの攻撃を防いでいた。

「銀時！」

フェイントは銀時の名前を呼んだ。

「危ねえ……」

銀時はギリギリだな、と言つ感じだった。

そして、そのまま銀龍を振るい、機械は後ろに後退する。

「大丈夫かフェイント？」

銀時が言つ。

「うん」

フェイトは答える。

「さてと……やりますか」

銀時は銀龍を構えた。

『「そうだな」』

そして動き出した。

*

「銀時が魔法を使っているだと！？」

クロノは驚いていた。

クロノだけじゃない、アースラ全員が驚いていた。

「え？ あれって魔法なの？」

「凄いですねエ旦那。前から使っているのは見ていやしたが、まさか魔法だったとは」

「銀龍のおかげってたな」

土方の言葉を聞いてリンディは思つ。

（銀龍……デバイスでもないのに持ち主が魔力を使える様にするなんて……一体）

リンディは不思議に思つた。

*

「オラア！」

銀時が銀龍を振り下ろす。

機械はそれを刀で防ぐ。

「ちつ！」

銀時はそのまま蹴飛ばした。

シルバー・オブ・アーマー
白銀の鎧のおかげで身体能力も上がりつており、蹴りは通常より強かつた。

機械はそれを喰らい、怯む。

銀時は銀龍を鞘に納めた。

そして、一瞬にして相手に近づき、抜刀した。すると機械にいくつもの斬撃に入る。

「瞬銀」

銀時は呟いた。

だが、機械はまだ壊れては居なかつた。

「随分頑丈で」

コアに当たつてなかつた様だ。

銀時は魔力を溜め始める。

（あの技を使うか）

銀時はそう考えた。

それを狙う様に肩にあつたランチャー一つを銀時に向ける。

「ちつ！」

銀時は弾を切り裂くつもりだつた。

だが、ランチャーの先端に何かが溜められている。

『主！あれは魔法の砲撃だ！』

銀龍は言った。

「ちつ！なら！」

銀時はそのまま魔力を溜めるのに集中する。そして……。

機械から魔法が放たれた。

「こつちも丁度終わつたぜ！」

銀時がそう言つと魔力を白銀の龍にして撃ちだした。

「白天龍！」

それはだいぶ大きく、しかもスピードがだいぶあつた。

「あつ、通常より溜めすぎたかも」

銀時がそう呟いた。

そのまま相手が放つた魔法は打ち消され、機械を白銀の龍が飲み込んだ。

跡形もなく吹っ飛んだ。

『……』

その場に居たなのはやフェイトはもちろん、アースラの皆までもが驚いていた。

白銀の龍はそのまま天に昇つていった。

『主……溜めすぎだ。あやつなら中間ぐらいで十分だ』

「やつぱ？」

銀時と銀龍は普通に話をしていた。

フェイトはそのまま去りつとする。

「待てフェイト」

銀時がフェイトを呼び止めた。

「また無茶したら一人とも拳骨だからな」

「……！」

銀時の言葉にフェイトは田を見開いて、肩を一瞬振るわせた。アルフも驚いてる。

それからフェイトは、アルフを連れて姿を消した。

「フェイトちゃん…」

フェイト達が去った後に、なのはは小さく呟いた。

*

マンションに向かうフェイトとアルフ。

（銀時……私達の事……心配してくれてたんだ……）

フェイトは、胸に手を当てた。

（ありがとう銀時……）

心中でお札を読しながら、フロイトはアルフと共にマンションに戻った。

第十五訓・乱入者つているんだね（後書き）

ナナフシ「『黒神』さんがリクエストした部分を出しました」

銀時「何処からだ？」

ナナフシ「何処からと言つと、「最善の選択？最低の選択の間違いだろ」から「リンクティにお礼を言つて、なのははユーノと一緒に転送装置に向かつた。」の所までが『黒神』さんのリクエストです。これでよかつたですか『黒神』さん」

銀時「読者の皆、この気まま野郎に付き合つてくれてありがとうございます！」

ナナフシ「それは連続投稿を言つてているのか！？」

銀時「そう」

なのは「それではまた次回」

はくとんりゅう
白天龍

魔力を白銀の龍の姿で打ち出す技。

その威力はSランク以上。魔力の溜め方にはよつてはSランク以上にもなるが、そうなると少しに溜めに時間が掛かる。

魔力が溜まるほど、大きさと速さは上がる。

第十六訓：決闘に横槍を入れるな！（前書き）

ナナフシ「アンケート結果発表！」

銀時「イエ～イ」

ナナフシ「銀さん！？ノリ悪いよ！？」

銀時「ダルいしょ～。さつさとやううぜ」

ナナフシ「たくつ！それでは結果です」

スバルが銀時同様『喋る刀』を持たせる

- | | |
|------|----|
| 1、賛成 | 4票 |
| 2、反対 | 1票 |

『銀龍』達『喋る刀』五つをどっちの呼び方にするか

- | | |
|--------|----|
| 1、五天魔刀 | 2票 |
| 2、五天神刀 | 4票 |

ナナフシ「と言つ訳で、スバルは持つ事になりました」

銀時「なるほど」

ナナフシ「で、『銀龍』達『喋る刀』五本は『五天神刀』となりました」

銀龍『そうか』

ナナフシ「後書きで投稿された『喋る刀』を紹介します」

銀時「それじや、『リリカル銀魂』魔法少女と銀髪の侍と白銀の刀

』『始まるぜ！』

第十六訓：決闘に横槍を入れるな！

会議室。

銀時、銀龍、真選組、なのは、ユーノ、クロノとリンクディーが集まつていた。

「まつたく。勝手にジュエルシードを半分ずつ分けて…」

壁に寄り掛かりながら、クロノがため息をついた。

「す…すみません」

なのはが謝る。

「何もしようとした奴が、文句言つ資格があんのか？」「何！？」

銀時の言葉に、クロノは食つてかかる。

「やめなさいクロノ」

「…はい」

リンクディーに言われて、クロノは渋々下がつた。

「で？ 今回の事件について、何かわかったのか？」

煙草をくわえながら土方が尋ねた。

「ああ。エイミィ映像を」

クロノはテーブルに歩み寄つた。

「はいはーい」

スピーカーからエイミィの声が聞こえた。

エイミィの声の後、テーブルの中心に映像が映し出された。映し出されたのはプレシアだった。

「あら」

「…」

映像を見て、リンクディーは少し驚き、銀時は表情を険しくした。

「一体誰ですかイ？」

沖田がクロノに尋ねた。

「僕らと同じミッドルダ出身の魔導師。プレシア・テスタークッサ

だ

映像を見ながらクロノが説明する。

「専門は次元航行エネルギーの開発。偉大な大魔導師だったが、違法研究と事故によって放逐された人物です」

「テスタロッサって…」

名前を聞いて、なのはが呟いた。

「あのフェイトという少女はおそれく」

「フレシアの娘…ね」

リンディが険しい表情で呟いた。

なのはは、フレシアの映像を見つめる。

「この人が、フェイトちゃんのお母さん…」

「つまり、この女が今回の黒幕ってことか…」

土方が腕を組んで言つた。

「フレシア・テスタロッサは、違法な素材を使つた実験を行い失敗。中規模次元震を起こした事で中央を追放され、それからしばらくの内に行方不明となる。今わかつてゐる事はこれくらいです」

クロノが説明を終える。

「ご苦労様。貴方達は一休みした方がいいわね」

なのは達に顔を向けて、リンディが言つた。

「あ…でも…」

「特になのはさんは、長く学校休みっぱなしにするのはよくないでしょつ」

優しく微笑みながらリンディが言つた。

「一時帰宅を許可します。ご家族と学校に少し顔を見せた方がいいでしょつ」

そう言つてリンディは席を立つた。

「銀さんと真選組の畠さんも、その間自由に休んでください」

『つむ、そうか』

銀龍は答えた。

銀時は険しい表情で、ジッとフレシアの映像を見つめた。

(プレシア……)

*

時の庭園。

フェイトとアルフは、プレシアにこれまでの事を報告して来た。

プレシアは玉座に座り、フェイトは部屋の中心に立つてゐる。

「……ジュエルシードを、全ては回収できませんでした……」

怯えながらフェイトが報告する。

「……回収したジュエルシードの数は……全部で九つ……」

プレシアは、宙に佇む九つのジュエルシードを見つめた。

「「「……ごめんなさい、母さん……」」

顔を俯かせて、フェイトはプレシアに謝つた。

「……残りのジュエルシードを必ず回収するのよ。いいわねフェイト？」

「え……あ……はい……」

フェイトは、少し呆然とした顔で返事をした。

いつもなら、ここでプレシアの折檻が始まるのだが、今回は違つた。

「何をボーッとしているの？早く行きなさい」

「……はい……」

言われてフェイトは部屋を出た。

扉の前で待つてたアルフは、プレシアの折檻がなかつた事を不思議に思いながら、フェイトの後を歩いた。

二人がいなくなり、部屋にはプレシアだけになつた。

「ゴホッ……ゴホッ……！」

プレシアは口を押さえて咳込んだ。自分の手は赤く染まり、床には血の池ができている。

「……私には……もう時間がないわ……」

口元に付いてる血を拭きながら、プレシアは顔を上げた。

「こんな私についても… フェイトは幸せにはなれない…」

自分の死を覚悟しながら、プレシアはフェイトの幸せを考えた。

*

高町家。

「…………とまあ、そんな感じの十日間でしたのよ~」

「まあ、そうなんですか」

リンディーと、なのはの母親の高町桃子は、意氣投合して楽しく談笑している。

「ははは…」

一人の様子を見て、なのはとユーノは内心苦笑いを浮かべていた。一方、真選組は特に用事も予定もないでの、海鳴市の街を見て回った。

*

銀時はフェイト達が使つてゐるマンションの部屋にいた。部屋の中には、フェイト達の姿はなかった。

「やっぱいねーか

頭を搔きながら部屋を見渡した。

「まあ向こうは、管理局と一緒にいる俺とは会いたくねーと思つてゐるだろうな」

言いながら銀時は、部屋を出よつとした。扉を開けて、一度振り返つて誰もいない部屋を見た。

「…またな」

小さく呟いて、銀時は部屋を出て扉を閉めた。

*

時刻は夕方。

銀時は、高町家を田指して歩いていた。

「あつ、銀さん！」

歩いていると、なのはと出会った。

「なのは。どうした？」

「心配になつたから、迎えにきました

無邪気な笑顔で、なのはが答えた。

「そうか。わざわざ悪いな

「いいえ」

二人は並んで歩いた。

なのはは、隣を歩く銀時を見上げた。

「あの…銀さん」

「何だ？」

「フェイトちやんと居る時何してたんですか？」

「あ？ああ、特に……つてか、何でそんな事聞くんだ？」

「い、いえ……特に意味はないんです」

なのはは銀時にそう言つた。

「なのは」

「何ですか？」

呼ばれて、なのはは銀時を見上げた。

「たぶん近い内に、フェイトの奴はジュエルシードを手に入れるために、なのはの前に現れる」

さつきまでと違つて、銀時は真剣な表情で話す。

「はい」

なのはも真剣な表情で、銀時の話を聞く。

「わかつてゐとは思つうが、フェイトは強えぞ」

「はい」

なのはは、頷いて答える。

「フヒイイトちやんと戦うのは辛いけど……でも私、どうしてもフヒイイトちやんを助けたいんですよ!」

強い決意を表すように、力強くなのはが言った。

なのはの、決意の顔を見て銀時は微笑んだ。

「どうやら、俺の出番はねえみてーだな」

「銀ちゃん…」

「なのは」

銀時は、なのはを見た。

「思いつきつぶつかつていけ!」

「はい!」

銀時の言葉に、なのはは笑顔で力強く答えた。

*

二日後の早朝。

時間はAM5:27。

なのは達は家の門の前に立つてゐる。

「ふあ~。何もこんな朝早くに出なくともよくな?」

欠伸をかきながら、銀時は背伸びをする。

「俺、朝弱いんだよ」

「ごめんなさい銀ちゃん」

なのはは謝った。

『主はいつもこんな感じだ。気にするな』

銀龍がそう言つた。

「お前ら。喋つてねーで、わつと行くぞ」

そう言って土方が歩き出した。

*

海鳴臨海公園。

時間はAM5：55。

なのは、銀時、ユーノの三人がいた。真選組の三人は公園の入口で待機してゐる。

なのはは小さく深呼吸をする。

「ここなら…いいよ」

なのはが口を開いた。

「出てきて、フェイトちゃん！」

姿の見えないフェイトに向かつて、なのはが叫んだ。

朝の冷たい風が、頬に当たる。風に当たつて林がざわつく。

なのはと銀時は、後ろを振り返つた。

バルディッシュを持つたフェイトが立つてゐた。隣には狼形態のアルフがいる。

「銀時…」

銀時を見つめながら、フェイトが呟いた。

「安心しろ。こいつあお前と、なのはの戦いだ。俺とユーノは余計な手は出さねえ」

そう言って銀時は腕を組んだ。

なのははバリアジャケットを着て、レイジングハートを持つ。

「ただ捨てればいいってわけじゃないよね？」

片手にレイジングハートを持つて、なのはは言葉を繋げる。

「逃げればいいってわけでもない」

真つ直ぐにフェイトを見つめる。

「きつかけはジュエルシード…だから賭けよつ。お互いが持つてゐる全部のジュエルシードを…」

「Put out」

なのはの周囲にジュエルシードが現れる。

「Put out」

フェイントの周囲にも九つのジュエルシードが出る。

「それからだよ。全部それから」

両手でレイジングハートを構える。

フェイントも下段にバルディッシュを構える。

「私達の全ではまだ始まつてすらいない……」

銀時とユーノ、アルフが黙つて見守る。

「だから、本当の自分を始めるために……」

対峙する二人の魔導師。

「始めよう。最初で最後の本気の勝負!」

*

アースラ。

「戦闘開始みたいだね」

なのはとフェイントの戦いの様子を、画面で見ながらエイミィが言った。隣にはクロノが立っている。

「ああ」

クロノとエイミィは、ただ戦いの様子を見守つているだけではない。なのはが戦闘で時間を稼いでる内に、こちひで帰還先追跡をしておくという作戦だ。

「頼りにしてるんだから、逃がさないでよ」

「おう!任せとけ!」

エイミィが親指を立てて返事をした。

*

「始まるな……」

「なら、こつちもやうづぜ」

銀時は聞き覚えのある声に驚いた。

そして、声のした方向を向く。

「雷雅！」

「よオ……銀の兄貴」

雷雅はニヤリと笑つた。

ユーノとアルフは驚いている。

「様子を見に来たんだがなア……暇でな。それで丁度銀の兄貴が居たんだな」

雷雅は薙刀を構える。

「いやア……俺嫌な奴に好かれたねエ」

銀時も木刀を構える。

「勝負！」

雷雅が言つと同時にどちらも走り出した。

「オラア！」

銀時が木刀を振り下ろした。

雷雅はそれを薙刀で防ぐ。

雷雅は銀時にそのまま蹴りを入れた。

「ぐつ！」

銀時は怯む。

その隙を見逃さず、薙刀を振り下ろした。

「ちつ！」

銀時は舌打ちしながら後ろに飛んで避けた。

銀時はすぐさま雷雅の懷に入り、木刀を振り上げた。

ガソッと鈍い音が聞こえた。

雷雅の顎に直撃した。

「ぐつ！」

雷雅は一、二歩退いた。

「やつぱおもしれえ……」

「ククク」と雷雅は笑う。

「ま……今日は挨拶程度だ……また会えると良いな」
雷雅は何しに来たのか……そのまま姿を消した。
銀時は空を見た。

*

（最初は、ただ魔力が強いだけの素人だつたのに……）

フェイトは自身に迫る桜色の魔力弾を、バルディッシュュで切り裂く。

（……強い！）

フェイトもバルディッシュュを強く握り締める。

（でも……負けられない！）

フェイトは空中で静止した。

（母さんの為にも……絶対に負けられない！！）

両手でバルディッシュュを握んで、前に構える。フェイトの足下に、
巨大な金色の魔法陣が展開された。

*

「ん？ フェイトのヤツ、何か大技でも出すのか？」
ユーノ達と、地上で観戦していた銀時が目を細めた。
「マズイ！ フェイトは本気である子を潰す気だ！」
アルフが焦った声で言つ。
「つーことは……アレがフェイトの切り札ってヤツか……」

焦るアルフの隣で、銀時が冷静に言つ。

空中にいるフェイトの周囲に複数の…いや、無数の魔力弾が併む。なのはがレイジングハートを構えようとした時、

「あつ…！」

なのはの両手両足を、金色の魔法陣が拘束した。

「ライトニングバインド」

フェイトが小さく呟いた。

「なのは！今サポートを！」

ユーノが魔法陣を展開しようとした時、

「やめる、ユーノ」

銀時がそれを制した。

「余計な事はすんな」

「余計な事！？」

「で…でも銀時…フェイトのアレは本当にマズイんだよ！」

アルフが戸惑いながら言つ。

「これはアイツらの決闘だ。そいつを邪魔する事は俺が許さねえ」

今銀時の言葉には、普段にはない凄みが加わっていた。アルフとユーノは何も言い返せず、黙つて一人の様子を見守つた。

（銀さん…ありがとう）

三人の様子を見ていたなのはは、心中で銀時に礼を言つた。

「アルカス、クルタス、エイギアス…」

その間にもフェイトは、呪文を唱え続けていた。

「疾風なりし天神よ、今導きの元に撃ちかかれ。バリエル・ザリエル・ブラウゼル」

呪文を唱え終える。

「フォトンランサー・ファランクスシフト」

手を空に掲げ、バインドで拘束されてるなのはを睨み、

「打ち碎け！ファイア！！」

手をなのはに向けて振り下ろしたのを合図に、無数の魔力弾がなのはに襲い掛かる。

無数の魔力弾がなのはに降り注ぎ、爆発する。

「なのは！」

「フェイト！」

ユーノとアルフが叫んだ。銀時は黙つて見つめてる。やがて魔力弾を撃ち終える。フェイトは残つた魔力を集めて、魔力弾を作る。なのはのいる所に煙が立ち込める。フェイトは魔力弾を片手に、立ち込める煙を見つめる。やがて煙が晴れてくる。

「撃ち終わると、バインドってのも解けちゃうんだね」煙の中から、ほぼ無傷のなのはが姿を現した。

障壁を張つて、あの魔力弾の雨を防ぎきつたのだ。

「…マジでか？」

流石の銀時も、この時は驚きを隠せず少し顔を引きつらせた。

「今度は…こっちの番だよ」

レイジングハートを突き出すように構える。

「受けてみて…ディバインバスターのバリエーション！」

前方に巨大な魔法陣を展開する。

「Starlight Breaker！」

桜色の魔力がなのはの前に集まり、集束され、巨大な桜色の魔力弾が生成された。

「これが私の全力全開！」

レイジングハートを振り上げた。

「スター・ライト・ブレイカー！！！」

なのはがレイジングハートを振り下ろすと、巨大な桜色の閃光がフェイトに向かつて放たれた。

「はあ…！」

フェイトは、片手に持つてる魔力弾を桜色の閃光目掛けて放つた。

フェイトの魔力弾は、桜色の閃光に搔き消された。

「…！」

驚いたフェイトだが、すぐに障壁を張つて防御する。だが、障壁は

桜色の閃光の前に簡単に破れてしまう。
フェイトは、成す術もなく閃光の中に飲み込まれた。

*

やがて閃光が收まり、二人の姿が見えてきた。

「なのは！」

「フェイト！…」

なのはは、空中で息を切らし、フェイトはバルディッシュを手放して海に落ちていく。

「フェイトちゃん！」

海に落ちる前に、なのははフェイトを抱き抱え、バルディッシュも掴んだ。

フェイトを抱えて、なのはは銀時達の元へ飛んでいった。

「ん…」

銀時達の元へ着いたところで、フェイトが目を覚ました。

「フェイト！」

「あっ、フェイトちゃん気がついた？」

アルフとなのはが声をかけた。

「…………私…………負けたんだね…………」

フェイトの表情が暗くなつた。

「フェイト」

銀時が声をかけた。フェイトは、銀時に顔を向けた。

「よくやつたよお前は。最後まで諦めずに戦つたんだ。恥じる事なんて何もねーぜ」

そう言つて銀時は微笑んだ。

「銀時…」

銀時の言葉に、フェイトは目に涙を浮かべる。

「あんた…本当にいい奴だねえ銀時い……」

銀時の隣にいるアルフは泣いていた。

「何でお前が泣いてんだよ」

と銀時。

「Put out」

バルディッシュからジュエルシードが出てきた。

その瞬間。

「アアアアアアア！！！」

空が曇り、黒い雲から巨大な紫色の雷がフェイトに降り注いだ。

「フェイト！！！」

「フェイトちゃん！！！」

銀時となのはが叫ぶ。

九つのジュエルシードは、雲に出来た歪みの中に消えていった。よろけるフェイトを銀時が抱き抱える。

「プレシアアアアアア！！！」

雲の歪みに向かって、銀時は怒りの叫び声を上げた。

アースラでは、プレシアの居場所を突き止めようとしていた。エイミィが座標を割り出した。

リンディイが立ち上がる。

「武装局員、転送ボードから出動！任務は、プレシア・テスタロッサの身柄確保！」

*

時の庭園。プレシア・テスタロッサの部屋。

プレシアは、手で口を押さえて咳込んでいた。

「ハア…ハア…次元魔法は…もつ体が耐えられないわね……」

顔を苦痛で歪ませる。

「それに…今までこの場所も掘まれた…」

「…ブレシアは、隣に映し出されてるフェイトの姿を見つめた。」

「フェイト…よくここまで戦ったわね…」

「…フェイトを見つめながら、ブレシアは優しく微笑んだ。」

「…こんな母さんの為に…今まで、よく頑張ったわね…」

「…愛おしそうにフェイトを見つめる。」

「…銀時…アルフ…フェイトをお願い…」

「…ブレシアは、一人にフェイトの事を託した。」

「…さあ…全てを終わらせましょう」

『おまけ』

銀八「教えて」

生徒「銀八先生！」

銀八「…ハァイ、質問コーナー始めるぞ。今回のアシスタンントは」

近藤「真選組局長の近藤勲だ！」

銀八「ゴリラか」

近藤「…ちよつ！銀八先生！…？」

銀八「質問行くぞオ」

近藤「無視するな…まあ、良いか。まずはペンネーム『咲夜』さん

からの質問

『それじゃあ質問です

「うちの銀さんは棗鈴という女の子になりましたけど
銀龍や近藤達はどう思いますか？』マジで！？万事屋女になつたの
！？」

銀八「ああ、転生してな」

銀龍『主が女になつてしまつとは

土方「万事屋が女か……ブフツ」

沖田「面白そひでやア（黒笑）」

銀八「一人よからぬ事考へてるよー」と言ひつて立つてなさい」

近藤「次だ！ペンネーム『黒神』さんからの質問
『では質問、

ナナフシさんへ

第一章では桂もエリザベスも出ますか？

ミラクル へ

「でも僕のところでも出番がない気分はどうでしょうか（黒笑）

お妙へ

『リリカル銀魂シリーズ』での新ハはロリコンアイドルオタクに堕ちていますが、そんな弟を受け入れますか?』新ハ君はどんな姿でも俺の義弟だ!』

銀ハ「お前にじやねえよ!しかも殺されるぞ! 一つ曰だが」

ナナフシ「はい、出します。やっぱ桂とエリザベスも出した方が面白そうですね」

銀ハ「二つ曰だが」

ミラクル「ミラクル 定着! ? ってか、黒神! いい加減僕を出せええええええええええええええ! 交渉してきてやるうううううううううう!」

新ハは黒神さんの所に行つた。

銀ハ「行つちやつたよ! で、三つ曰だけど」

お妙「新ちゃん……新ちゃんは……ど、どんなになつても私の弟よ

銀ハ「めつちや動搖してる! ?」

近藤「と言つて『黒神』さん、廊下に立つてなさい」

銀ハ「次だな。ペンネーム『黒龍』さんからの質問

『1. クロノに質問。銀さんとマコトさんとボコボコにされた感想はどうですか?』

2・フロイトとなのばに質問。
トッサーをどう思いますか？

3. ノーノに質問。淫獣になつた「感想をひとつや。」一つ田だが「

クロノ「不愉快だ！本当の事を言つたまでだ」

銀時「ほう……まだ足りねえみてえだなア」

土方「覚悟しろよ……」

クロノ一 オサキ ああああああああああああああああああ

銀ハ あいつ等は僕」といひてなのは、アエイト

なのは、何で言えは良いんだろ……ちよつと気持ち悪いかな」「

「ユイト、何故か嫌な予感をする」

銀ハイブリットのその予感は当たると思ひませぬ。最後だから

ヨリノ一何で淫艶ですか!? 二で言ひが悲しいですよ!

銀ハ一と書ひ詠て、黒龍也ん、廊下に立てなやレ

近藤：次だな。
『ペニーム』『支配者』さんからの質問です。

なのはく、

クロノが貴方の人生を作つてエロイ目で見まくつていました。如何しますか？

沖田へ

クロノが貴方の事を土方よりも無能な変態だと罵つていました。如何しますか？

フェイトへ

クロノが貴方の人生を作つて『乳クリマンボー』をしていました如何しますか？』「一つ目からだな」

なのは「スター・ライト・ブレイカー！」

クロノ「僕そんな事してござやああああああああああああああああ！」

沖田「良い度胸ですね」

クロノ「沖田さん！？」

クロノは沖田に何処かに連れて行かれた。

その後……。

クロノ「ぎやああああああああああああああ！」

断末魔が響いた。

銀八「最後まで耐えてくれ

フュイト「サンダースマッシュヤー！」

クロノ「わやああああああああああ！」

クロノはボロボロになつた。

銀ハ「と訳で『支配者』さん。クロノを保健室に連れて行きなさい」

近藤「それだけ！？最後の質問だ。ペネーム『真王』さんからの質問

『真王』仮妻だ。間違えんな。未婚だろ？が。質問

『冷血の鬼姫に出演のオリキャラズの容体プロフィール作つたら？』

『そつちのオリキャラズを超次元学園に参加させたいんですけど…』

『雷雅は獲物をとられるのが嫌ですか？』『一つ目だが』

ナナフシ「考えようですね…誰も元にしていないからなア…まあ、作つてみます。二つ目ですけど、良いですよ」

近藤「最後だが」

雷雅「そうだなア…獲物を取られるのは嫌だな。俺が目を付けてるのに、仲間でもない奴が殺る場合はそいつを殺る」

銀ハ「相変わらず恐つ！と訳で『真王』さん。廊下に立つてなさい」

近藤「質問は以上だ！」

銀八「それではまた次回」

第十六訓：決闘に横槍を入れるな！（後書き）

ナナフシ「もうすぐ無印編が終わる」

銀時「そうだな」

ナナフシ「投稿された『喋る刀』です。まずはスバルが使う事になるやつから

名前：天虎てんこ

デザイン：鞘と柄は白虎のように白く、刀身は虎の模様が描かれて
いる。刀身は青みが掛かっているので、蒼い光を薄く放つ。

鍔は普通とは異なり、白い虎の頭部を模したような形状で、虎の口
から刀が出ているように見える。

ナナフシ「ですね。次は『麒麟』です」

名前：雷麟

デザイン：鞘と柄が黒く、刀身は黃色い。柄の先端には黒い束ねら
れた糸がある。

鍔はない。

ナナフシ「名前の投稿はありましたが、デザインは俺自身が作りま
した」

銀時「おい！」

ナナフシ「一様、『炎鳳』のデザインも紹介します」

デザイン：刀身は赤く、鳳凰が描かれており、鞘と柄は黒い。鍔は少し特殊で、羽が丸を描いた感じのやつ。

ナナフシ「これが『炎鳳』のデザインです」

銀時「最後は『玄武』を元にしたやつか……」

ナナフシ「……まだ決まってない」

銀時「は？」

ナナフシ「投稿もされてないし、俺自身も考えたがうまく見つから
ない」

銀時「おいおい」

ナナフシ「『玄武』はまだ募集します。俺も頑張らねえと」

銀時「それじゃ、また次回な」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2725z/>

リリカル銀魂～魔法少女と銀髪の侍と白銀の刀～
2011年12月20日16時51分発行